

博士論文（要約）

現代日本語の「ハズダ」に関する考察

- 「知識確認形式」という観点から -

東京大学大学院

総合文化研究科言語情報科学専攻

朴 天弘

第1章 序論

1.1 研究の背景と目的

本論文の目的は、現代日本語の文末に現れる「ハズダ」文について、「ハズダ」の様々な用法を統一的に説明することにより、「ハズダ」の基本的な意味・機能を明らかにして「ハズダ」の全体像を一つの機能から説明ができることを示すことである。「ハズダ」は、「ベシ」が持っていた機能の一つを担当することになったが、「ベシ」とは、現代日本語の「ベキダ」と「ハズダ」の2つの意味領域を持っていると言われる（中西 1969、山口 2004）。今西（1987：94）では、「ベシは<論理的推定>（現代語「ハズダ」にあたるという）をあらわすともいわれておりその意味領域の広さに注意する必要がある」といい、「ベシの意味領域は<様体性><推定性><推量性>の三段階にまたがるものと推定されよう」と述べている。このような意味の広さは、「ハズダ」にも影響しているのではないかと思う。そして、従来ムード形式として話し手の認識的判断だけでは説明できず、問題とされてきたものに対する答えを本稿では考えていきたい。まず、「ハズダ」が使われる文には、以下のような用法があると言われている。

- (1-1) a. ちょうど 20 分前に家を出たから、約束の場所までは間に合う [はずだ]。
b. （ボールペンを捜しながら）、たしかここに置いた [はずだ] けど。
c. この店のラーメンはうまい！なるほど、この店に人々が並ぶ [はずだ]¹。

¹ 『用例の表記』

①用例の番号付や傍線などは筆者によるものであり、出典がないかぎり筆者の作例である。
②本論文の全用例において、「ハズダ」や他の形式が使われるところには [] で囲む。
③韓国語のグロス表記をするとき、韓国語のローマ字の表記は Yale 式表記法にしたがう。
④韓国語の表現が長文になるときには、実践 () のところだけグロスを付ける。
④用例の出所を示す時には、【 】で示す。なお、論文の内容を引用する際、2018 年度の XXX の論文の 100 ページにある(1)の例を引用するとすれば、【XXX2018:100:(1)】のように表記する。

(1-1a)は、「本当に約束の場所まで間に合う」かどうかは話し手²にとって確認されていないが、話し手が普段通りの経験などから「約束の場所まで間に合う」と判断する場合である。一方、(1-1b)の例は、「探そうとしているボールペンをここに置いた」という記憶内容を確認する表現となっている。(1-1c)では、「あの店の前にたくさんの人々が並ぶ」ことを知った上で、後でその理由や原因となる「この店のラーメンはうまい」ということに気づき、「この店に人々が並ぶ」ということになるのは、「当然そうである」と納得する場合の表現である。このような、「ハズダ」における使用の意味³は、多くの研究者によって細分類されてきたと言える。しかし、その用法分類に注目しつつも、それらが「ハズダ」本来の意味といかなる関係にあるのかについてはそれほど究明されていない。さらに「当然の帰結が現状とくい違っている場合」を取り出して分別されてきたが、その機能を特に目立たせるのは「ハズダ」に過去の判定詞である「ダッタ」が付いた「はずだった」という組み合わせである。

(1-2) 太郎はこの薬を飲む [はずだった]。

(1-2)は、現実においては「太郎はこの薬を飲んでいない」という意味を含意させていて、反事実条件文のような反事実的な解釈ができる。このような「ハズダ」は、もはや「ハズ」の過去形式というテンスの問題から「非現実 (irealis)」を表す形式となりつつあると考えることができる。また、次の(1-3)のような場合もよくみられる。

(1-3) a. 昼ご飯に（私は）肉を食べた [はず] なんだけど、なんで夕ご飯にも肉が食べたくなくなるんだろう。

b. 鯨は哺乳類である [はずだ]。でもなんであなたは哺乳類ではないとおっしゃる？

上記の2つの例は、「ハズダ」が表す内容と現実との一対一のくい違いを表してはいないが、「ハズダ」によって持ち出される「肉を食べた」「鯨は哺乳類である」という内容が現に疑われている

『用例の文法的判断』

*：当該の表現が文法的に非文であることを示す。

#：当該の表現が文法的には問題ないが、原文の意味と違う意味になることを示す。

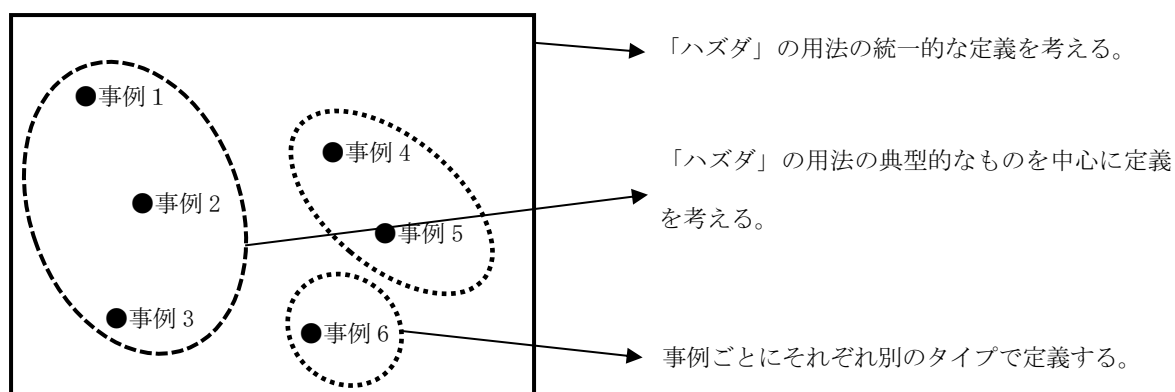
?：文法的に非文ではないが、意味的に不自然であることを示す。度合いによっては、「??」も併記する。

² 本稿では、「ハズダ」を用いて文を述べる主体となる作家の書き手、登場人物、一人称などをまとめて「話し手」と称する。それに対する相手となる登場人物、読者などを「聞き手」とまとめて称する。

³ ある形式が持っている基本的意味を「言語的意味」といい、様々な文の環境で出てくる意味を「使用の意味」と称する。

ことを暗示させる例である。

このように「ハズダ」は、様々な使い方があり、認識判断モダリティ (epistemic modality) 研究の中でも「ダロウ」や「カモシレナイ」とは違ってその位置付けがはっきりしていないのが現実である。「ハズダ」は、先行研究においても何かの根拠からの推論を表す形式として分類されてきたが、特に、「ニチガイナイ」とともに必然性（蓋然性の中で）を表す認識モダリティ形式として分類する場合（日本記述文法研究会 2003、以下「日本」と表記する）もあり、「当然性判断」として分類する場合（益岡 2007）もある。本稿では、認識的モダリティの中で「ハズダ」の位置づけについては深く入らないが、「彼はまだ寝ないはずだ」「体を大きく見せれば、猪は逃げるはずだ」という例は、未確認されている事態に対する話し手の判断（蓋然性）として位置づけることができるかもしれない。しかし、話し手の記憶確認のような「ここ置いたはずだ。(でも、ない)」のような例の場合には説明に困る。これらの用例は、推論過程を含むか否かが議論の対象になってきたが、「ハズダ」が推論を表す形式であるという説明では統一的に「ハズダ」の全体像を見極めることができない。そして、「ハズダ」分析するには、＜図 1-1＞のように事例ごとに用法を記述していくか、用法の中で中心となる意味を設定してそこから説明できないものは除外するか、全体の用法をまとめられるような統一的な定義をしていくかという問題が生じる。



＜図 1-1＞ 「ハズダ」を分析するための3つの方法

用例ごとに記述するか、中心的意味だけ説明するのでは、「ハズダ」の全体像が分かりにくい。

そこで、本論文では、従来用法分類中心に考察されてきた「ハズダ」を網羅的に統一的に説明するためには、「話し手の知識」と「その知識の運用」という概念から分析した方が有効であると考え、「ハズダ」は話し手の「知識確認」をすることが本質的な機能であるという観点から考察して、従来の「ハズダ」の用法が説明できることを期待する。

さらに、「話し手の知識」と「その知識の運用」という概念は、類型論の観点から他の言語と比較する際にも有効な基準になると期待できる。(1-4a)は、「ハズダ」を伴って「一人で来る」と述べ

ているが、この「ハズダ」は韓国語の「-(u)l kesita」と対応する場合が多い。

(1-4) a. 一人で来る [ハズダ]。

b. 혼자 올 것이다.

honca o-[l kesɪ]-ta.

alone come-1 kesɪ-DEC

‘lit. He will come alone.’

そこで、韓国語の「-(u)l kesita」との対照を行い、お互いに置き換えが可能であることは、共通の性質を持っていることを示唆して（話し手の知識を使う形式）、相違点が存在する場合には、話し手の知識の運用に違いがあると考ええる。そして、この対照を行うことで、知識の運用に関する体系が見られることを期待する。

(1-5) 本論文の目的

①「ハズダ」を本質的な意味・機能から、統一的な説明ができるようにすること

②「ハズダ」と似ている意味を持っている他の形式との比較から「ハズダ」の機能を明らかに示すこと

② 類型論的な観点から「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kesita」との対照を行うことで、他の言語と対照分析をする際の有効性を確認すること

以上、本稿では、従来の先行研究における統一的な説明（理論として説明する場合）の問題点を踏まえて、用法の箇条書きになりやすい記述的な説明を包括できるような説明を試みて、「ハズダ」の本質的な特徴を明確にする。そして、類似する推論形式との比較を通じて「ハズダ」やその周辺の形式「ダロウ」「ニチガイナイ」と比較を試みる。さらには、韓国語「-(u)l kesita」の他言語の類型論的な観点における有効性を試みることにする。

1.2 研究対象、および、用例の抽出資料

（省略）

1.3 本研究の構成

第1章では、本論文の背景と目的の他、考察対象について述べた。

第2章では、「ハズダ」に関する先行研究を、「ハズダ」の意味・用法を中心に記述的に考察したものを検討し、それぞれの問題点を探った後、それを解決するための本論文の立場を述べる。

第3章では、先行研究を踏まえ、さらに「ハズダ」の統一的な説明するために「ハズダ」の「食い違い」という使用条件を提示すると同時に、その時の「ハズダ」の本質的な機能とは「知識の確認」であるという仮説を立てて説明する。

第4章から第6章までは、本論文の本論となるところである。「ハズダ」の使用条件のもとで、話し手の知識と未確認領域の事態とのズレから生じる疑問や話し手の不確定の疑問から生じる知識確認のタイプについて考察し、大きく、推論を伴う「知識の確認」と推論を伴わない「知識の確認」の2つのタイプがあることを提示して、説明する。さらには、このような知識の確認は、話し手が抱く疑問といった穴を埋めるための答えを見つけるために行われる確認として働くか、あるいは、あえてそのような知識の存在すら話し手の中に存在しないことを述べることから可能性を除去する場合もあれば、逆にあえて知識を確認するように述べることから、話し手の主観的な判断であるよりは、知識の領域に属することを表にして、話し手の色を消す責任回避といった hedge としての用法にまでつながることを示す。

第7章では、「ハズダ」を知識の確認という側面と話し手の確信度を中心に「ダロウ」と「ニチガイナイ」との比較を行う。

第8章では、現代日本語の「ハズダ」と現代韓国語の「-(u)l kesita」は意味上、類似する現象があることから、対照を行うことで両形式の本質的な共通点や相違点を示す。似通っている用法から、両形式の体系的なものを対照することによって、両言語に対する新しい見方を提示する。

最後に、第9章で、本論文の要約と結論を述べ、今後の展望を示しつつ、論を結する。

第2章 「ハズダ」の先行研究と問題点

2.1 「ハズダ」の概観

現代日本語において話し手の認識判断を表す形式⁴の1つである「ハズダ」は、形式名詞である「ハズ（筈）」にコピュラ「ダ」が後接したものである。そのため、他の形式名詞から成る「モノダ」や「コトダ」と同様に前接する修飾節などによって大きな影響を受ける。

「ハズダ」の語源について、山口（2004：121）では、次のように説明している。

「はず」は、弦を張った弓の好ましい状態を象徴する言い方から、それと共起する動詞の違いや、上接する連体修飾語の有無、「はず」が核となる成分の主語・客語などといったありようの違いなどにより、その担う比喩的意義を次第に広げていったようだが、…（中略）。

つまり、弦を張った状態で弓とのつながりがしっかりしていることから拡張して話し手の認識判断を表すようになったと言える⁵。また、宮地（2007）は、古代語において話し手の認識や判断は、係り結びや専用の助動詞などの形式によって表されていたが、現代語ではこの文法的な役割に形式名詞が参加していると述べ、「形式名詞+ダ」である「ハズダ」は、連体修飾節を必須とするものとして連体修飾節の事態が個別的・指示的な条件から、一般的・非指示的な場合の推定・仮定的な話し手の認識的意味の表示になったと推定している。このように「筈」の状態から比喩的意

⁴ 寺村（1984）では、「ハズダ」を説明のムードの類に入れて論じ、「ハズダ」を「ハズ」という形式名詞に形式動詞（または指定助動詞）の「ダ」がついたものではなく、一個の形式として認めている。

⁵ このことは、英語の助動詞「can」「may」「must」のような「力」を表すものから認識判断を表すものへと、すなわち deontic modality から epistemic modality への変化を暗示しているとも考えられる。

義に拡張していき、個別的・指示的な内容から一般的・非指示的な場合まで表せるようになった「ハズダ」は、現代日本語において様々な用法がある。

まず、ここで、「ハズダ」の多様な用法を検討するに先立ち、「ハズダ」が使われている構文的な特徴を平叙文、否定文、疑問文と命令文の3つに分けて概観しておきたい。

第一は、平叙文の中に現れる場合である。平叙文の中に現れる「ハズダ」は、文末に用いられるのがもっとも典型的である。また、構造的な位置が文末でなくても、一つの文として認められる場合もある。さらに、後ろに出てくる名詞を修飾するような連体形として現れる例も少なくない。

第二に、否定形で使われる場合は、「はずがない」や「はずはない」、「はずではない」などの形で用いられる。しかし、これらの場合は、「はずがない」と同じく、可能性の否定という意味を表す。

第三に、「ハズダ」の構文的特徴として、疑問文や命令文では用いられない。

以上、「ハズダ」を含む文の構文的特徴について概観した。このような構文的特徴を持っている「ハズダ」の意味・機能に関しては、「ハズダ」を<みこみ>や<さととり>と見ていた高橋（1975）の研究以来、様々な考察がなされてきた。が、それらの先行研究は、主に①「ハズダ」の意味・用法を中心にして記述的に考察したもの、②「ハズダ」を「 $P \rightarrow Q$ 」という推論の観点から考察したものという2つに分けることができる。以下は、「ハズダ」に関する先行研究を「意味・用法の記述」「推論」という点に分けて検討し、それぞれの問題点を探る。

2.2 意味・用法中心の先行研究と問題点

「ハズダ」の研究は、「ハズダ」の用法分析を中心に盛んに行われてきた。2.2 では、まず記述的な観点から日本語学において、「ハズダ」の意味・用法がどのように分析されてきたかを検討した後、これらの先行研究の問題点を探る。「ハズダ」の研究の出発点と言える高橋（1975）では、「ハズダ」の意味を定義してはいないが、「ハズダ」には、予定や推定などの、きまりやたしかさの<みこみ>をあらわす用法とナルホドソウイウワケダという道理の<さととり>をあらわすという2つの用法があることを指摘している。それ以来、先行研究では、「ハズダ」の意味を実際の使用面において現れてくる用法の分類・記述（実際に使われる用法ごと、使用的意味中心に記述する方法）が始まり、特に<みこみ>に当たる用法について詳細に記述する考察が主流となった。このような意味・用法中心の先行研究としては、森田（1980）、篠崎（1981）、奥田（1993）、松田（1994）、田村（1995）、岡部（1998）などがある。これらの先行研究を高橋（1975）が<みこみの用法>と<さとりの用法>を分類して以来、岡部（1998）の分類まで様々な基準から細分類されてきた「ハズダ」の意味と用法をまとめると、次の<表 2-2>のようになる。

	意味	用法
高橋 (1975)		・＜みこみ＞ ・＜さととり＞
森田 (1980)	客観的な条件・状況からして、その事柄が当然あるべき状態であるという判断	・(条件からの) 当然の帰結として予想する場合と当然の帰結が現状とくい違っている場合 ・条件の真相を知って、現状が当然の帰結であったと悟る場合
篠崎 (1981)	ある根拠から、当然ある状態が起きるものとしての期待が(ある、又は、ない)と判断(する)	・＜予定＞＜記憶＞＜推測＞ ・＜道理 ⁶ ＞
奥田 (1993)	当然さの判断を表現(＜みこみ＞の場合)	明確に分類はせず、ヴァリエントとして現れると述べる。 ＜思い込み＞＜再確認＞＜予想＞＜予定＞ ＜たしかさ＞など
松田 (1994)	推論の結果や付帯状況と、それに対応する現実とのかかわりを強く意識している表現	・＜推察＞＜道理＞＜予定＞＜確認＞ ・＜さととり＞
田村 (1995)	P が必ず実現する(成立する)という、根拠に基づいた話者の判断	・＜予想＞＜確認要求＞＜記憶＞＜論理的必然性＞＜確信＞ ・＜納得＞
岡部 (1998)	事態を理屈の上で成り立つ事態として語る	・＜みこみ＞＜予定＞＜記憶＞ ・＜さととり＞ ・＜事態の正当性＞＜理想上の事態成立＞

<表 2-2> 先行研究における「ハズダ」意味・用法のまとめ

<表 2-2>を見ると、先行研究は、「ハズダ」は「ある根拠 P から Q が帰結することが当然であることを表す」という意味を表すことをベースとして、様々な用法が分類され、説明が行われて

⁶ 篠崎 (1981 : 55) による＜道理＞という用法では、「事実を知っての納得や疑念である、「なるほど…する／しないハズだ」や「…する／しないハズがない」を代表とする脈絡である」といい、高橋の＜さととり＞の用法以外でも、「するはずがない」というものも入れてある。

きた⁷ことにおいて共通しているが、これらの先行研究には、大きく2つの問題点が見られる。

第一、「ハズダ」の用法の分類基準が明確ではなく、混在している。詳細に分類されている用法の基準と「ハズダ」の基本的意味との関係が明確ではなく、つながりが見えにくいということである。＜表2＞で分かるようにその用法分類においていくつかの分類基準が混在している。どの先行研究でも共通には、高橋（1975）が分類した＜みこみ＞と＜さとり＞の用法からは大きく離れてはいないことがわかる。たとえば、＜さとり＞の用法は、篠崎（1981）や田村（1995）では、＜道理＞や＜納得＞と称されているが、基本的に同じである。＜みこみ＞の用法の場合も、その典型的なものとして＜推測＞、＜予想＞、＜推察＞などの術語で呼ばれているが、用言の種類やテンスなどによって細かく分類されているだけで、「話し手にとって未知のことを推測」という点からは全く同じである。なお「ハズダ」には、「ハズダ」に前接する命題内容がスケジュールや予定と関連するときには＜予定＞の用法として分類され、その命題内容が判断主体である話し手の自らの本人の記憶に依存するという場合には、その出所から＜記憶（篠崎 1981、田村 1995、岡部 1998）＞や＜確認（松田 1995）＞という用法に分類されている。さらに、言語活動が行われる場において、判断主体である話し手と聞き手が存在し、当該の命題内容が聞き手にとっても周知のことだと話し手に思われている場合に、聞き手に対してその命題内容の要求を求めるという＜確認要求（田村 1995）＞などと細分類されていると言える。これをまとめると、以下のようになる。

(2-14) 先行研究における「ハズダ」の用法の分類基準

- | | | | |
|---|----------------|---|-------------------|
| ① | ＜推測＞、＜予想＞、＜推察＞ | → | 用言の種類・テンス |
| ② | ＜道理＞、＜納得＞ | → | 文脈依存（話し手の納得） |
| ③ | ＜予定＞／＜記憶＞、＜確認＞ | | |
| | ＜論理的必然性＞ | → | 命題内容の性質 |
| ④ | ＜確認要求＞ | → | 文脈依存（聞き手に対する発話行為） |

このような細分類は、「ハズダ」が文の中でいかに使われているのかを把握するために必要な作業ではあるものの、統一的な判断基準がなくテンスや文脈など性質の異なる基準が混在しているため、細かく用法を分類するだけで、「ハズダ」の本質を見えにくくする恐れがある。

第二、「ハズダ」の用法の分類基準が混在していることや「ある根拠から P から（必然的に） Q

⁷ もちろん、用法分類だけではなく、松田（1995）の「現実とのかかわりを強く意識する形式」や岡部（1998）の「理屈上で成り立つ事態を表す形式」のように、明確に現実と「ハズダ」が表す世界を区別しているところは、「ハズダ」の本質を貫いていると考えられる。

が帰結するのが当然である」という「ハズダ」の基本的な定義では、各用法と「ハズダ」の意味とのつながりが見えず、統一的な説明ができないことである。

(2-14)のような用法分類は、「ハズダ」に前接する命題内容の分類に依存していて、結局は「ハズダ」を統一的な意味で説明することが難しくなる。「当然・必然」という意味要素がいかにして命題内容に関して話し手が「自分自身が持っている記憶内容が事実である」と判断するのを躊躇するという意味につながるかも説明ができない。(2-15)の「ハズダ」の命題内容は、「今年の夏だった」という記憶であるが、その根拠から「ハズダ」が表す文の内容は、当然・必然という意味にはなりにくい。なぜなら、波線の「正確には覚えていない」からわかるように、話し手の不確かな判断を表していて、当然・必然性とは離れているように見える。

(2-15) 正確には覚えてないですが、今年の夏のことだった〔はず〕です。

以上、「ハズダ」の意味・用法の分類を記述的に考察した先行研究の問題点は、次の2つのことが指摘できる。

(2-17) <意味・用法の観点から見た「ハズダ」の先行研究の問題点>

- ① 用法分類における判断基準が明確ではなく、混在している。
- ② 「ハズダ」の意味と用法の間のつながりが見えづらく、統一的な説明ができない。

2.3 推論の観点からの先行研究と問題点

寺村(1984)は、「ハズダ」を「ハズ」という形式名詞に形式動詞(または指定助動詞)の「ダ」がついたものではなく、一個の助動詞として認め、その「意味的特徴」を「ある事柄の真否について判断をもとめられたとき、あるいは自分で判断を下すべき場面に直面したとき、確言的には言えないが、自分が現在知っている事実(P)から推論する⁸と、当然(Q)である」と「推論」を持って定義している。寺村(1984)は、その定義の中で明確に「推論」という用語を用いている。なお、このような基本的意味の他にも、<さとり>の用法に該当するものについてはそのような用法があることを指摘するにとどまっているが、「その際にはPは必ず言語化されるか、あるいは、相手に理解されているという条件が必要である」と述べている。

寺村(1984)の以来、「ハズダ」を意味・用法を中心に記述的に考察したものと異なり、「ハズダ」を推論の観点から考察した先行研究は、いずれも「ハズダ」の意味・機能を「何かの根拠とな

⁸ 下線は筆者によるものである。

る P から Q を当然のように推論する」とした立場は共通しているものの、推論過程を部分的に受容するか、それとも推論過程を全面的に受容するかと言う 2 つの見解がある。以下では、それぞれの先行研究を検討し、問題点を探る。

2.3.1 推論過程を部分的に受容する先行研究と問題点

「ハズダ」をある根拠 P から Q を導く推論形式として説明しながらも、「ハズダ」の用法の全てが推論を表すとは限らないと推論過程を部分的に受容する研究としては、松田（1994）、木下（1997、2013）、蔣（2008）などがある。

「ハズダ」の意味・用法の説明において部分的に推論過程を受容する先行研究を検討したが、これらの先行研究では共通して大きく 2 つの問題点が見られる。

第一、「推論」を部分的に受容する研究では、「ハズダ」を説明するための推論の定義が明確ではないということと、それがゆえに推論過程がないと思われる用法とのつながりが明確ではないという 2 つのことを考えると、推論を「ハズダ」の本質的な意味で見るには無理があろう。

第二、「ハズダ」を認識的判断のモダリティ形式として説明するには、やはり全ての用法を扱えないことが問題となる。つまり、「ハズダ」には、認識的判断のモダリティ形式としての「ハズダ 1」があれば、認識的判断のモダリティ形式ではない「ハズダ 2」もあることとなり、「ハズダ 1」は説明できるかもしれないが、結局のところ「ハズダ 2」については考察の対象から外すことから、「ハズダ」がいかなる形式であるかの根本的な課題は残されたままである。

このように、推論を部分的に受容する研究の立場では、「ハズダ」を説明するために推論を用いているが、推論過程を認めない用法については、ただ例外とするか、あるいは考察の対象外とするだけで、それについての説明は不十分である。「 $P \rightarrow Q$ 」という推論が成り立たないことから、推論が起きない用法を説明するためには、考察の対象から除外するか、または、単なる記憶の確認や想起や単なる予定を言っているのにすぎないという説明にとどまってしまう。つまり、「ハズダ」の基本的意味・機能と推論にならない用法に関する統一的な基準が提示されなくなる。そのため、推論過程を部分的に受容し、「ハズダ」を推論で説明しようとするこれらの研究では、「ハズダ」の本質を上手に説明できない。

以上、推論の観点から、推論を部分的に受容する先行研究の「ハズダ」の分析には、次の(2-25)のような問題点が指摘できる。

(2-25) <推論の観点（部分的受容）から見た先行研究の問題点>

- ① 「ハズダ」を推論形式という説明において、推論過程がないと思われる用法があるという説明では不十分となる。例外を認めることは、「ハズダ」の本質は推論ではないこ

とを裏付ける。

②「ハズダ」を認識的判断のモダリティ形式として説明するには、推論過程がないと思われる用法は除外され、統一的な説明が不可能となる。

2.3.2 推論過程を全面的に受容する先行研究と問題点

「ハズダ」をある根拠 P から Q を導く推論形式として説明し、全ての「ハズダ」の用法に推論過程があると推論を全面的に受容する研究としては、中村（2003）がある。

中村（2003）は、従来の先行研究で推論過程がないとされていた「ハズダ」の＜予定＞＜記憶＞＜確認＞の用法をとりあげ、これらの用法と推論との関係を主な目的として説明している。まず、「ハズダ」の基本的意味を「＜根拠に基づいて推論すれば当然命題が事実である＞という判断を表す」と定義し、推論には2つの根拠があると指摘した。＜推測＞（篠崎：1981）、＜推察＞（松田：1994）、＜みこみ＞（岡部：1998）とされる用法では、①命題を構成する要素の属性に関する個別的な知識、その属性を持つ人や事物に関する一般的な知識があるのに対して、＜予定＞＜記憶＞では、②命題全体の属性に関する個別的な知識、属性を有している事柄に関する一般的な知識があるという。また、＜確認＞は、命題を確認された事実であると認識していることの根拠が意識され、そこから推論によって命題が事実であることが再認識されていると述べている。中村（2003）の考察は、「推論」という観点から全ての「ハズダ」の用法について統一的な説明を試みている点やその根拠となる知識は「命題を構成する要素」に関わるものと「命題全体の属性」に関する知識があるという指摘は興味深い。

しかし、中村（2003）の考察は、当該の用法と推論との関係が明確ではないため、どうして「ハズダ」が不確かな記憶の想起のような意味まで表せるかについての説明が不十分であるという問題がある。また、記憶や予定（記憶の一種として）があるから記憶・予定の通りであるという説明は、推論の質を異にするという問題も生じる。

例えば、中村は、「予定」や「記憶」のような用法についても推論を認めているが、「推論」を演繹的な推論として「推論の根拠となる事柄が事実であれば帰結となる事柄も必然的に事実となるようなタイプの推論である」と定義しながらも、下の(2-26)のような「ハズダ」の用法が推論とどのように関係があるかについては明確に説明されていない。

このように、推論を全面的に受容する中村（2003）は、「ハズダ」を推論という観点から統一的に説明できているように見えるが、P と Q の関係や当該の用法と推論との関係が明確ではない。そのため、推論を「ハズダ」の本質に見なすことは難しく、「ハズダ」の全ての用法を説明できるような別の観点からの分析が必要となる。

以上、推論の観点から、推論を全面的に受容する先行研究の問題点をまとめると、次の(2-27)の通

りである。

(2-27) <推論を全面的に受容する観点から見た先行研究の問題点>

- ① 演繹推論として説明では、どうして「ハズダ」が不確かなニュアンスを帯びることができかが、十分に説明されていない。
- ② 全ての「ハズダ」の用法を推論の観点から述べるには、推論との関係が明確に説明されなければならない。

2.4 先行研究における問題点と本研究の立場

「ハズダ」は、当該の事態が話し手の未確認領域に属する場合でも使えるのに対して、話し手の記憶を確かめるような確認領域に属する場合にも使える。つまり、これは認識的判断のモダリティ形式として推論過程を含む用法もあれば、推論過程を含まない記憶確認にとどまる用法の場合もあるということである。文脈依存的な意味まで含めてより細かく用法を分類し、それぞれを記述していくことも「ハズダ」の多様な用法を把握するのにいいかもしれないが、全ての「ハズダ」の用法を細く分類するだけでは、「ハズダ」の本質が見えにくくなる恐れがある。そのため、文脈依存的な意味という他の基準と異なる判断基準を入れてまで「ハズダ」の意味・用法を細分類する先行研究でも推論過程の説明に依存し、例外を前提としている先行研究の当然性・必然性という衝突でも、「ハズダ」について統一的な説明ができていない。

では、このような「ハズダ」の使用に共通している点は何であろうか、「ハズダ」が他の形式と区別される本来の性質は何であろうか。本稿では、それを「ハズダ」が用いられる状況に求めたい。次の(2-28)は、先行研究において「ハズダ」の意味・用法に基づいてまとめたものである。これらの例文が使われる状況を見てみると、「ハズダ」の命題内容は何らかのギャップがある状況で使われる点において共通していることがわかる。

- (2-28) a. (太郎は甘いものが好きなことは知っている。そこで太郎のプレゼントとしてお煎餅を買うべきだと言う友達に対して、ケーキを買うことを決めながら)

太郎はイチゴケーキを喜ぶ [はずだ]。

- b. (昔のことなので自信はないが) そのことなら、15年前のことだった [はずだ]。
- c. (彼は死んでいたと信じていた、生きて現れた彼を見て) 彼は死んだ [はずだ]。
- d. (この世の中には世界の果てがあるという話を聞いて) 地球は丸い [はずだ]
- e. (彼女が怒った理由を後で聞いてから)

約束時間に1時間も遅れたら、彼女が怒る「はずだ」よ。

もし、「ハズダ」の用法が、(2-28)のように「ハズダ」によって表される内容について、何らかの相反する、あるいは、ギャップのある状況で使われるとすれば、それが「ハズダ」の使用条件とも言えるのではないか。また、「ハズダ」が表す内容とは、話し手が持っている情報であれ、推論から出された判断であれ、話し手がギャップや食い違いなどを認識する前から持っていた情報であると考えられる。

次の3章では、「ハズダ」の使用条件をより詳しく考察し、仮説を立てた後、「ハズダ」の機能について説明する。

第3章 「ハズダ」と研究方法

3.1 概要

2章では、先行研究での「ハズダ」に関わる問題点について検討し、既存の先行研究では「ハズダ」の統一的な説明ができない、「ハズダ」の本質的な説明ができないことを確認した。「ハズダ」の用法を細かく分類したり、当然性や必然性を表す推論形式で定義したりすることでは、「ハズダ」の統一的な説明に限界がある。そこで3章では、「ハズダ」に共通している点は何か、「ハズダ」が他の形式と異化される本来の性質は何かを「ハズダ」が用いられる状況から探ってみよう。

3.2 「ハズダ」と推論との関係

「ハズダ」の用法には、先行研究で確認したとおりに、推論形式と定義する場合もあれば、推論を伴う場合があれば、推論を伴わない場合があると指摘されてきた。本稿でも、推論を伴う場合と推論を伴わない場合があると考え、どういう違いがあるかを述べていく。推論を部分的に受容する先行研究の立場と同じく、推論過程の有無によって2つに分けることには変わりがないが、これによって「ハズダ」に使用条件を考えることで推論の観点からの説明の限界を克服できると考える。

3.2.1 本稿における推論と知識

推論とは、論理学から実際の言語活動の全般に使われるものとして、英語では *inference*、ドイツ語で *Schluss* とも言われるものである。では、推論とは何なのかを考える際に、どの立場から論じるかによって、扱われる対象の範囲は異なってくる。特に、論理学でいう「推論」と日常言語生活における「推論」とは、少し違うものである。特に、日常生活の推論に関しては、坂原(1985)

は、次のように述べている（下線は筆者によるものである）。

私たちが推論を行う最大の動機は、真である命題を偽である命題から区別することであろう。
…（中略）。ある命題が、独立に観察された場合、真偽が不確かであれば、既にある程度の確からしさがわかっている命題と関連付けることにより真偽を確かなるものにできないかという試みがなされる。…（中略）。既に知られていることから未だ知られていないことを導き出す、あるいは、不確かなものをより確かなものの助けを借りて確実なものにするという、…（中略）。【坂原 1985 : 16-17】

「推論」という用語は、日常言語における推論を指し示していて、ある命題から新しい命題を導き出すことができるかできないかの問題と関わる。その祭に、話し手が事実として知っている内容であれば、無標の形で断言できるが、そうではない場合は、何らかの有標の形式（ \emptyset 形式を含む）を持って言語化されるわけである。当該の命題内容が事実として話し手に確認されていない未確認領域に属するものであれば、話し手はすでに持っている推論のベースとなるものを参考にして推論を行う。そして、本稿では推論のベースとなるものを「知識⁹」という用語を使って説明する。知識とは、情報といったものや一般的に話し手が持っている知識、そして、個人の個別の経験から蓄積されたものもあれば、長い間繰り返されることにより強化され蓄積されたものもある。まず、知識の領域が話し手の個人的な経験による知識（経験的知識：personal knowledge）が考えられるが、これは話し手の個人的な経験を通して、または、重ねて得た知識のことである。

- (3-6) a. 「{私は／彼は} ディズニーランドに行ったことがある」
 b. 「{私は／彼は}、いちごが好きだ」
 c. 「{アフリカ大陸でも} 雪が降るところもある」

⁹ 本稿で使う「知識」も神尾（1990）が主張する＜近＞情報と同じのものであるとも言える。例えば、神尾（1990）のは、話し手の＜近＞のものを、次のように分類している。

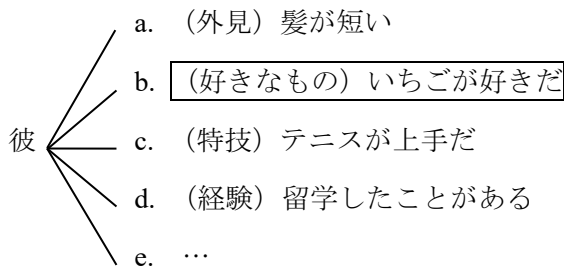
- (1) a. 話し手自身が〔直接体験〕によって得た情報
 b. 話し手自身の過去の生活史や所有物についての〔個人的事実〕を表わす情報
 c. 話し手自身の確定している〔行動予定〕および〔計画〕などについての情報
 d. 話し手自身の近親者またはごく身近な人物についての重要な個人的事実を表わす情報
 e. 話し手自身の近親者またはごく身近な人物の確定している重要な行動予定、計画などについての情報
 f. 話し手自身の職業的あるいは専門領域における基本的情報
 g. 話し手自身が深い地理的関係を持つ場所についての情報
 h. その他、話し手自身に何らかの深い関わりを持つ情報

【神尾 1990:33:(33)、括弧 [] や波線は筆者によるもの】

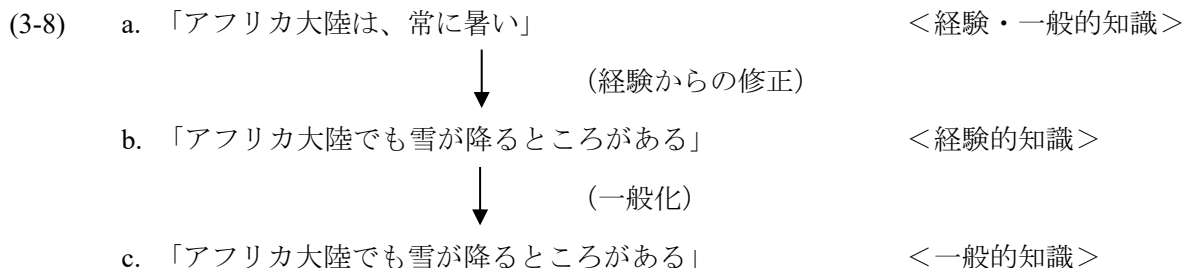
d. 「引っ越しの準備は大変だ」

話し手の「知識」とは、(3-6a)のように、話し手自身がディズニーランドに行ったことのあるという記憶であるかもしれないし、知り合い(＝彼)に対する情報であるかもしれない。これらの知識は、話し手の経験により蓄積された記憶であり、「ディズニーランドに行った」という記憶の断片は、「私」や「彼」の属性として体系化されているとも言える。(3-6b)では、話し手自身に関する好き嫌いの情報であるが、経験を通して話し手自らの情報を知識として保持することになる。また、話し手が「彼」との経験を重ねて「彼」に関するいろいろな情報のうち、「彼の好きな果物とはいちごである」と、彼に関して体系化した知識の一部分を表しているとも言える。

(3-7) 「彼」に関する話し手の知識の体系



なお、(3-6:c-d)は、外部の世界に対して話し手の経験から得られた知識のことを示しているが、(3-6c)は、共通の社会における一般的な事実のことを表しているのではない。話し手はアフリカとは常に暑いと思っていたが、旅行などを通じた直接経験や本などによる間接経験によって「アフリカの大陸でも雪が降るところがある」と知って、蓄積された知識のことである。これらの知識は、あくまでも話し手の経験的知識のことであり、話し手にとって知識として定着しているものの、後で修正されることもある。さらに、その修正された、または、新しく得られた経験的知識は、ある社会などで共通の知識が得られていれば、後で一般的知識として定着することもあるだろう。



これに対して一般的知識 (universal knowledge) とは、ある社会や集団において共通的に認識されている知識のことをいう。百科事典的知識のようなものであり、判断の主体の個別的な経験からどんどん習慣化されたものもあれば、ある社会の範囲でしか通用できない一般的知識もある。

- (3-9) a. 「冬は寒い」 「経験からの一般的知識」
 b. 「1 + 1 は2である」 「ルールとしての一般的知識」
 c. 地球は丸い。 「一般的知識」

(3-9)は、「地球は丸い」「1 + 1 は2である」「冬は寒い」といった一般的知識を表している。「地球は丸い」や「1 + 1 は2である」のような知識は百科事典的知識であると言える。しかし、個別的な知識であれ一般的知識であれ、その知識の内容の一般性の度合いに違いはあるにしても、あくまで話し手が持っている知識であることに変わりはない。

このような知識は、あくまで話し手中心の知識であり、ある対象と結びついた知識のネットワークとして話し手によって保持される。そのため、以下のように、直示的な(話し手・今・ここ)を有する情報とは、かけ離れていることを意味する。

- (3-10) a. 今部屋の中で電気がついた → <視覚>
 b. 向こう側で大きい爆音がした → <聴覚>
 c. この料理は美味しい → <味覚>
 d. この繊維の肌ざわりが悪い → <触覚>
 e. 変な匂いがする → <嗅覚>

(3-10)のようなものは、本稿で述べる知識からは除外する。話し手に内在する知識という上、上記のような五感などによって知覚された情報のことも考えられがちであるが、このような情報は話し手にとって知覚された情報にすぎず、推論などに使うために体系化されているものではない。そのため「ハズダ」が使えるためには、(3-10)のように認知した五感による情報をそのまま使用するのではなく、その情報に関わる話し手の知識を参照しなければならないのである。

- (3-11) 「ハズダ」に使われる知識

[p₁] [p₂] ... [p_n] の外部の情報 → [p_n] に関連する 話し手の [P] の知識
(p_n ≠ P)

(3-11)のように、本稿で使う知識（経験的な知識、一般的な知識）とは、話し手がすでに保持している内在している知識であり、知覚した、認知した知識・情報の断片ではない（箇条書きのものではない）。話し手はPに関連する p_n といった知識を保持しており、Pに関連するものとして持っているのである。また、それが話し手の推論によって得られたものであっても、話し手の中で処理され、定着されているものも合わせて、知識（話し手の想定を含む）として使う。

なお、話し手はこの知識を使って未確認領域のことを補っていくわけであるが、「ハズダ」の使用には、以下のように推論過程の有無によって2つのタイプが考えられる。

これについては、3.2.2 で推論を伴う「ハズダ」の場合を、3.2.3 では、推論を伴わない「ハズダ」の場合の2つのタイプについて述べる。

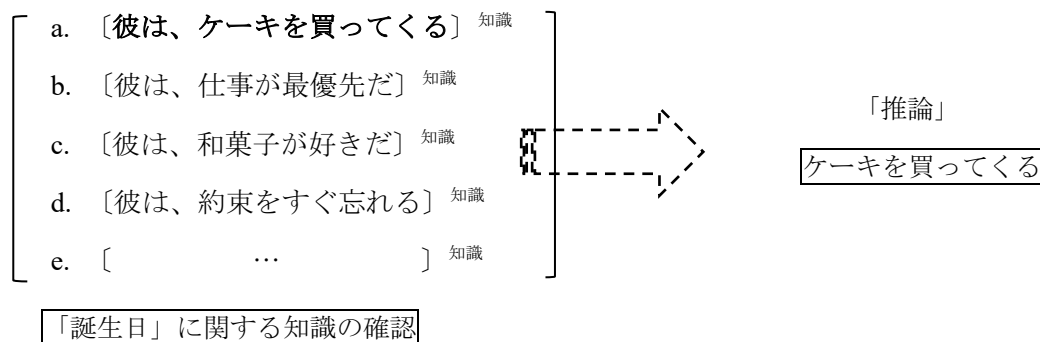
3.2.2 推論を伴う場合

「ハズダ」は知識を使って推論を伴うが、当該の対象(=P)となる知識の中から最適の知識(p_n)を使うことによって、未確認領域のことを補っていく。

(3-14) (彼と連絡がつかず、ちゃんと誕生日ケーキを買ってくるかが気になっている場面)
今日は母の誕生日だし、忘れずにちゃんとケーキを買ってくる[はず]。

(3-14)は、「彼がケーキを買ってくるか否か」の話題について、「今日は誕生日である」ことから「彼はケーキを買ってくる」と判断している状況である。しかし、「彼がケーキを買ってくる」という事態は、話し手の未確認領域に属する事態であり、彼の習慣から確信を持って「彼は、必ず誕生日にケーキを買う」と言えない状況であれば、複数の知識を確認する必要がある。

(3-16) 「彼」に関する知識



(3-14)は、(3-16)のように複数の「彼」に関する知識の中で、「彼は、仕事を最優先にする人」「彼は、和菓子が好きな人」「彼は、約束をすぐ忘れてしまう人」とであると、彼に関する知識の中で、

話題（私の誕生日）と関連のある知識「誕生日の時には、ケーキを買ってくる」を使って、今晚も「ケーキを買ってくる」と推論している。「彼は、誕生日にケーキを買ってくる」ことは、話し手の本質といった100%の内容だとは言いきれないが、たいていの経験から「彼は、誕生日にケーキを買ってくることが多い」と話し手の知識からの推論を表しているのである。

(3-14)のように、当該の対象と関わる知識を使って、推論するとしても、全ての知識が必要とされるわけではない。問われる状況に最適の知識を参照することで、最適の判断を試みているのである。これをまとめると、次のようになる。

(3-18) [彼なら、(知識₁)、知識₂、知識₃…知識_n)]^{知識} → 「ケーキを買ってくる」^{未確認領域}

(3-18)は、「彼がケーキを買ってくるか」という問いから、彼についての関連のある知識を照らし合わせて「ケーキを買ってくる」までの推論を表している。本稿では、話し手が当該の対象に関して保持している知識の中でも当該の状況に一番関連のある知識のことを、「BEST となる知識」と称する。

(3-20) 「BEST となる知識」の定義

話し手が当該の対象 (=P) に関して保持している知識の中で、問われる状況の中で最適に関連のある知識として選ばれる知識 (p_n) のことをいう。今後、便宜上「ハズダ」の使うときに使われる知識は、「BEST となる知識」のことを示す。

以上、(3-14)のように「ハズダ」を用いた使用には、推論過程が認められる推論を伴う場合があり、話し手は BEST となる知識を使って未確認領域に対する事態を述べることになる。

一方、(3-18)のような知識と推論の関係とは、「ハズダ」だけに局限されるということではない。したがって、「ハズダ」だけが推論を表す形式ではない。

(3-14)は、「ケーキを買ってくるかどうか」に対する疑問に対して、話し手はその疑問を解消するために知識を使って「ケーキを買ってくる」と推論しているが、この裏には「ケーキを買ってこない」という可能性（疑問）が存在していることが考えられる。

3.2.3 推論を伴わない場合

ここでは、推論を伴わない場合について述べていく。3.2.2 の推論を伴う場合とは違って、当該の知識の断片を確認する場合であって、一連の推論過程は見られない場合である。

(3-21) a. A : 全部、できた！もう寝る。

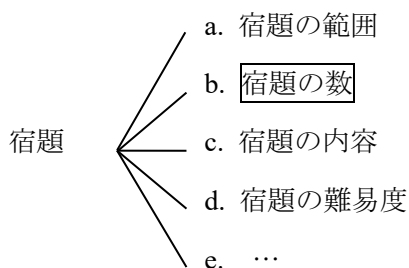
B : ちょっと待って、もう一つ宿題があった [はずだ] よ。

b. A : 3 年前の学会はソウルだったっけ？

B : 九州だった [はず]。

(3-21a)は、1つの宿題を終えて寝ようとする聞き手に「宿題はもう一つあった」と話し手は記憶となる知識を確認している。これは、「(当該の) 宿題」に関する知識の中で、今回提出する宿題に関連する知識を確認しているのである。

(3-22) 「(当該の) 宿題」に関する話し手の知識



話し手は、「(当該の) 宿題」について、「宿題は全部で2つある」という BEST となる知識を確認していて当該の知識を参照するのにとどまっているので、推論過程があるようには感じられない。また、同じことが、(3-21b)の場合でも言える。(3-21b)は、「3 年前の学会の場所は東京だった」に対して、「3 年前の学会の場所はソウルだ」と言う聞き手に対して、「3 年前の学会」に関する知識の中で、場所に関する知識を確認している。

(3-21)のように推論を伴わない場合は、記憶といった断片の知識を確認するが多い。しかし、単に記憶を回想したりする意味での「記憶の確認」だとすれば、必ずしも「ハズダ」が使われる必要はないだろう。(3-21a)は、2つの宿題があるのに1個の宿題を終えて寝ようとする聞き手に対して、話し手は「なぜだろう。宿題はまだ残っている。宿題は2つではないか」と疑問を強く感じていると考えられる。もちろん、推論を伴う場合のようにその疑問に思うという話し手の心理が強く感じられない場合もある。

(3-24) A : 3 年前の学会はどこだったっけ？

B : それは、九州だった [はず]。

(3-24)は、学会の場所が、九州であったと知識を確認していて、推論を伴わない場合である。しかし、(3-21b)よりも話し手が感じる何らかの疑問や違和感は、はっきり現れない。この場合にお

いても「九州ではない可能性」という可能性を話し手が薄くても意識していることから「ハズダ」が使われるようになるのではないかと本稿では考える¹⁰。そして、(3-25)の場合でも、(3-25'')のように話し手が感じる疑問が強ければ強いほど「ハズダ」が使われやすくなる。

(3-25) そこに立っていたのは、前島一之ではなく金森龍男だった。あのアパートでは、一〇五号室に住んでいる [はずだ]。 【探偵：62】

(3-25') そこに立っていたのは、前島一之ではなく金森龍男だった。あのアパートでは、一〇五号室に住んでいる [Ø]。

(3-25'') A：あれは、金森龍男ではないか。

彼は、あのアパートの一〇四号室に住んでいる。

B：いや、違うよ。一〇五号室に住んでいる [はずだ] よ。

このように、「ハズダ」には推論を伴う場合もあれば、推論を伴わない場合もあることを確認した。そして、「ハズダ」の使用において推論過程を含むか含まないかを基に「ハズダ」の基本的な性質を理解するには、限界がある。本稿は、「ハズダ」の使用にはある使用条件があるのではないかと考える。これについては、次の3.3で述べる。

3.3 本稿の仮説：「ハズダ」の使用条件

「ハズダ」が使われる使用条件（文脈条件）に関する先行研究には、藤城（1997）、太田（2006）が挙げられる。藤城（1997：155）は、「ハズダは納得のいく理由の存在を主張することで、結果的に、命題を真と認識することの妥当性を主張する」と述べている。また、太田（2006：9）は、「ハズダ」の文脈条件として以下の3つを挙げている。

(3-26) 【ハズダの文脈条件（太田2006：9：(34)から引用）】

①現実にはどうなるかはわからない。 ②しかし、話し手にはすでに確信を持った判断がある。 ③話し手には、その判断を示すことにより、聞き手を納得させたり、行動を促したりなどするために、その判断の妥当性を主張すべき動機がある。

藤城（1997）と太田（2006）の先行研究における「ハズダ」の使用条件についてまとめると、

¹⁰ この場合に関しては、「ハズダ」の hedge としての語用論的な機能が働いているとも言えるが、これも「ハズダ」が「食い違い」という使用条件において話し手が当該の確認を確認することから起因すると思う。章を別にして述べることにする。

次のようになる。

(3-27) 「先行研究における「ハズダ」の使用条件」

- ① 藤城（1997）：納得のいく理由の存在の主張
- ② 太田（2006）：その判断の妥当性を主張すべき動機²の存在

次の(3-28)は、犯人を追跡中の警官が重大事故に巻き込まれたのを目にした犯人と同僚の警官との反応を表したものである。

- (3-28) a. 犯人：しめた！これで連中は皆死んだはずだ。 【藤城 1997:155:(7)】
 b. 警官の同僚：²ああ！田中は死んでしまったはずだ。【藤城 1997:155:(8)】

犯人は、同じことを目撃して、「しめた！これで連中は皆死んだはずだ」と言えるが、同僚の警官は、「ああ！田中は死んでしまったはずだ」と言うのは不自然である。これに関して、藤城（1997：155）は、納得のいく理由の存在を主張することを満足させる文脈ではないと説明をしている。これをまとめると、「ハズダ」の成立条件として、太田（2006）の「判断の妥当性を主張すべき動機²の存在」、または藤城（1997：155）の「納得のいく理由の存在を主張、命題を真と認識することの妥当性を主張」となるわけである。ここで重要となるキーポイントは「動機²の存在／納得のいく理由の存在」であると言える。しかし、これではやや曖昧な表現となってしまう。「ハズダ」を使うための動機や納得のいく理由の存在とは何であろう。

(3-29) （重大事故で車は燃え始めて、爆発寸前である。その車の中には警官が乗っていた）

- 犯人1：これで、警官は死んだ [にちがいない]。
犯人2：いや、まだ死んでいない [^{??}にちがいない]。

- (3-30) A：雨が降らなければいいんだけど。
 B：（天気予報を聞いている）雨は降る [だろう]。

(3-29)は、「警官を殺そうとしている」という状況から、犯人たちの動機と理由は、十分想定できる状況である。そこで、犯人1の「ニチガイナイ」は、「ハズダ」ではないのに、「死んでいるかわからないかわからない」「でも、話し手にはすでに警官が死んだという確信を持っている」「警官が死んだと言う判断するための動機（殺すために事故を仕掛けた）がある」という条件が揃っていて、言えてしまう。それに対して、犯人2の場合は「ニチガイナイ」の使用が不自然となる。では、これはどう説明すればいいだろうか。同じく、(3-30)は、「ダロウ」が使われているが、同じく

「雨が降る」と言うための動機や理由は存在する。つまり、動機や理由の説明では、やはり他の形式との区別ができなくなってしまう。(3-30)には、「ダロウ」が使われて確信の意味がないことから「ハズダ」との違いが説明できるかもしれないが、結局のところ (3-28)の「ニチガイナイ」のは説明ができないだろう。さらに、「ハズダ」の場合には、「ケド」などとの呼応がよく、何かのギャップが大きければ大きいほど「ハズダ」は使いやすくなる。

(3-31) a. (みんなが集まることになっている。その場所へ行ってベルを押すが、なんの返事もない状況)

もうみんな集まってる [はず] なんだけど... 【コナン 32】

b. もうみんな集まってる [#ダロウ] けど...

c. もうみんな集まってる [#ニチガイナイ] なんだけど...

上記の例は、今の時間であれば、予定通りにみんな集まっていると思っていたが、ベルを押しても返事がないことから、話し手が持っていた情報との食い違いが生じている。この場合は、「ハズダ」が一番自然となるに対して、「ニチガイナイ」や「ダロウ」を使うと食い違いがあることを含意しているよりは、まだ確認されていないことの未知のことへの予測に過ぎなくなる。しかし、(3-31a)は、予定通りにみんな集まっていると思っていたが、ベルを押しても返事がないという話し手が持っていた情報との食い違いが存在している内容から、「ハズダ」は問題なく使える。

ここで「ハズダ」の使用条件には「動機」や「理由」ではなく、話し手は、すでに事実として、または、確信を持った判断を持っていて、それとなんらかのギャップや食い違いというズレがあるときに「ハズダ」が使われるのではないかとする可能性について考えたい。従来の「ハズダ」の研究は、「ハズダ」の当然性や必然性に焦点が置かれていて、現実とのギャップなどを表すのは「ハズダ」の一つの用法にすぎないと言っているが、このズレという使用条件こそが「ハズダ」のキーワードとなる本質ではないかと考える。

話し手がすでに持っている知識とのズレが生じると、自然にそのズレが生じたことについて疑問に思い、それを自分自身なりに解決しようと再び話し手の知識を確認することになる。その一連の過程を表すのが「ハズダ」の基本的な意味機能ではないだろうか。まず、話し手が当該のことに関して疑問に思わせるズレには、いくつかのタイプが考えられる。まず、(3-32)は反事実的意味 (counter-factual meaning) を表していて、話し手の知識と現実とにズレがある場合である。

(3-32) (彼は会社でのイベントの参加のために朝早くから家を出ることになっていることを知っている。その時、家に潜り込むことを狙っていたが、彼は家にいたことを確認)

A：これ、どういうこと？この時間には、誰もいないと言ったじゃない。

B：いや、確かに彼は朝からイベント会場に行く [はず] だったけど。

(→ 実際は、イベント場に行っていない)

(3-32)は、彼はイベントの参加のために朝から家を出ることになっていたが、実際は家にいることを確認して、発話時前に得た「彼は朝からイベント場に行くことになっている」という情報を「ハズダ」を使って確かめている場合である。つまり、文脈的条件として「実際はそうではなかった」というズレが存在していて、さらに、下線の「彼は朝からイベント場に行く」という内容は、「彼は朝からイベント場に行かなかった」という現実と相反していることから反事実的意味を表している。

(3-33) (私の記憶)：彼は朝からイベント場に行く (α)



(現実)：彼はイベント場に行かなかった ($^{11}\neg\alpha$)

次の例は、現実と反するような反事実的な意味を表すというより、話し手が確信している、または、予想することと現実とに何らかの例外的な事態といったズレが生じた場合である。

(3-34) a. (机の上にボールを置いた後、後でボールを取りに戻ってきたら、ボールはなかった)

ここにボールを置いた [はずだ]。 (→ しかし、机の上にボールはない)

b. (今日は昼間から焼肉を食べたが、夜になってまた焼肉が食べたくなくなった自分に)

昼間から焼肉を食べた [はず] なのに。 (→ だけど、また焼肉が食べたい)

(3-34)は、ボールを机の上に置いたが、後で探そうとしてもボールが見つからない、または、昼に焼肉を食べたが、また食べたくなくなったときを表している。(3-32)の反事実的な意味と違うのは、(3-34a)の「ここにボールを置いた」や(3-34b)の「昼間から焼肉を食べた」という命題内容の真理値は真 (true) として変わらないことである。(3-34a)の「ボールを置いた」ということは、普通「誰かが触らない限り、ボールはそのまま置いたところにある」と話し手が予想・期待するわけだが、現実ではそうではなかったという文脈が存在している。同じく、(3-34b)の「昼間に焼肉を食べた」ということは、「焼肉は昼食べたら夜は連続では食べない」のが普通に予想・期待されるのだが、

¹¹ 「 \neg 」は否定 (not) の意味として、「 $\neg\alpha$ 」は「 α ではない」という意味で使う。

それにもかかわらず「また、食べたい」と思っている自分がいるというズレが存在している。

- (3-35) a. (事実) : テーブルの上にボールを置いた (α)
→ (予想) : ボールはそのままテーブルの上にある (β)
↕
(現実) : ボールはそのままテーブルの上にない ($\neg\beta$)
- b. (事実) : 昼に焼肉を食べた (α)
→ (予想) : もう食べなくてもいい (β)
↕
(現実) : また、焼肉を食べたい ($\neg\beta$)

なお、(3-32)の場合は、話し手の持っている知識 α と現実 $\neg\alpha$ との相反する反事実的なズレがあると同時に、話し手は両方とも事実関係として既知のこととして認識していると言える。一方、(3-34)の場合は、話し手が確信している、または、予想すること β と現実の間のズレ $\neg\beta$ を表しているが、 $\neg\beta$ であることは、話し手にとって事実関係として既知のこととして認識している。

- (3-36) a. 彼は朝からイベント会場に行く (α) 対

彼はイベント会場に行っていない ($\neg\alpha$)

($\neg\alpha$ であることを話し手は知っている)
- b. 昼に焼肉を食べた (α) → もう食べなくてもいい (β)
↕

また、焼肉を食べたい ($\neg\beta$)

($\neg\beta$ であることを話し手は知っている)

(3-36a)を見ると、予定として「彼は朝からイベント場に行く」ということや現実では「イベント場に行っていない」ことは、話し手にとって既知のことである。(3-36b)は、「もう食べなくてもいい」

という話し手の予想とは逆に、「また、焼肉を食べたい」と感じているわけであるが、この「焼肉を食べたい」という話し手の気持ちは、話し手がすでに感じていることであることから、話し手にとって既知のことであると言える。つまり、(3-36a)や(3-36b)は、話し手の知識や予想とズレが生じたことについてすでに既知として認識している。

一方、次の(3-37)と(3-38)は、当該の事態がすでに実現・成立していることを話し手が事実として認識している確認領域に属する場合ではなく、実現・成立する（している）かが話し手にまだ確認されていない未確認領域に属する場合である。

(3-37) A：明日は、クリスマスなのに、雨か。

B：雨？明日はホワイトクリスマスじゃないの。

A：いや、明日は雨が降る [はずだ] よ。(→ 明日の天気に関する相手との意見の違い)

(3-38) (試合でのミスが負けに導いてしまった後、その選手が記者会見をしているのを見て)

A：あの選手、ミスを犯したわりには落ち着いていますね。

B：それは分からないよ。心の中で「そこでミスさえしなければ」と叫んでいる [はず] !
(→ あの選手の心境に対する相手との意見の違い)

(3-37)は、明日の天気に関する聞き手との意見の違いから A が「明日は雨が降る」と主張する場合である。(3-38)は、A が敗戦の原因をもたらして選手のインタビューから落ち着いていることを述べるに対して、B は落ち着いているように見えるが、実際の心境では「そこでミスさえしなければと叫んでいる」ことを主張している。

(3-39) a. 「明日の天気に関して (α 対 α')」

(聞き手の意見)：雪が降る (α')



(話し手の意見)：雨が降る (α)

b. 「ミスを犯した選手の心境に関して (α 対 α')」

(聞き手の意見)：落ち着いている (α')



(話し手の意見)：苦しんでいる (α)

(3-39)は、聞き手と意見が違ってから、話し手は「ハズダ」を使って当該の内容に対して自分が正しいと思っていることを主張している。しかし、その意見の違いとは、「明日の天気」や「あの

選手的心境」に関することで、話し手にとっては未知のことである。明日の天気が実際どうなるのかは話し手にとって未知のことであり、あくまで「雨が降る」ということは可能世界に実現し得ることなのである。また、ミスを犯した選手が実際どういう心境なのかは、本人しかわからないことであり、聞き手の「落ち着いている」に対して「苦しんでいる」と思うのは、あくまで話し手の推測にすぎない。しかし、(3-37)と(3-38)で見られるズレとは、まだ真偽が決まっていない事態に対して、話し手が何らかのズレを感じる場合である。

そして、話し手が感じるズレが未確認領域に属するということは、単なる可能世界の事態を表しているかもしれないが、話し手がそのズレからの食い違いの度合いを強く感じれば感じるほど、「ハズダ」の使用が自然になるのではないかと思う。

(3-40)は、(3-28)の再掲であるが、犯人を追跡中の警官が重大事故に巻き込まれたのを目の当たりにした犯人と同僚の警官との反応を表したものである。先行研究では、使用条件では「理由・動機」に対して、警官の同僚の発話に「ハズダ」が用いられない理由として、本稿では、以下のよう

(3-40) a. 犯人：しめた！これで連中は皆死んだはずだ。 【藤城 1997:155:(7)】

b. 警官の同僚：²ああ！田中は死んでしまったはずだ。【藤城 1997:155:(8)】

(3-40b)の警官の同僚の発言で、「ハズダ」が不自然となってしまうが、その理由として考えられるのは、(3-40b)のように、単に事故現場を目撃したときには、警官である話し手にとっては、ズレを生じさせるような使用条件が存在しないことがないからである。

(3-41) a. [(使用条件の不在)] 話し手の知識・期待とズレ

b. 事故が起きた → [死んでしまった] #hazuda

したがって、次のように大事故で車が燃え始めて、爆発寸前であるにもかかわらず、事故に逢った同僚の警官を助けようとする文脈を加えると「ハズダ」が自然となることがわかる。

(3-42) (大事故で車は燃え始めて、爆発寸前である。その時、事故に逢った同僚の警官を助けるために同僚1が近づこうとする)

警官の同僚1：田中！助けなきゃ！

警官の同僚2：もう遅い！（田中なら）今の事故で死んだ [はずだ]。

(3-42)は、警官の同僚1が事故現場に近づこうとすることを止めながら、警官の同僚2は「ハズダ」を使っている。大田(2006)の説明では、犯人の場合は、それを仕掛けたことから、その動機があると言えることから「ハズダ」が使えるという説明になるが、本稿では、以下のように考える。

(3-43) (話し手の意見) : あの事故なら警官は死んだ (α)
→ (予想) : 救おうとしても助からない (β)
↕
(現実) : 警官を救おうとしている (β')

(3-43)は、(3-42)のことを説明しているが、話し手(=同僚1)が予想とする世界(この事故で死んだ)と聞き手(=同僚2)の行動とのズレ(救おうとする)があることがわかる。話し手が「もはやダメだと思っている」ことが強ければ強いほど、聞き手の意見とに関する違和感や食い違いの度合いが多くなる。そして、その度合いが大きければ大きいほど「ハズダ」は使われやすくなるのではないかと考える。なお、以下のように食い違いの度合いが弱くなる場合や記憶を確かめるときの場合もある。

(3-44) a. (探査船がどのあたりにいるかはわからないが)

写真撮影には成功しましたが、間も無く地表に落下する [はず] です。

【Discovery : 宇宙に舞う巨大いん石 (字)】

b. (はっきり覚えてはいないが) 彼はこの近くに住んでいる [はず] です。

(3-44a)は、彗星探査船を彗星に着陸させるために、探査船は彗星が近く落下するように、かつ、ある距離まで接近すると写真を撮って送るようにプログラミングされている状況である。そして、送られてきた写真を見て、ある一定の距離まで接近していることを確認している場面である。しかし、現在も探査船は落下し続けているが、探査船には着陸するための機能を備えていないため、細かい角度や落下する速度をコントロールセンターで計算しなければならない。計算上では、もうすぐ地表に落下し着陸することになっているが、まだ確実ではないので言い切れない。「彗星探査船を見ながらコントロールできないため、事故が起きてすでに爆発したり、軌道からずれたり

してしまう可能性もあり得る」という不祥事の事態を念頭に入れていることから何らかのズレが感じられるわけではない。また、(3-44b)は、3年前の記憶となる「この近くに住んでいる」と「ハズダ」で表しているが、話し手は「彼は今どこに住んでいるのか」という疑問に対して、話し手は記憶を引き出して当該の記憶を確かめている。

(3-44)のような例に関しては、明確な話し手の疑問を生じさせるようなズレが感じられないが、当該の内容である「間も無く地表に落下する」「彼はこの近くに住んでいる」とは、あくまで発話時においては未確認領域に属する事態、または、単なる記憶としての情報であるため、信憑性が落ちる可能性がある。話し手の知識の範囲から外れる「無事に地表に落下できず、例外が起きる可能性」「彼はもうこの近くに住んでいない可能性」を意識する話し手の認識的態度が働いているのではないかとと思われる。

つまり、「ハズダ」は、反事実的な意味を表す場合のように、そのギャップや食い違いが明確に現れるズレが存在する場合（話し手の知識と何らかの対立事項）から、当該の内容が未確認領域に属する場合や知識を確かめる意味にとどまるような、話し手の知識と関連のある何らかの対立事項が感じられない場合まで、話し手の知識とそれに例外的なことを対立事項として想定する何らかのズレが存在するときに使われるのではないかと考え、本稿では便宜上、「ハズダ」の使用条件を以下のように仮説を立てる。

(3-45) 仮説-その1：「ハズダ」の使用条件

話し手の知識、または、話し手が予想・期待することと現状においてズレが生じた場合、そのズレから生じた「疑問」を払拭するとき、「ハズダ」が使われやすくなる。話し手がそのズレを強く意識すればするほど「ハズダ」の使用が自然になる。

そして、「ハズダ」は、(3-46)のように、話し手の知識と話し手が予想・期待することと現状にズレがあるとき、典型的に3つのタイプが使用条件として存在すると考えるが、詳しいことは4章以降で述べることにする。

(3-46) 使用条件における「ズレ」の典型的なタイプ

- a. 話し手の計画・予定と非現実とのギャップ（反事実的）： 「 α 」対「 $\neg\alpha$ 」
- b. 話し手の予想・期待と現実の食い違い： 「 $\alpha \rightarrow \beta$ 」対「 $\alpha \rightarrow \neg\beta$ 」
- c. 話し手の知識との不一致「 $\alpha \neq \alpha'$ 」

(α ：話し手の知識／ α' ：話し手の知識とのズレを表す対立事項／ β ： α から予想できる事項)

では、使用条件とは、「ハズダ」が使えるためのベースを構築することである。ところが、「ハズダ」が何らかのズレを感じる時に使われやすくなるというならば、そのときの「ハズダ」の機能とは何であるかを考える必要がある。次の例は、(2-28)を再掲したものである。

- (2-28) a. (太郎は甘いものが好きなことは知っている。そこで太郎のプレゼントとしてお煎餅を買うべきだと言う友達に対して、ケーキを買うことを決めながら)
太郎はイチゴケーキを喜ぶ [はずだ]。
b. (昔のことなので自信はないが) そのことなら、15 年前のことだった [はずだ]。
c. (彼は死んでいたと信じていた、生きて現れた彼を見て) 彼は死んだ [はずだ]。
d. (この世の中には世界の果てがあるという話を聞いて) 地球は丸い [はずだ]
e. (彼女が怒る理由を聞いてから)
約束時間に 1 時間も遅れたら、彼女が怒る [はずだ] よ。

(2-28a)は、「太郎はイチゴケーキを喜ぶ」を「ハズダ」を使って述べていて、太郎がいちごケーキを食べるかどうかは未確認領域に属することでありながら、何らかの根拠に基づいて「太郎はイチゴケーキを食べる」ことが、当然的な帰結であるという話し手の推測を表しているとも言える。しかし、(2-28b)は、話の不確かな記憶を表していて、「そのことは、15 年前のことだ」という内容が当然的・必然的な関係を表しているのではない。さらに、単なる記憶の内容を確かめていることから、モダリティ形式として説明する際には、先行研究では除外されることになった。また、どうして(2-28 : c-d)のように、「ハズダ」だけが現実とのズレが生じる時に使われるかが説明できなかった。

(2-28a)を見てみると、話し手は「太郎は何を喜ぶ」かについて聞き手の意見とのズレがあり、(2-28b)の「15 年前のこと」という記憶については、記憶を確かめてはいるが、今はそうではない可能性を否認し、あくまで話し手が持っている知識が有効であると示すことから、弱いものの自分自身の記憶に対する疑いから生じるズレがあるとも考えられる。(2-28 : c-d)は「彼は死んだ」「地球は丸い」に反する他人の意見を聞いて、(2-28e)は、なぜ彼女が怒ったのかを疑問にしているのが前提にされている。話し手が何らなかのズレを感じるということは、それと対比される話し手が持っている、または、考えていることとのズレが生じていることを意味する。

このように話し手が持っている知識や考える内容とズレのある現状に遭遇すると、話し手は自分が持っていた知識や考えていた内容の正当性を与えるために、関連のある知識を確認するのではないかと考える。つまり、話し手が真だと信じていた知識が否定されるような状況になったとき、または、話し手が考える内容が否定されるような状況になったとき、話し手はすぐ保持して

いた知識・考えを新しいものに更新することもあり得るが、当該の知識やある判断に導かれる土台となる知識を再び確かめることもできる。そして、再び当該の知識を確認することで、自分自身が正しいと再び正当性を付与することによって、ズレから生じる疑問を解決しようとしているのである。

(3-47)は、(2-28)の話し手が感じているズレから生じる疑問を解決するために、「ハズダ」を使うことによって、自分が持っている知識を探し、問題にされている当該の知識を話し手自身が保持していることを確認しているのではないかという内容を示している。

(3-47) a. 相手の意見と話し手の意見のズレ：

[お煎餅を喜ぶ] 他の可能性 対 [イチゴケーキを喜ぶ] 話し手の考え
↓
<ズレの存在>

[(太郎の好き嫌いの情報から) 太郎はイチゴケーキを喜ぶ] 確認

b. 覚えている記憶の内容のズレ：

[15 年前のことではない可能性もある] 他の可能性 対
[15 年前のことだと覚えている] 話し手の記憶
↓
<ズレの存在>
[(経験的記憶から) 15 年前のことだった] 確認

c. 覚えている記憶の内容のズレ：

[今、目の前に現れている] 外部の情報 対 [彼は死んだ] 話し手の情報
↓
<ズレの存在>
[(経験的記憶から) 彼は死んだ] 確認

d. 相手の意見と話し手の意見のズレ：

[世界に果てがある] 外部の情報 対 [地球は丸い] 話し手の情報
↓
<ズレの存在>
[(一般的記憶から) 地球は丸い] 確認

e. 事態に対する不審な気持ち：

[彼女が怒る理由が分からない] 現状 対 [彼女が怒る理由は、存在する] 話し手の考え
↓
<ズレの存在>
[(話し手の経験から) 約束時間に 1 時間も遅れたら、彼女が怒る] 確認

(3-47)は、「太郎はイチゴケーキを喜ぶ」「15 年前のことだった」「彼は死んだ」「地球は丸い」「約束時間に 1 時間も遅れたら、彼女が怒る」の内容を確認しているのだが、「ハズダ」を持ってこの

確認が行われる理由としては、まず当該の知識は話し手が保持しているものであり、これとズレのある現状が生じたときに、そのズレを埋めるために話し手は自分が持っている情報を確認していると考えられる。

以上、「ハズダ」とは、話し手が持っている知識を確認するのが本質的な意味・機能ではないかと考え、仮説を立て検証していく。しかし、知識を確認するというのは、話し手が持っている知識をそのまま述べ立てるのではなく、わざわざ確認することは、当該の知識に対する話し手の確認するに値する疑問などが生じていることを表し、その疑問などを生じさせるのが、当該の知識の確認に引き金となると考える。

(3-48) 仮説-その2：「ハズダ」の意味・機能

話し手が真だと思っている、または、真であろうと予想する内容と何らかの話し手の認識的なズレが存在する場合、それに起因する疑問を払拭するために、「知識の確認」を行う。ここでの「確認」とは、「ハズダ」の使用条件のもとで、「当該の関連のある知識を引き出し、再び確かめる」という意味である。

本稿では、先行研究が現実との食い違いがある場合とない場合を別々に述べてきたものを、「話し手の認識的なズレ」という文脈的条件をプロトタイプとして条件付け、「知識の確認」の機能から「ハズダ」の使用に関する統一的な説明を試みるのを期待する。

「ハズダ」を用いて、当該の知識を確認するためには、確認させる何かの引き金が必要である。すでに持っている知識を話し手が確認するためには、それなりの動機が必要だからである。そして、本稿では、その使用条件を話し手が真として持っている知識や真であろうと想定することに関して何かの話し手の認識的なズレの存在を仮説として挙げた。それは、すでに持っている知識があるからこそ、それに対比されるズレが生じることが可能で、さらにそれは確認の対象となり得るからである。

以上、3章では、本稿での「ハズダ」に関する仮説を述べたが、4章・5章では、本稿で立てた仮説に基づいて「ハズダ」の用法を考察していく。推論を伴う「知識の確認」や推論を伴わない「知識の確認」について用例分析を行い、「ハズダ」の統一的な説明を試みながら、先行研究における問題点を克服していく。

第4章 推論を伴う知識確認形式の「ハズダ」

4.1 概要

話し手が真だと思っている、または、真であろうと予想する内容と何らかの話し手の認識的なズレが存在する場合、それに起因する疑問を解消するために、「知識の確認」を行うのが、「ハズダ」の機能であるという仮説を立てた。4章では、その仮説に基づいて、「ハズダ」の用法が統一的に説明できるかを検証していく。

まず、話し手の未確認領域に属する事態とは、まだ実現していない、あるいは、実現・成立していることが話し手に確認されていないことを意味する。したがって、話し手は知識を使って、未確認領域のことを推論していく。そこで、そして、話し手の疑問を生じさせるような何らかの対立事項が存在するときに、話し手は関連する知識を確認しようとする。言い換えると、事実と認識したり、話し手の考えと何らかの食い違いがあつてそれを疑いなしにそのまま受け入れたりすれば、「ハズダ」を使う必要はない。

- (4-1) a. 地球は丸い。
 b. A：ここには、コンビニなんてないよ。
 B：そうなんだ。コンビニはないんだ。

しかし、度合いの問題があつても事実として認められない、そのままその受け入れられない何らかの対立事項があり、そこから生じる疑問があれば「ハズダ」が言えるようになるのではないのかと考える。まずは、4.2からは、未確認領域に対する「ハズダ」について、推論を伴う場合について述べていく。

4.2 未確認領域における話し手の疑問

話し手が真として信じている信念や情報などが話し手の知識であると述べた。これらの知識は、話し手の内部にあるものであり、現実と比較され、強化されたり、修正されたりする。そして、話し手が持っている知識と現実との間で何らかの疑問を感じるとき、話し手は自分が持っている知識を確認することによって、話し手が保持している信念、情報といった知識によって、話し手自ら判断の妥当性を支える。しかし、知識そのものが正しいか正しいかは重要ではない。話し手が持っている知識は、話し手によって後で書き換えられるまで、知識として扱われることになる。

まず、未確認領域に属する知識の確認には、自然と推論を伴うが、その知識の確認の引き金となる話し手の疑問には、①話し手の知識と何らかのズレが生じる疑問に起因する場合もあれば、②未確認領域に対する単なる疑問に起因する場合があると見られる。

(4-3) 推論を伴う知識の確認の使用条件（疑問）のタイプ

a. 話し手の知識と現実とのズレが認識される場合：「 α 」対「 α' 」

b. 話し手の知識と現実のズレが小さく認識される場合：「 α 」対「 α' 」^{不明確}

→ 「 α' 」^{不明確}：「 α 」とのズレを生じさせる「 α' 」の存在が明確に特定できない

(α ：話し手の知識／ α' ： α とのズレを表す対立事項)

上記の疑問という使用条件は、「ハズダ」が使えるためのベースを構築するわけであるが、では、話し手が疑問を持つとき、「ハズダ」がいかなる機能を担っているかを考える必要がある。

以下、「ハズダ」の使用条件と意味・機能について検証していく。4.2.1 では、話し手の疑問を生じさせる何らかの対立事項が明確に見られる場合について説明する。4.2.2 では、話し手の疑問を生じさせる何らかの対立事項が不確定のものとして明確に見られない場合について考察する。

4.2.1 話し手の知識と現実とのズレが認識される場合：「 α 」対「 α' 」

まずは、話し手が何らかのズレを感じて疑問に思うこととは何なのかについて述べる。

(4-7) a. ガソリンスタンドは、この峠を越えたら見える。

b. ガソリンスタンドは、この峠を越えたら見える [ハズダ]。

(4-7)では、「ガソリンスタンドは、この峠を越えたら見える」という命題に対して、(4-7a)は無標形式が(4-7b)は「ハズダ」が使われている。これは、どれも「ガソリンスタンドは、この峠を越えたら見える」という話し手の知識を述べていることから一致しているとも言える。また、発話時

より後のことについて話していて、実際「ガソリンスタンドが見える」とは確認していない・目撃してはいない。つまり、未来時における未確認領域のことが対象となっている。しかし、(4-7b)のように、「ハズダ」が使われているということは、以下のような文脈が考えられる。

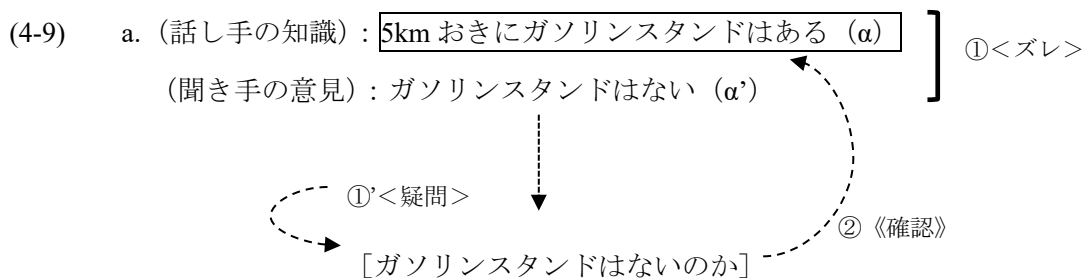
(4-8) A : ガソリンがありません。

B : 大丈夫。もう少し行けばあるよ。

A : (しばらく経ってから) 見えないですね。ガソリンスタンドは、ないんですかね。

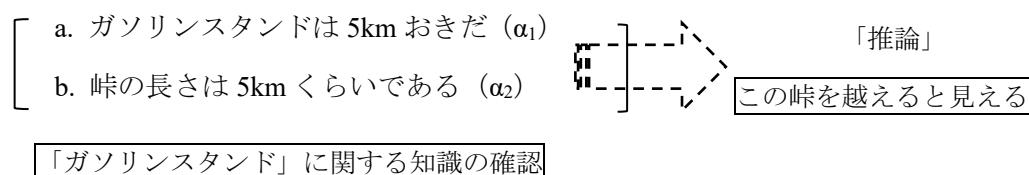
B : いや、地図によると、5km おきにあると書いてあるから、この峠を越えたら見える
[はずだ] よ。

(4-8)では、B は「ガソリンスタンドがもうすぐ見える」と想定しているが、A の「ガソリンスタンドはない」という意見と対立していることがわかる。そして、なぜ「A はないと言っているのか」「自分が間違っているか」という疑問を払拭するために、「ハズダ」を使って知識の確認を行う。



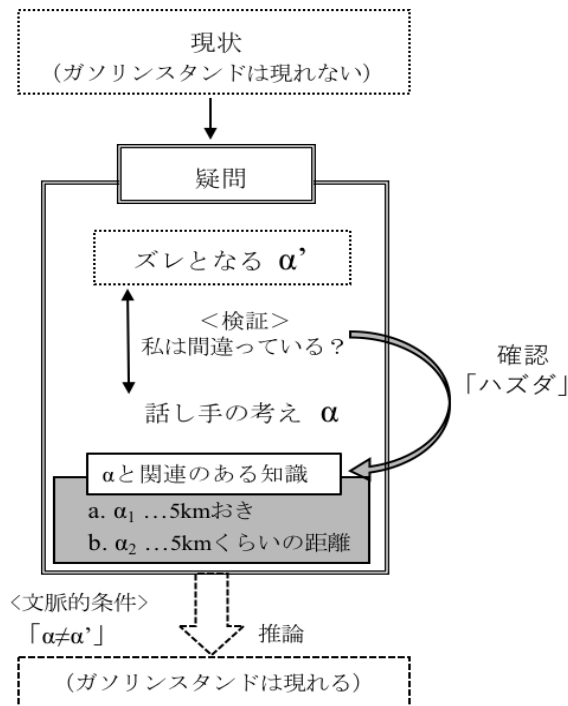
(4-9)は、「5km おきにガソリンスタンドがある」という知識を持っていて、「通り過ぎた前のガソリンスタンドから峠を超えると大体 5km くらいになるのでガソリンスタンドがある」と考えている話し手と「ガソリンスタンドが見えないこと」から焦っている聞き手とズレから生じている。そのズレから、話し手は「ガソリンスタンドはないのか」と自分自身への疑問に対して、実際はどうなるのか断言できないが、「地図には、5km おきにガソリンスタンドがあると書いてあった」という知識を持っていることを確認する。そして、そのような知識が存在し、それが有効であることは、「後少しでガソリンスタンドが見える」と推論しているように見える。

(4-10) 「ガソリンスタンドは、この峠を越えたら見える」に至るまでの知識の確認



これには、「ガソリンスタンドは峠を越えると必ずある」という「峠を越える→ガソリンスタンドが見える」という必ず真となる演繹推論の関係であるよりは、「ガソリンスタンドは 5km 先だ」「峠の長さは 5km くらいである」という事例から経験的な推論（頭の中での計算）を表すと言える。「後少しでガソリンスタンドが見える」という事態は、話し手にとって未確認領域のことで、話し手は「この先、ガソリンスタンドは現れるのか」という疑問に対して、関連のある知識を確認することで、「この先、ガソリンスタンドは現れる」と推論するのも妥当であることを示している。しかし、単に、知識を使って未確認領域のことを推論するだけだとすれば、必ずしも「ハズダ」でなくてもいいだろう。(4-8)の「ハズダ」の機能とは、「地図には、5km おきにガソリンスタンドがあると書いてあった」という知識を有効なまま自分が持っていることを確認することで、疑問を払拭するのが、その機能でないかと考える。

このように、聞き手の意見「ガソリンスタンドは現れない(α')」から生じたズレから「ガソリンスタンドは現れないのか」という疑問を払拭するために、「ガソリンスタンドは 5km おきだ(α_1)」「峠の長さは 5km くらいである(α_2)」という BEST となる知識を確認する。そして、この確認作業を行う際に、話し手は「地図などにガソリンスタンドは 5km おきである」「現在超えている峠の長さに関する知識」などから経験的に「この峠を越えたらガソリンスタンドが見える」とその知識の確認には同時に推論過程が含まれる。そして、推論した内容「この峠を越えたら見える」の背景には、それと関連する「ガソリンスタンドは 5km おきだ(α_1)」「峠の長さは 5km くらいである(α_2)」という知識を話し手が保持していることを示すことによって、「この峠を越えたら見える」という話し手の判断の妥当性を主張することになる。これを図式化すると、次の<図 4-1>のようになる。「ガソリンスタンドは現れない」ということを示唆する聞き手の発言（現状）から、結局話し手は、自分自身が考えていたこととのズレを感じ、「ガソリンスタンドが現れるのか」と疑問に思うことになる。しかし、話し手は自分が間違っているかを検証するために、関連のある知識 α_1 と α_2 が自分自身にとっては有効であることを確認する。その結果、自分自身の考えは妥当であると主張するのと同時に、その知識が正しければ「もう少しでガソリンスタンドが見える」と推論しているのである。



＜図4-1＞ (4-8)の「ハズダ」の知識確認の流れ

これには、「ハズダ」とは、話し手が疑問を払拭するために、知識を確認するのが基本的な機能であり、未確認領域の事態と関わることがゆえに、推論が伴われる知識確認とも言える。しかし、その知識から導かれる推論の結論よりは、その根拠となる「知識」を話し手が持っていることを表すのが、「ハズダ」の機能であることを言いたい。

次の4.2.2では、知識と現実とのズレが小さく認識される場合における「ハズダ」の意味・機能について述べていく。

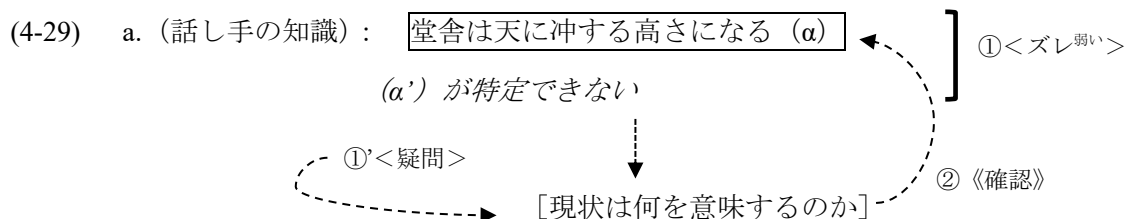
4.2.2 話し手の知識と現実とのズレが小さく認識される場合：「α」対「α'」^{不明確}

4.2.2で扱うものは、4.2.1と同じく問われることが話し手の未確認領域に属することには変わらないが、現状に関して話し手の疑問を生じさせる何らかのズレが明確に現れない場合である。疑問を生じさせるズレが明確に現れないことから、単なる話し手の確信的な推測を表すように見えるが、本稿では、使用条件となる当該の事態に対する何らかの疑問が存在して、その疑問とは具体的にズレとして現れない不確定のものとして話し手にとって認識されることから、その答えを見つけようとする認識的な働きかけがあると考え。そして、その中心にあるのが、未確認領域に属する事態を扱うことで、推論を伴う判断がなされるものの、関連のある知識を確認することであると考え。関連する知識を確認することで、疑問を解消しようとしているのである。次の例を見てみよう。

(4-28) ーなんだあれは、こんなところに堂舎でも建てるつもりなのか。果安は思わず足を止めた。これだけ大きな基壇を持つ堂舎は、奈良にもない。東大寺の大仏殿も、こうまで大きくなかった。上に建てられる建物は、天に冲する高さになる[はずである]。

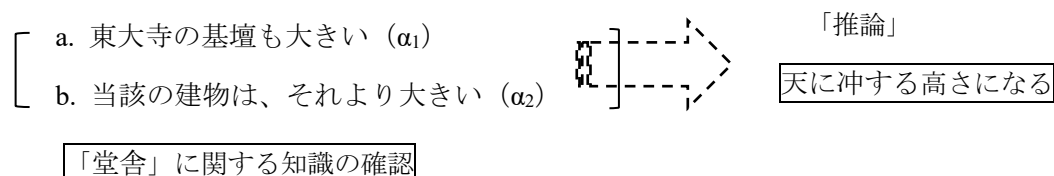
【現代：陸奥甲冑記】

(4-28)は、「上に建てられる建物は、天に冲する高さになる」とこれから完成予定の堂舎を推測していることから、まだ起きていない未実現のことを述べている。そして、「ハズダ」が使われているが、現実における「上に建てられる建物は、天に冲する高さになる」という話し手の考えと何らかのズレ(α')が明確に現れていない。(4-28)は、工事現場をみて「上に建てられる建物は、天に冲する高さになる」と話し手が判断しているが、これには「東大寺の大仏殿もこうまで大きくなかったが、これは何を意味する？」という話し手の疑問が働いていると思う。



(4-29)のように、話し手は「東大寺の大仏殿もこうまで大きくなかったが、これは何を意味する」という疑問から、「今建てている堂舎は、天に冲する高さになる」と判断しているが、その背景には「東大寺の大仏殿の基壇も大きかった」「それより大きい基壇である」という知識の確認が行われて、「こんなところに大きい建物が出る」は話し手にとって確認済みのことであるが、「基壇の大きさから、実際高い堂舎になること」は、話し手にとって未確認領域であることから、必ず「大きくなる」と断言できるのではないことから、話し手の推論が行われることになる。

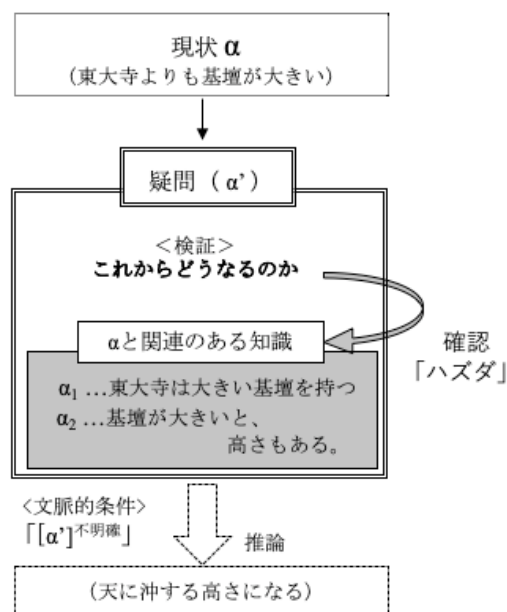
(4-30) 「天に冲する高さになる」に至るまでの知識の確認



そして、その知識の確認を行うために、(4-30)のように、「東大寺の基壇も大きい」「当該の建物は、それより大きい」という知識(α)を確認することから、「東大寺の大仏殿よりも高くなる」と推論されることを表している。ただし、使用条件となる話し手の疑問には話し手の知識とズレが明

確に現れないだけに、単なる「これからどうなるのか」という疑問に対して推測しているように見える。しかし、この場合でも、「ハズダ」を使うことは、「上に建てられる建物は、天に冲する高さになる」の裏に話し手がこれと関連のある知識を確認していることを示していると考ええる。

(4-28)は、話し手が認識的なズレとして感じるのが明確に現れていないために、ただ現状の「これだけ大きな基壇を持つ堂舎は、奈良にもない」ということから「これからのどうなるのか」という疑問に対する答えを「天に冲する高さになる」と出しているのではないかと考える。しかし、「ハズダ」が話し手の認識的なズレという使用条件の中で、関連する知識を確認することが基本的な機能であるとすれば、「基壇が大きいと、その分高さもある」という知識の存在を話し手が確認することは、「上に建てられる建物は、天に冲する高さにならない可能性がある」という例外的な事態は話し手の知識には存在しないことを示して、話し手の判断からズレのある事態を排除することになると考えられる。これを図式化すると、次の<図 4-3>のようになる。



<図4-2> (4-23)の「ハズダ」の知識確認の流れ

次の(4-31)は、「今回の新 MacBook Pro は、一般ユーザーで便利なことは間違いない」と発話時と同時に成立することを述べているが、話し手にとっては未確認領域に属する内容である。

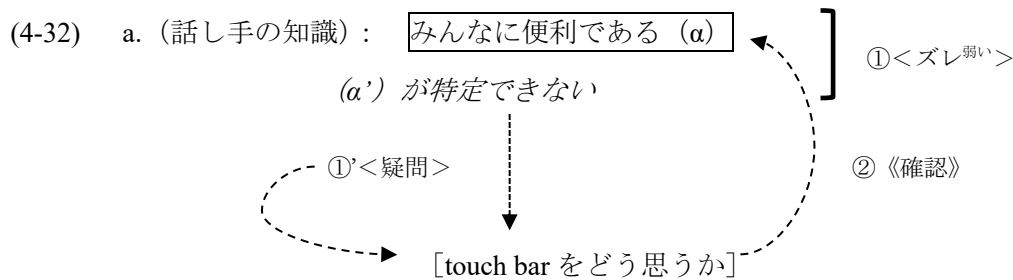
(4-31) 「今回の新 MacBook Pro は、DJ などクリエイターをターゲットにした印象が強いですが、一般ユーザーで m¹²便利なことは間違いない [はず]。日本でも本日発売開始のため

¹² 原文において文字化けしたものを写したものである。

Touch Bar を体験したい人は、ぜひ Apple ストアに駆け込みましょう。

【<https://techacademy.jp/magazine/10747>】

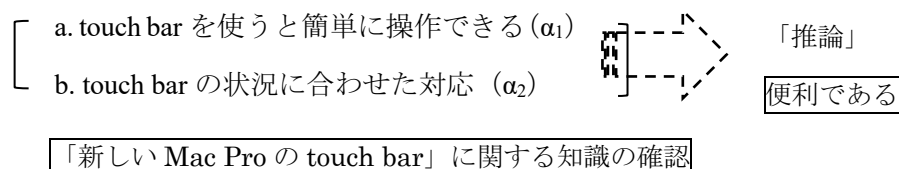
(4-31)は、「touch bar 機能を持つ新 MacBook Pro に対するいろんな世論が形成されている」という現状から、「(今回の新 MacBook Pro は) 一般ユーザーで便利なのは間違いない」という知識(想定を含む)を確認しているが、使用条件としては明確なズレから生じる疑問が現れていない。



(4-31)も(4-28)と同じく、「新しい新機能 touch bar」に関する内容と話し手が何かの認識的なズレを感じているとは、強く言えない。だが、「逆に、新しい新機能 touch bar はクリエイターをターゲットにした印象が強いと思われがちだが、本当にそうなのか」という疑問を自ら設定しすることから、自らその疑問を払拭するために、関連する知識の確認を行っていると考えられる。

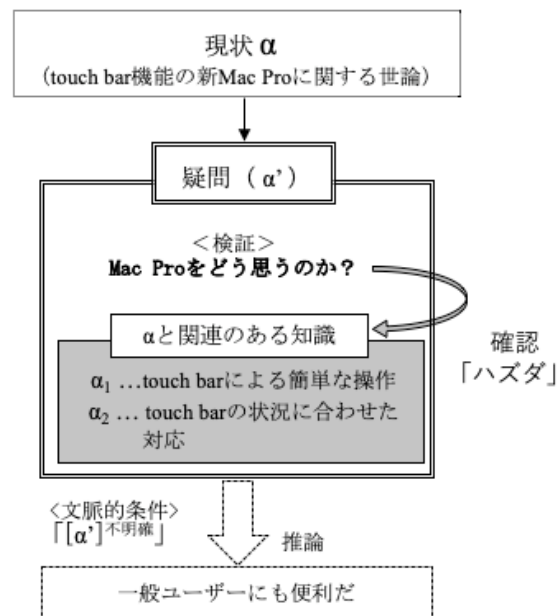
話し手には例外的なことを念頭に入れることから、自分の疑問に対する話し手の内部における検証であると言える。実際の広告でもクリエイターたちが活用する映像がよく見られるが、話し手には「今回の新 MacBook Pro について、皆が話し手の思うように必ず便利であるとは限らない」「一般ユーザーにでも人気がある」と述べたい気持ちがあり、それを支持するために、話し手は、新 MacBook Pro の touch bar に関連する知識を確認することで、話し手以外の人（一般ユーザー）にも「便利である」ことを推論しているのである。

(4-33) 「便利なことに間違いない」に至るまでの知識の確認



(4-33)は、「touch bar を使うと簡単にパソコンの操作ができる」「様々な状況に合わせて touch bar は対応でき、活用できる」という知識(α)からすることから、一見、クリエイターをターゲットにした印象が強いように見られるが、あの便利さから考えると、「一般ユーザーの場合でも便利に思

う」と推論する。そして、その判断の背景には、それを裏付ける知識(α)の存在、「touch bar を使うと簡単にパソコンの操作ができる (α_1)」「様々な状況に合わせて touch bar は対応でき、活用できる (α_2)」、が存在することを示している。そして、このような知識の確認を行うことで、話し手は「touch bar 機能を持つ新しい Mac Pro をどう思うか」という疑問を払拭することから、「一般ユーザーの場合は好評されない」という話し手の判断に対する例外的な事態の可能性を払拭するのだと考える。これを図式化すると、次の<図 4-4>のようになる。



<図4-3> (4-31)の「ハズダ」の知識確認の流れ

このように当該の事態に対する話し手の疑問について、ズレが明確に現れない疑問が話し手に認識される場合について述べてきた。「ハズダ」を使って知識の確認が行われるわけであるが、「ハズダ」の使用の引き金となる話し手の疑問が明確にどの対立事項とズレを見せているかが現れない場合である。しかし、未確認領域の事態であるからこそ、話し手にとってはその成立・存在について疑問を持ち、その答えを出そうとする。そして、「ハズダ」は、それを推測・推量することが第1次的な機能であるというよりは、その判断を支える知識が話し手に存在することを、そしてその知識を話し手が確認するのが本質的な機能であると考ええる。そして、話し手の疑問を払拭するために知識の確認が行われる場合も見えてきたが、その一環として知識の確認の内容から外れる例外的な場合は、話し手の知識には存在しないことを表すこともある。次の(4-35)から(4-37)も「ハズダ」が使われているが、同じ説明ができる。

(4-35) そのままシュワークマンは、モスクワで一番安全なところ、アメリカ大使館に逃げ込む。

早速大使館付きの医者が調べたが、マスタード（からし）ガスがぶち込まれたのは分かったが、症状が重いのでそれ以外のものがある [はずだ]、と医者は言う。

【現代：国際情報 just now】

(4-36) 学生はあちこちにいる。その間を分けるようにして歩く。耳はそば立てていた。学生を呼び止めて聞くよりも、噂をしている中に入って行ったほうがよい。事件は昨日のことだ。まだ噂は消えていない [はずだ]。 【現代：「長崎-東京」特急殺人】

(4-37) 「例えば、あの橋にしても、その少年が誰にも気づかれずに外部から持込んだとは信じられません。手近なものを利用したに違いないのです。アンリエットが台所に使っていたというその物置には、壁に吊して、鍋などをのせる吊棚があった[はずだ]と思うのですが、どうでしょうか？」 【現代：強盗紳士】

(4-35)は、シュワークマンが帰国の前日、モスクワ郊外の修道院でイコン（中世及び近世に描かれたロシア正教の聖画像）を鑑賞していたところ、ある男から襲撃で尻に激しい痛みを感じる。その後、アメリカ大使館に逃げ込む状況である。医者のその体に注入されたのが、「マスタード（からし）ガス」であることはわかったが、マスタード（からし）ガスから予想できる症状より重いことから、別の何かがあると想定する。しかし、全く他の情報がない限り、原因は別のところにあるかもしれないのである。「症状が重いのでマスタード（からし）ガス以外のものがある(α)」から「注入された成分の中で、マスタード（からし）ガス以外のものではなく、別の何かの原因である可能性もある」という例外的なことを払拭するために、医者は自分の経験が許す限りの知識の確認を行っている。

(4-36)は、事件に関する情報を得るために、一々学生に聞いているよりは噂をしているのを見つけた方がいいと思い、「事件は昨日のことだから、噂は消えていない」と想定している。が、噂は聞いていなくても、学校のおもてでは話題にされることがない可能性も存在する。そのような例外的なことを解消するために、話し手は再び「事件は昨日のことだから、噂は消えていない(α)」という想定に「ハズダ」を用いて検証を行っていると言える。

次の(4-37)は、首飾りがなくなった事件の犯人を探す場面で推理を表している。話し手は、回転窓から侵入したと判断し、それができるのは小柄の子供であると推理したが、「回転窓から窓の把手に届いたと見るには、距離があまりにもありすぎる」という聞き手の疑問とその推理の証拠を聞かれると、「どんな証拠があるかですって？...証拠に不自由はしませんよ.... 例えばですね...」と黙り込んだ後、誰にも気付かれずに橋を持ち込むことが不可能であることから、回転窓から窓の把手に届くためには、橋の代わりとなるものとして、吊り棚のようなものを使ったと推理する。そして、ちょうど台所として使っている物置があることを思い出して、そこならば吊り棚のよう

なものがあると想定する。しかし、同時に台所として使っていたという物置には吊り棚がない可能性だってある。「アンリエットが台所に使っていたというその物置には、壁に吊して、鍋などをのせる吊棚があった」という話し手の想定と食い違う例外的なこと（吊り棚がない）も当然意識することになる。その例外的なことを念頭に入れることから、自分の疑問に対する話し手の内部における検証を行うことで、疑問を払拭すると言える。

話し手自ら疑問を持ち、再び話し手が持っている知識（話し手の想定を含む）を確認することから、知識以外の例外的な事態は、話し手の判断リストから排除される。その結果、「話し手の知識が許す範囲の中から判断すると」という主観的な意味にもつながる。これは語用論的にも責任回避といった *hedge* としての使用としてのつながりを示すが、これについては6章で触れることにする。

4.3 まとめ

4章では、話し手の知識と未確認領域の事態とのズレから生じる疑問や話し手の不確定の疑問から生じる知識確認のタイプについて考察した。未確認領域に属する事態に対する話し手の判断を表すことから、自然に推論を伴う「知識の確認」が行われると考える。また、推論を伴う「知識の確認」の場合には、推論過程が含まれていることから、使用条件となる「疑問」を生じさせる何らかの対立事項の存在が弱まる場合もある。未確認領域における「ハズダ」の知識の確認には、不確定のものであることから、ズレなどが明確に現れないのが使用条件として働いているが、「ハズダ」の知識確認の過程には当該の事態に対する何らかの疑問がないと「ハズダ」は使いにくく、その疑問が強く意識されればされるほど「ハズダ」は使いやすくなることで、その疑問に対するズレにも度合いが存在する。

(4-39) (不良となった人に暖かい心を取り戻すことによって更生を図るための策を練る)

A：猫を持ってきて、学校の正門の前に捨てられたのように箱の中に入れて置いて。

B：で、うちの猫をどうするんだ？

A：アニマルセラピーって知ってる？

動物を触れ合うことをきっかけに川崎さんの心優しい部分を引き出すの。彼女の心が動かされれば、きっと拾う [はず]。

【俺の青春ラブコメ S1-5】

(4-39)は、Aの意図がわからないBの「なんで？」という発言から話し手なりの仮説「猫のようなペットを見ると、人は保護本能を感じる」があり、その仮説が「本当にそのようになるか」という疑問を自ら念頭に入れて、「彼女も前は暖かい心を持っていた」「猫のようなペットは保護

本能を引き出せるので、彼女の心が動かされ、猫をそのままほっとくことはできず、拾う」といった知識の確認が行われていると言える。度合いの差はあっても、「ハズダ」を用いる前に話し手の疑問がなければ、(4-39'a)のように「ハズダ」の使用は不自然である。

(4-39') A: 猫を持ってきて、学校の正門の前に捨てられたのように箱の中に入れて置いて。

B: なんで?

A: アニマルセラピーって知ってる?

動物を触れ合うことをきっかけに川崎さんの心優しい部分を引き出すの。

(← 疑問を持たない)

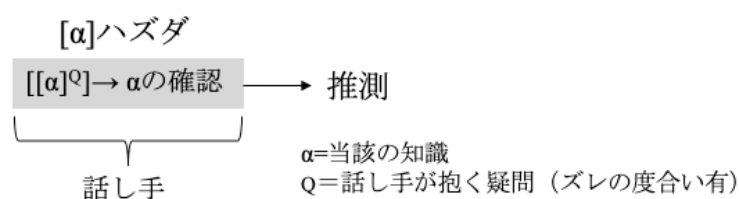
a. 彼女の心が動かされれば、きっと拾う [???はず]。

b. 彼女の心が動かされれば、きっと拾う。

本稿では、「ハズダ」の使用には、知識を確認するのが主な機能であると考えて分析をした。その根拠として、「ハズダ」とは、根本的にある事態に対して、疑問を感じたときに、その疑問に対する答えを出すために、当該の事態と関連のある知識を確認し、かつ、話し手にとっては有効であることを確認する。この「知識の確認」があるからこそ、話し手は自分の判断の妥当性を与えたり、自分の判断が正しいことを主張したり意味するようになる。

そして、未確認領域の事態に対する「ハズダ」の意味・機能とは、関連がある知識を使い、再び推論過程を経て行う知識の確認であると考えられる。「ハズダ」の知識確認に至るまでの流れは、全て話し手がどう考えているかを表す「話し手の内部」で行われるものであり、その確認作業は、自分自身に対する自問自答であるとも言える。何かの現状において、初めて話し手は「なんで」という疑問を感じる。その疑問には、対立事項となるものがはっきり見える場合もあるが、見えない場合もある。その度合いの問題はあるとしても、話し手が現状に対する疑問を解消するために、「関連のある知識を探して、それを確認する」ということが「ハズダ」の基本的な流れである。そして、疑問を解消すると同時に、話し手の知識には存在しない例外的なことを排除することにつながると考えられる。

(1-6) 未確認領域における推論を伴う「ハズダ」の意味・機能



これらの知識確認には、純粋に話し手の知識の範囲だけでは言い切れない場合が多く、推論過程を伴うわけであるが、推論過程を伴わない「知識の確認」も「ハズダ」には存在する。その知識だけ直面している事態を全て説明できるような、完全に否定できないような場合がそれであるが、5章では、このタイプの「ハズダ」の知識確認について述べていく。

第5章 推論を伴わない知識確認形式の「ハズダ」

5.1 概要

4章では、「ハズダ」の知識の確認として、推論を伴う場合について述べたが、「ハズダ」の知識の確認には、推論過程を伴わない場合も存在する。この場合の知識の確認とは、その知識が推論を必要とする記憶といった知識そのものが問われる場合が多い。その知識とは話し手が直接的な経験、または、推論を伴う必要のない百科事典的知識のように「周知のこと」から成るもので、その知識が確認されることは、知識が話し手によって揺るぎのない真に近いものであればあるほど、疑問にされることは強く当該の知識と対立事項が存在するということを表しやすくなる。一方、知識を伴うか伴わないかは一刀両断できるような両極的なものではない。場合によっては、以下のようにその区分が曖昧である場合もある。しかし、「ハズダ」が使えるためには、何らかの現状に対する話し手の疑問を表すことには変わりがない。

5章では、推論を伴わない「ハズダ」の知識の確認を中心に考察していく。このような知識そのものの確認という特徴から、単なる記憶のことが根拠として使われるだけに見える可能性もあるが、「ハズダ」が使われることは、知識そのものの真偽が問われ、確認の作業が行われることは、話し手が保持している知識との何らかのズレを強く感じられるときが特徴的である。これには、①話し手の知識と現実とのズレが生じる場合、②話し手の予想・期待との現実とのズレから生じる場合、③話し手の知識と現実が反事実的な関係にあるズレの場合という3つの対立事項が挙げられる。

(5-5) 使用条件における現実と話し手の知識と外部からの何らかの対立事項のタイプ

- a. 話し手の知識と現実とのズレが認識される場合：「 α 」対「 α' 」（「 α' 」^{不明確}）
- b. 話し手の予想・期待と現実とのズレ：「 $\alpha \rightarrow \beta$ 」対「 $\alpha \rightarrow \neg \beta$ 」

c. 話し手の知識と現実が反事実的な関係にあるズレ：「 α 」対「 $\neg\alpha$ 」

(α ：話し手の知識／ α' ： α とのズレを表す対立事項)

上記の対立事項から生じる話し手の疑問という使用条件とは、「ハズダ」が使えるためのベースを構築するわけであるが、推論を伴う知識の確認の場合と同じく、(5-5a)のタイプには、ズレが明確に現れない場合を含むが、推論を行う知識の確認は、未確認領域に対する事態について述べることに起因するが、推論を伴わない知識の確認は、知識のそのもの信憑性が話し手自ら不審に思われる時に起因すると考える。以上、5.2 からは、「ハズダ」の推論を伴わない知識の確認について、(5-5)に挙げた使用条件に基づいて話し手の知識の確認という観点から「ハズダ」の機能について述べていく。

5.2 話し手の知識と現実とのズレ：「 α 」対「 α' 」(「 α' 」^{不明確})

4.2 の未確認領域での知識の確認とは違って、疑問に思われるのは、話し手の知識そのものであり、そういうところから考えると、確認領域における知識の確認とも言える。一般的な事実といった知識、または、話し手の内部領域のみ存在する記憶といった知識が現状において何らかの認識的なズレから疑問が生じて、それを話し手が当該の知識を確認することで、ズレを払拭しようとしているのである。そして、その疑問に思われる知識とは、話し手の領域に存在するものだけではなく、共通の社会において共有できるような百科辞典的知識も存在する。そして、話し手が持っている知識の真理値が真に近ければ近いほど、それに反するズレから疑問を持ち、「ハズダ」を使って知識の確認が起きやすくなる。話し手の知識事態が話し手に何の違和感のない疑問に思われないと、話し手はわざわざ「ハズダ」を用いて自分が持っている知識を検証する必要はない。

(5-6) a. $1 + 1$ は 2 である [はずだ]。

b. クジラは哺乳類である [はずだ]。

(5-6)は、「ハズダ」を使って「 $1 + 1$ は 2 である」「クジラは哺乳類である」という知識の確認が行われているが、この文が適切になるためには、必ず当該の知識が何らかのズレを生じさせる現実と対立しているという文脈的条件が必要となる。(5-6a)の「 $1 + 1$ は 2 である」や(5-6b)の「クジラは哺乳類である」という知識は、社会的に決められてる、認められている、いわゆる絶対的な知識とも言える。したがって、話し手はわざわざ再びその知識について確認をする必要はない。知識の確認が行われているのは、当該の知識に対して話し手が疑問にするとき、行われることである。「ハズダ」を使って当該の知識の確認を行うことは、その知識が何らかの食い違いから話し

手が検証の必要を感じているからなのである。

(5-7) A: $1 + 1$ は1である。

B: 何言っているの? $1 + 1$ は2である [はずだ] よ¹³。

(5-8) A: クジラは魚だから、その大きさから考えると、産む卵も本当に巨大だよ。

B: ちょっと、クジラは哺乳類である「はずだ」よ。

(5-6: a-b)は、(5-7)と(5-8)のように「 $1 + 1$ は2である」「クジラは哺乳類である」という知識は、社会的に決められてる、認められている、いわゆる絶対的な知識とも言えるがために、そこから生じるズレに対する疑問は、話し手の中では強く働くことになる。したがって、聞き手が存在する場合は、(5-9)のように話し手に認識されるズレのある知識を話し手は確認することから、聞き手に対しても答えの修正を強く暗示させることにつながりやすくなる (5.3 で詳しく述べる)。

(5-9) a. $1 + 1$ は2である [はずだ]。

→ 「 $1 + 1$ は2である」以外の答えの修正を要求

b. もう来るなと言った「はずだ」。

→ 「ここに来ること」への行動の変更を要求

あるいは、聞き手の存在しない場合は、単にズレから生じた疑問を払拭するために、対立事項となっている知識を確認することで、話し手が持っている知識がまだ有効であることから、話し手が保持している知識の妥当性を保証する。または、話し手が保持していた知識の有効性が疑われたり、修正の余地があったりする場合は、疑問を解消するために別の知識を探ることから疑問を払拭しようとする意味につながりやすくなることもある。

¹³ しかし、「 $1+1$ は2である」が必ず全ての場合において正しいとは言えない場合もある。(5-7)において「 $1+1$ は2である」と知識の確認が行われる範囲とは、あくまでも「数学の計算のルール」という知識の体型の中での1つの知識にすぎない。話し手は、数学的な問題として一番 BEST となる「足し算」の知識から確認しているが、聞き手が数学的な領域ではことからの隠喩として使っているとすれば、反論されることもあり得る。

(5-7') A: $1 + 1$ は1であるときもあるよ。

B: 何言っているの? $1 + 1$ は2である [はずだ] よ。

A: 私は、数学の足し算のことを言っているのではない。水玉1個と水玉1個を足しても量は増えるかもしれないが、数が2個になるのではない。私が言いたいのは、もっと多様な視野を持って人生を楽しめばいいんじゃないということが言いたいわけ。世間って、いつも規則通りには動かないよ。

(5-10) a. $1 + 1$ は2である [はずだ]。

→ どうして「 $1 + 1$ は2である」という結果になったか疑問にして別の知識を探る

b. これが可能なのは、何かの仕掛けがある「はずだ」。

→ どうして「これが可能であるか」という疑問から別の知識を探る

このように「ハズダ」の推論を伴わない知識の確認には、知識そのものの存在が問われるために、その真偽の問題で100%に近い真に近ければ近いほど、ズレの度合いはより強く現れる。そして、「ハズダ」とは、話し手の持っている知識そのものが疑われ、話し手による再確認が行われると考えると、どうして「ハズダ」だけが何かのズレの意味を持ちながら(5-6)のような百科事典知識と言えるかが説明できる。

以上、(5-6)のような知識の確認の流れには、話し手の知識(α)が何らかのズレから疑問が生じ、それを話し手が確認を行う。そして、話し手は自分が持っていた知識がすでに有効であることを示すと同時に、疑問を払拭しようとするのである。

一方、このような知識の確認には、疑問を生じさせる対立事項が明確に現れない場合も多々ある。話し手が持っている知識とは、話し手の個人的な性格が強いことから、記憶としての知識が、現実においてズレが生じて、その記憶の内容を確認する場合もあれば、その記憶となる知識が話し手自らにとって信憑性を失い、不審の気持ちが増せば増すほど、当該の知識に関して疑問を持つことになりやすい。その結果、知識を確かめることにつながる。

(5-11) A: 太郎は甘いものが好きじゃないから、これを買おう。

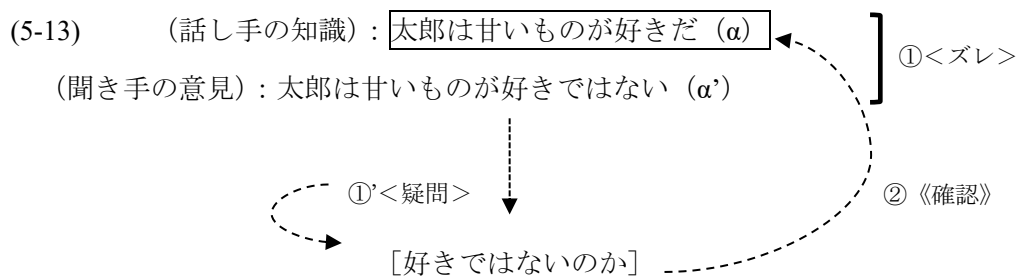
B: いや、太郎は甘いものが好きな「はずだ」よ。

(5-12) A: 問題検討会の出席に関するお知らせのメールが来たのは、先週の水曜日だったけ?

B: その知らせが来たのは、先週の土曜日だった [はず] です。

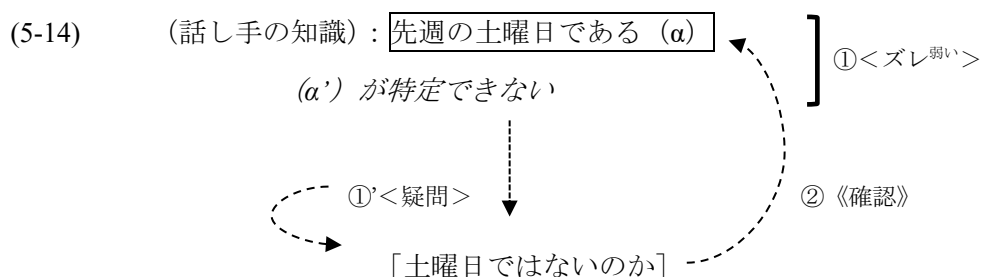
(5-11)は、「太郎の好み」に関わる知識の中で、話し手は「太郎は甘いものが好きだ」という知識を持っていたが、当該の知識が聞き手の発話によってズレが生じて、話し手は「太郎が甘いものが好きだ」という知識を再度確認している。(5-12)は、「問題検討会に関するお知らせのメール」に関わる知識の中で、当該の内容と関連のある知識「先週の土曜日だった」という知識を確認している。特に、(5-12)の「ハズダ」の用法は、先行研究では、「記憶」「回想」という用法として説明されてきたが、どうして「ハズダ」の用法として出てくるのが明確に説明できなかった。まず、(5-11)は、「太郎の好み」に関わる知識の中で、話し手は「太郎は甘いものが好きだ」という知識を持っていたが、当該の知識が聞き手の発話によってズレが生じていることから、次の(5-13)

のような知識の確認が行われていると言える。



話し手の記憶としての知識 (α)、そのものが現実において不一致 ($\alpha \neq \alpha'$) といったズレからが生じた疑問に対して、話し手は自分の知識の中で定着している知識が疑われることで、もう一度「太郎の好み」に関する知識の中で「甘いものが好きだ」ということを確認することで、認識的なズレを払拭しようとするのである。

これに対して、(5-12)は、(5-11)のように認識的なズレを生じさせる何かが外部から明確に現れていない。それに対して、「お知らせのメールなら、先週の土曜日だ」という記憶とたる知識は、話し手にとって一度知識として定着しているものであったが、経験的な知識とは時間の流れによって信憑性が薄れていく可能性がある。または、「お知らせのメールなら、先週の土曜日だ」について自分が間違っているかどうかという疑問を抱いているかもしれない。そして不審の気持ちから生じた疑問は、話し手によって自ら関連のある知識（記憶）を確認して、あくまで話し手の知識の中でのものとして、有効性を示すと同時に、「お知らせのメールが来たのが先週の土曜日ではない」という例外的な可能性は、話し手の知識の中には存在しないことから排除する。



話し手は、(5-14)のように自分自身の中で問われる「先週の土曜日である」ということの不信感を払拭するために、知識の確認を行うことで、「(私の記憶から言えば) 先週の土曜日である」と述べることになる。この類の知識の確認において、記憶となる知識が話し手に保管されているものは、時間の経過とともにその信頼性が弱くなる場合も十分考えられる。つまり、あくまで記憶としての知識とは、話し手だけの内部世界に存在するものであり、その記憶となる知識がは

っきりしない時には「私の記憶が正しければ」のように一旦保留にかけてそれを確かめる意味となるのである。そして、問われる知識とのズレから生じる疑問が、「ハズダ」を用いて知識の確認とともに解消されるわけである。しかし、その確認された知識が常に真である必要はない。

このように、話し手が真として保持している知識であれ、それは話し手の知識の中に限ることであり、話し手の自ら、当該の記憶に対する信頼性に疑問を抱く場合は、あくまで「私の記憶が正しければ」のように現実の不一致という話し手なりの疑問が働いているように考える。

(5-17) 「何かあったんですか」、そう聞くと、「一一〇度が取れたということです」と答えた。
一一〇度とは、東経一一〇度C Sのことだ。確か、まだ免許はされていない [はずだった]。
【現代：今のテレビが使えなくなる日】

(5-18) だいたいこの「あだな年増」を世に広めたのは昭和の初めに作られ大ヒットした「東京行進曲」という流行歌だ。おぼろげな記憶のままに言えば、「むかし恋しい銀座の柳」につづけて「あだな年増を誰が知ろ」という歌詞だった [はずだ]。

【現代：ことばの森へ】

(5-17)と(5-18)の例は、話し手にとって一旦知識として定着している記憶の内容を探って該当する内容を確認している。(5-17)では、記憶の内容を取り出し、該当する内容を確認するという思考過程を顕わにする場合に、「タシカ」という副詞との共起も見られる。まず、話し手は「東経一一〇度C Sはまだ免許されていない」という知識を持っていたが、「免許が取れた」という話を聞いて、話し手が持っている知識とのズレから生じる「免許のことはどうだったのか」という疑問を解消するために、再び「まだ免許はされていない」と知識の確認を行なっている。(5-17)に対して、(5-18)は、自分の記憶の中に既得情報として保管されていたものを、さらに取り出して確かめる場合であることは同じであるが、ズレを生じさせるものが外部の現実から起因するのではなく、話し手の内部に起因する場合である。(5-18)のように、「おぼろげな記憶」のことから一旦当該の知識に対して「持っている記憶としての知識が間違っている可能性」を念頭に入れることから、再びその知識であるかの確認を行なっているのである。そして、その記憶があることは、必ずしも当該の内容が真であるとは言えないが、「むかし恋しい銀座の柳」につづけて「あだな年増を誰が知ろ」という歌詞だった」という想起の意味につながるのである。

(5-18)のように既得情報として保管されている知識とは、時間の経過とともにその信頼性が弱くなる場合もあり、それを「ハズダ」を使って確認するのである。ただし、「ハズダ」を使う以上、その知識の確認には、話し手が自分自身の記憶としての知識を既得情報としてそのまま確認するのではなく、その信憑性が疑われている状況の中での答えとして確認している。「私の記憶が正し

ければ」のように一旦保留をかけてそれを確かめる意味となる。

したがって、このような「ハズダ」の意味は、記憶内容の真偽性は一旦保留にされ、記憶という裏づけから疑問視される命題内容の確認を試みるということが特徴的であり、記憶として残った既得情報や知識、経験などをそのまま述べ立てるものではない。以下の(5-19)と(5-20)の例を参照されたい。

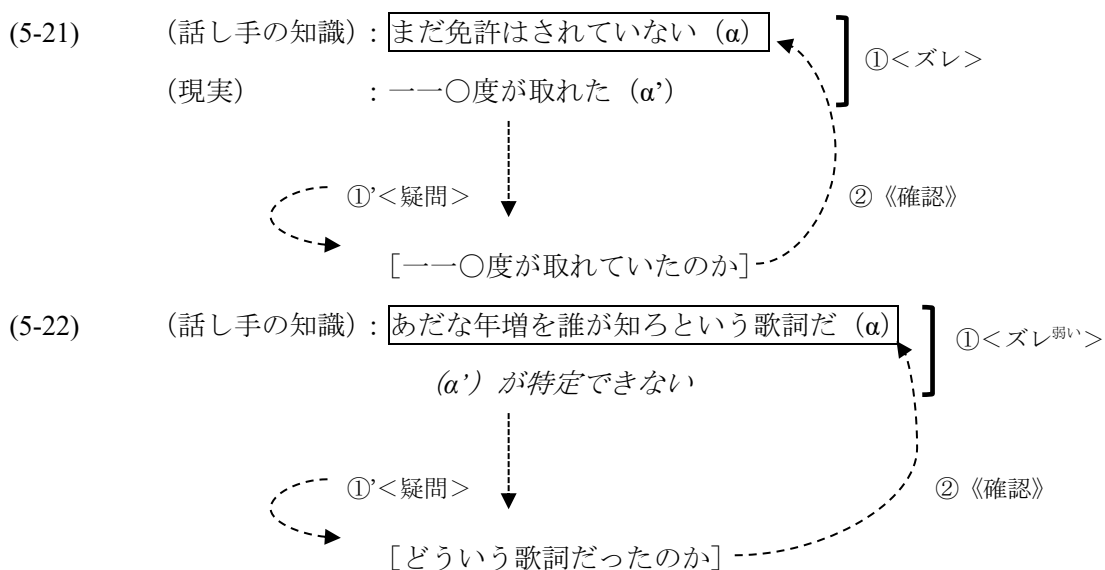
(5-19) a. 確か、まだ免許はされていない。

b. 確か、まだ免許はされていない [ハズダッタ]。

(5-20) a. …「あだな年増を誰が知ろ」という歌詞だった。

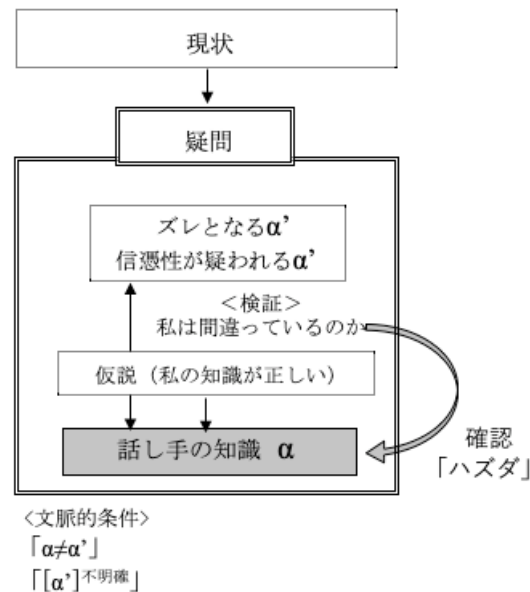
b. …「あだな年増を誰が知ろ」という歌詞だった [ハズダ]。

(5-19a)と(5-20a)のように述語の無標形式で記憶の内容を確認するときには、その文の内容は話し手にとって既知として記憶に蓄えられた情報が、発話にあたって、記憶の中からそのまま引き出される形である。それに対して、(5-19b)と(5-20b)では、ただの記憶の情報を引き出すことにとどまっていない。(5-19b)は、「まだ免許はされていない」という知識が疑われるような現実からの食い違いから生じる疑問に対する知識の確認であり、(5-20b)は、「…「あだな年増を誰が知ろ」という歌詞だった」という知識が疑われるような記憶の内容の信頼に問題を話し手が感じる時に、その真偽は一旦保留にするが、該当する知識が話し手の中に存在することを再び確認することで、その疑問を解消しようとしているのである。



以上、確認領域における「ハズダ」の知識の確認について述べたが、話し手に一旦知識として

受け入られているものを再確認するということは、持っている知識が疑われるなどのことが生じたときのことであろう。特に経験的な知識（記憶）は、時間の流れによって常に信頼できるものであるとは限らない。そこで「ハズダ」を使って、当該の知識の確認が行われる。そのような知識が話し手にあることを示すことになり、あくまで話し手の領域の知識を確認したことを示すことになるのである。これを図式化すると、次の〈図 5-1〉のようになる。



〈図4-4〉 知識と現実とのズレにおける「ハズダ」の知識確認

5.2 の話し手の知識と現実とのズレの場合は、当該の事態に話し手が疑問に思うのが「ハズダ」の使用条件であると述べた。また、そのとき、話し手の知識は既知としての確認領域に属するものであり、それが現実においてなんらかのズレが生じるときに、それを解決しようと話し手は知識を確認する。また、既知としての知識とは、話し手が疑問を感じても、具体的なズレを意識しているより、時間の経過とともに当該の知識の信憑性について話し手自ら疑問にするときにも知識の確認が行われる。

さらに、当該の事態における話し手の疑問は、既知としての知識と現実とのズレより、知識から予想・期待されることが現実においてズレが生じる場合、その原因と期待の元となる知識を確認する意味にもつながりやすい。

(5-23) 「…増えてませんか？」妖精さんたちはぴたりと動きを止めてわたしを見つめます。一、二、三、四…確かに四人。でも連れてきた時は三人だった〔はず〕なのですが。

【人類】

(5-23)は、連れてきた妖精は三人だったが、後で確認したら四人だったことに対して話し手は、「どうして、四人なのか」を疑問にして、記憶としての「連れてきた妖精は三人だった」という知識を確認することから、話し手の知識と現実の間に生じたズレに対して自分の知識は間違いなことを述べている。しかし、(5-23)は、話し手の知識と現実におけるズレとしても考えられるが、「連れてきた妖精は三人だった」という知識から予想・期待される「今一緒にいる妖精は三人である」と現実における「妖精は四人である」とのズレを表しているとも言える。特に、このようなズレは、聞き手（客体的な存在としての話し手を含む）に対する何らかの働きかけという発話行為を表すことにもつながる。5.3 では、話し手の予想・期待と現実とのズレにおける「ハズダ」の知識の確認について述べる。

5.3 予想・期待と現実とのズレ：「 $\alpha \rightarrow \beta$ 」対「 $\alpha \rightarrow \neg \beta$ 」

5.2 では、話し手の知識は既知としての確認領域に属するものであり、それが現実においてなんらかのズレが生じるときに、それを解決しようと話し手は知識を確認することについて述べてきたが、話し手が当該の知識を疑問に思うのは、直接当該の知識と現実における何らかのズレが存在する場合だけではない。話し手の予想・期待と現実とのズレから、なぜそのような結果になったかを自分から検証する場合もある。このような「ハズダ」による知識の確認とは、話し手の直接的な経験（行動を含めて）などから予想される・期待されることが、実際の現実では実現しなかったときに、そこから生じる疑問に答えるために、話し手が予想・期待するきっかけとなった知識を再び確認する場合である。

(5-24) 「…（中略）。それなのに、その直後に、マンションの前で香取紗千子にばったり出会ったとかで…岸千鶴子のほうは、忘れ物に気づいて、タクシーに乗り、マンションへ戻ったところ、玄関前で香取紗千子と鉢合わせしたってわけです。岸千鶴子が言うには、私鉄の駅で彼女を見たときは、そのまま電車に乗った [はず] なのに、その直後に、同じ女性とマンションの前で鉢合わせするなんてことはないはずだとね。…（中略）」

【現代：不在証明は女たちのゲーム】

(5-25) 「フィリップ、おいで、私の愛する息子。なぜ、私に顔を見せてくれないの」フィリップは母の顔を思い出した。子供の頃の思い出が堰を切ったように心に溢れ出した。「坊主、どこに隠れたんだ？」父の声だった。父もフィリップが幼い頃に亡くなった [はずだった]。フィリップは懐かしさでいまにも嗚咽がこみ上げてきそうになるのをこらえるのがつらかった。

【現代：戦場特派員】

(5-24)において、話し手は直接的経験（視覚的経験）から「彼女（香取紗千子）はそのまま電車に乗った」という情報を得て「ゆえに、（今）マンションの前で鉢合わせすることはない」と考えたにも関わらず「玄関前で鉢合わせした」ことから、話し手の中では「どうしてこんなことが起きたか」という疑問を生じる。その疑問の原因となった食い違い引き起こした根本的な要因は、「彼女（香取紗千子）はそのまま電車に乗った」という直接的経験から得た知識である。そこで根本的な要因となるその知識を確認することで「ゆえに、（今）マンションの前で鉢合わせすることはない」と思った自分は間違っていないと自問自答しているのである。つまり、問われる知識「彼女（香取紗千子）はそのまま電車に乗った」という内容の真偽を一旦保留にし、話し手の知識を再び確認することからその真偽性を確かめているとも言える。

(5-26) a. 電車に乗った (α) → 会うことはできない (β) (期待・予想)

b. [会った (¬β)] 食い違い

c. [電車に乗った (α)] hazuda

(5-25)では、「フィリップの父は幼い頃に亡くなった」ことを既定のこととして当然再び「父の肉声を聞くことはできない」ことは容易に想定できる。しかし、「坊主、どこに隠れたんだ？」と父の声が聞こえるあり得ない現実遭遇したときに、「父の声が聞こえる」という現実と話し手の予想とは食い違いが生じる。「今の声が本当に父の声なのか」という疑問に対して、話し手（＝フィリップ）は「父は自分が幼い頃に亡くなった」という知識を確認することで「実際の父は亡くなって、今の声は亡霊の声に過ぎない」と現実（父の声が聞こえる）に対して対応していくのである。

(5-27) a. 父が亡くなった (α) → 父の声を聞くことはできない (β) (期待・予想)

b. [父の声が聞こえた (¬β)] 食い違い

c. [父は亡くなった (α)] hazuda

なお、このような知識の確認には、聞き手の存在によって発話行為を表す新たな機能として働く場合がある。これは当該の内容に関する期待・予想が話し手自身に関わっている自問自答であるというよりは、聞き手との密接な関連があるときに現れる。したがって、「ハズダ」の意味の問題というよりは語用論的な性質が強い。つまり、話し手が当然聞き手に期待していたことに何らかの食い違いが生じ、それを聞き手に主張することから、聞き手は自分の提示した意見などの修正を働きかけられるのである。

- (5-28) A : (銃を持って) 動くな !
 B : (それにかまわず、動いている B)
 A : 動くな !
 B : (それにかまわず、動いている B)
 A : 動くなと言った [はずだ] !

(5-28)は、A に対して「動くな」と命令していて、普通に銃を持って「動くな」と命令すると「動かないでじっとする」ことを予想する。が、B がそれにも関わらず動いていることに対して、話し手は「動くなと命令したにもかかわらず、なぜ動く?」「私が変なことを言ったのか」と疑問を持つ。そして、その疑問を払拭するために記憶となる知識「動くなと言った」を確認することで、聞き手の B にも再考するように促しているのである。これは先行研究では<確認要求>の用法として分類されていたが、このような用法が可能となる理由は、「ハズダ」がズレから生じる疑問などを解消するために関連のある「知識の確認」を行うことから起因するのである。(5-28)の流れをまとめると、次のようになる。

- (5-30) a. 動くなと言った (α) (発話行為) → 動かない (β) (期待・予想)
 b. [動いている (¬β)] 食い違い
 c. [動くな言った (α)] ^{hazuda}

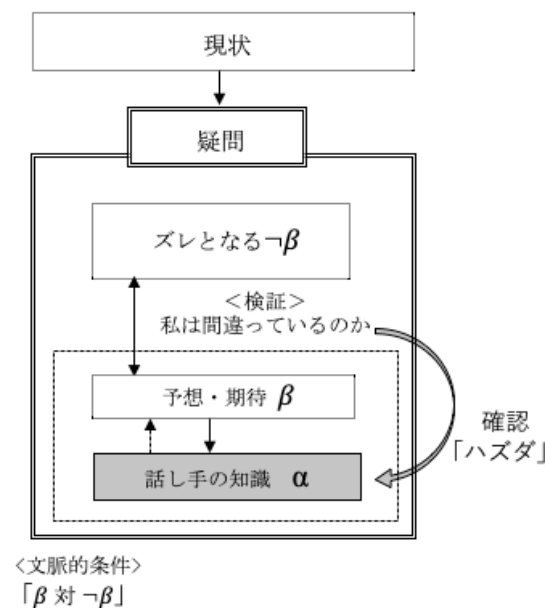
話し手が当該の事態に対して疑問を抱くとき、その疑問の原因となるのが話し手の予想・期待と現実とのズレである場合、話し手は自分の予想・期待と食い違いのある対立事項が生じたことに対して疑問を解消しようと知識の確認を行う。その疑問に対する答えを見つけるために、関連のある知識の確認作業を行うわけであるが、その背景には話し手が予想・期待をすることの始まりである原因となる知識があり、それが話し手の内部では有効であると同時に事実であることから、ズレのある現実に関して何らかの態度をとることになる。それが単なる知識と結果との間にズレが生じていることから、問題の検証として止まる場合もあれば、関連する知識があったことは確かであり、そこから予想・期待されるのは妥当であることを主張することから、話し手自身への反省の意味や聞き手に対する言動を修正するように働きかける意味につながる。

- (5-32) a. (もう 2 度と寝坊はしないと誓ったが、また寝坊をしたとき)
 自分に寝坊しないと誓った [はず]なのに、また、やってしまった。
 b. (知っていることは全て報告するように命じたが、後で黙っていたことを知ったとき)

君にはこういう結果になっていたことを知っていた [はずだ]。なぜ黙っていた？

(5-32a)は、反省の意味を含め、最初話し手が決めた意志としての「自分に寝坊しないと誓った」という知識を確認している。一方、(5-32b)は、その発話行為としての働きかけが聞き手に及ぼす場合であり、「君にはこういう結果になっていたことを知っていた」ことという知識は話し手の内部では事実として健在であり、その結果「全てを報告するのは当たり前だ」ということにもかかわらず、報告しなかったことを批判しているのである。

以上、話し手の予想・期待とのズレにおける「ハズダ」の知識の確認を図式化すると、次の<図 5-2>のようになる。



<図4-5> 予想・期待と現実とのズレにおける「ハズダ」の知識確認

このタイプの知識の確認には、当該の知識(α)から予想・期待(β)するが、それが現実では相反するズレ($\neg\beta$)が生じたときの知識の確認である。しかし、話し手の予想・期待に反する現実から話し手がそのズレに対して「どうして、このような結果となったか」と疑問に思い、そのズレを生じさせる根本的な知識を探して、確認する過程であるということは、話し手が当該のことに関して疑問を感じ、それを関連のある知識を確認する「ハズダ」の機能の一種であると言える。

そして、話し手が疑問を持ち、感じる何らかの対立事項とは、話し手が予想・期待と現実とのズレから生じる場合もあれば、話し手の知識では実現予定のものとして受け入れられていたが、現実では実現しなかった事態（既知のこと）から生じる場合もある。5.4 では、知識と現実が反事実的な関係にある場合について述べることにする。

5.4 知識と現実が反事実的な関係にあるズレ：「a」対「¬a」

話し手が持っている知識と現実とのズレから、疑問を持ち、関連のある知識の確認を行うときには、反事実的な意味を表す場合がある。反事実的な意味（counter-factual meaning）とは、話し手がすでに当該のことが偽（false）であることを知っていることから生じると言える。平常文であれ条件文であれ、又は、反事実条件文であれ、話し手が作る文について考えるときにその文を作った張本人である話し手と離して考えることはできない。それほど話し手の認識（事態の捉え方）は重要であると言える。話し手が外部的な事柄・事態などの客体的な素材からそれを言葉で表現する時、その内容には話し手が作り出す世界が反映される。そして、自然にその話し手の指標としての主観性には、自分自身を取り囲んでいる外部世界（現実世界）に対しての認識も存在している。Sweester（1990）は、これに関して「周知の事実¹⁴」を言及している。ある事態や自分の考えを言葉で表現する時、自分を指標として深く関わることだとしたら、そこには何よりも根本的に自分自身と関わることについて誰よりも自分自身が知っていると言えるだろう。自分自身のことについて一番よく知っていることは、外部世界（現実世界）を捉えるとき、話し手なりの主観的な捉え方をすることであり、同時に話し手は自分が話したことについてもよく知っていることになると言える。そして、それは認知的なスケールにまで深い影響を及ぼしている。

このように、話し手は話し手の外部世界で存在する事実より自分自身が事実(Realis)だと思っていることを事実として受け入れるからこそ、反事実的な世界を構築することができるのである。

「ハズダ」の場合も同じことが言える。対立事項の対象となる知識という存在があって、それを話し手が意識していることから、反事実的な意味を表すことができるのである。

まず、知識と現実が反事実的な関係における「ハズダ」の知識の確認とは、以下のような条件文の場合と非条件文の場合の2つのタイプが存在する。

まず、反事実的な解釈の「ハズダ」において、条件文における場合であるか否かに2分類できる。

5.4.1 条件文と非条件文における用法

(5-33)のように、条件文における「ハズダ」の反事実的な用法には、その反事実的な意味を生み出すのに「ハズダ」の存在が大きく関与しないことがわかる。

(5-35) 本来なら、父の食事を運ぶことなど、母の仕事だ。いや、そもそも家のなかがうまい

¹⁴ 話し手が自分の、現在またはごく最近のことに関して自信のない言明をするのは、自然なことではない。そうしたことは大人の、意識のしっかりした話し手ならば、おそらく自分自身が一番よく知っていることだからである(Sweester 1990 : 162-164)。

っているならば、父が旅館の方に泊まることなどない [はずだった]。 【現代：理由】

(5-35)は、反事実条件文の中で「ハズダ」が使われている場合である。反事実条件文は、話し手が反事実的な世界を描く際に、偽である前件からなる後件を述べることから、後件の内容に対する反事実性は前件の前提から決められ、その前件の内容に対する反事実性は話し手や語り手の事実に反する主観的な捉え方から生じるのである。

(5-35)のような場合では、「はずだ」「はずだった」の両形式が使われ、下線のところは、現実では前件と後件は偽であることが、話し手によって既知のこととして認識されていると言える。また、前件や後件とも命題内容に対する真偽問題は「偽」として前提されているため、他の概言を表す形式などに置き換えても問題はない。

(5-35') ～、父が旅館の方に泊まることなどない {だろう／かもしれない}。

これに対して、(5-34')のような場合は、反事実的意味を表す「ハズダ」の使い方であるが、非条件文における場合の反事実的な意味を表すには「ハズダ」がないと、反事実的な意味は消えてしまう。

(5-34') 学会は三月に開かれる [はずだった]。しかし、三月に開かれなかった。

a. 学会は三月に開かれる [*だろう]。しかし、三月に開かれなかった。

b. 学会は三月に開かれる [*]。しかし、三月に開かれなかった。

(5-34'a)は、「はずだった」の代わりに「だろう」が使われて、(5-34'b)は無標形式が使われているが、(5-34)のように非条件文は、「ハズダ」(特に「はずだった」の過去形の形で現れる)がないと反事的な意味が表せない。これは条件文(反事実条件文)における場合と非条件文における場合の両方において「ハズダ」が使われているが、反事実的な意味を生じさせる機能が違うことが分かる。特に、非条件文の場合は、その反事実的な意味が深く「ハズダ」と関わっていると言えるだろう。5.4.2では、反事実的な意味解釈に「ハズダ」が深く関わる非条件文における用法について述べる。

5.4.2 「前提条件依存型」：「ル形＋ハズダッタ」

「ハズダ」は条件節の力を借りずに反事実的な意味を生成することができるが、非条件文における「ハズダ」は、反事実的な意味が出てくるのは、「ハズダ」の非過去形の「はず(だ)」が使われている文には見つからず、「ハズダ」に前接する用言は非過去形の動詞であり、「ハズダ」は過

去形をとる「(動詞) ル形+はずだった」の形でのみ見られる。

(5-40) ドイツの潜水艦がキール港を出発した二週間あと、日本の潜水艦「伊二九」が、ドイツ占領下のフランス・ロリアン港をでた。この艦にもおなじ機密書類が積みこまれていた。どちらかが秘密の任務を成功させる [はずだった]。が、ドイツ艦は大西洋上で、アメリカの駆逐艦に攻撃されて行方不明、「伊二九」は、シンガポールに着いたものの、バシー海峡でついに撃沈される。 【現代：日本】

(5-41) 刻が経って、驚いた。(兵庫と小次郎がまだ帰って来ない) 伏見村の骨皮道賢のもとに鞍をとどけたあの二人は、早ければ日が暮れてほどなく帰ってくる [はずだった]。 【現代：箱根】

(5-42) これで貴子と正夫、そして生まれてくる子どもとの新生活がスタートする [はずだった]。が、現実の生活はそうそううまくはいかない。 【現代：弁護士】

(5-43) 最初、逸子は企画だけを立て、建物は別の建築家が建てる [はずだった] のですが、計画が進むうちに逸子が設計することになりました。 【現代：建築家】

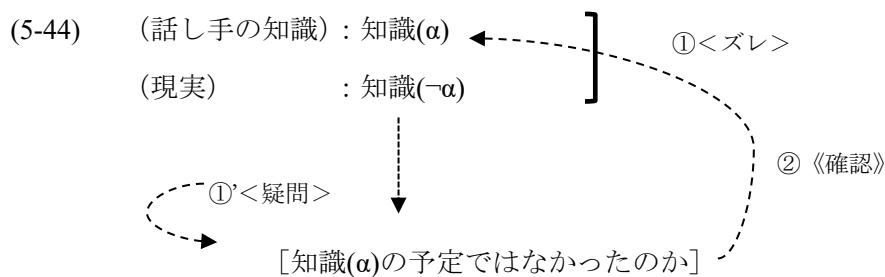
(5-40)から(5-43)の下線の内容は、現実では実現されなかったという非実現を表している。(5-40)は、「どちらかも秘密の任務を成功させることができなかった」ことを話し手が事実として知っていながら、それに反する「どちらかが秘密の任務を成功させる」のことを言及している。(5-41)は、「二人は、予想時間が過ぎても日が暮れても帰ってこなかった」ことを話し手が事実として知っていながら、それに反する「あの二人は、早ければ日が暮れてほどなく帰ってくる」ことであったことを述べている。(5-42)と(5-43)も、「貴子と正夫、そして生まれてくる子どもとの新生活はスタートできなかった」「逸子は設計することになった」ことを話し手が事実として知っていながら、話し手はそれに反する「貴子と正夫、そして生まれてくる子どもとの新生活がスタートする」「最初、逸子は企画だけを立て、建物は別の建築家が建てる」のことを「ハズダ」を使って述べているのである。では、どうして「ハズダ」はこのような反事実的な意味解釈を生み出すことができるかという点、と、「ハズダ」が話し手の知識を確認する形式だからである。「ハズダ」は、現実において何らかの疑問を抱いたときに、その疑問を払拭するために話し手が持っている知識の中で関連のある知識を確認する。つまり、話し手が持っている知識と現実で何らかのズレといった対立事項が生じた場合は、話し手は関連する知識の確認を行うのである。知識と現実が反事実的な関係にある場合も同じことが言える。

(5-40)の話し手の知識では「どちらかが秘密の任務を成功させる(α)」ことであったが、現実においてはそれが実現できなかったことがきっかけに、知識(α)であったことを確認するが、予定・計

画していたことから例外が起き、現実では「実現できなかった($\neg\alpha$)」ことを対照することからそのギャップを強く意識することになる。(5-41)は、「あの二人は、早ければ日が暮れてほどなく帰ってくる(α)」という予定であり、それを知識として持っていたが、現実では「二人は、早ければ日が暮れても帰ってこなかった($\neg\alpha$)」を知り、何かの例外が起きて知識の通りに実現はできなかったが「あの二人は、早ければ日が暮れてほどなく帰ってくる」ということであったことは間違いのないことを確認し、そのギャップを強く意識している。(5-42)と(5-43)も、「貴子と正夫、そして生まれてくる子どもとの新生活がスタートする(α)」「最初、逸子は企画だけを立て、建物は別の建築家が建てる(α)」と予定・計画していて、それが話し手において知識として受け入れられていたが、現実では「貴子と正夫、そして生まれてくる子どもとの新生活はスタートできなかった($\neg\alpha$)」「逸子は設計することになった($\neg\alpha$)」という例外的なことが生じたことに、話し手には「貴子と正夫、そして生まれてくる子どもとの新生活がスタートする(α)」「最初、逸子は企画だけを立て、建物は別の建築家が建てる(α)」のような知識があったことを確認し、そのズレを意識している。

- (5-40') a. 知識(α) : どちらかが秘密の任務を成功させる
 b. 現実($\neg\alpha$) : どちらも秘密の任務を成功させることができなかった
- (5-41') a. 知識(α) : 二人は、早ければ日が暮れてほどなく帰ってくる
 b. 現実($\neg\alpha$) : 二人は、予想時間が過ぎても日が暮れても帰ってこなかった
- (5-42') a. 知識(α) : 貴子と正夫、そして生まれてくる子どもとの新生活がスタートする
 b. 現実($\neg\alpha$) : 貴子と正夫、～子どもとの新生活はスタートできなかった
- (5-43') a. 知識(α) : 逸子は企画だけを担当する
 b. 現実($\neg\alpha$) : 逸子が設計まですることになった

このように「ハズダ」の場合において、このような反事実的な意味が可能となるのは、話し手が持っている知識との何らかの対立事項が生じたときに、話し手の知識の確認をするのが「ハズダ」の本質的な機能だからである。自分自身のことは一番よく知っていることなので、話し手は外部世界（現実世界）に対して反事実的な世界（知識として存在する世界）として捉えることができる。そして、現実において対立事項($\neg\alpha$)が生じたことを知り、話し手が疑問に対して当該の知識を確認する。そして、その疑問というのは話し手の知識と内容が反事実的な関係であることと、実際は知識の通りに実現しなかったことを話し手が既知として捉えているだけのことである。



したがって、このような「ハズダ」が確認の対象となる知識は、予定・計画といった内容を表す場合が多く、「はずだ」になると、推論と伴う場合は予定の知識を確認することで実現の可能性を、推論を伴わない場合には、知識そのものを確認する意味になる。

このように「(動詞) ル形+はずだった」は、実際は実現しなかった事態を表す特別な形式であるとも言える。「ハズダ」を含む非条件文は、「はずだった」に前接する動詞のル形の組み合わせによって反事実的な意味が表せるようになるが、<表 5-2>に示すように用例の数においても、非条件文は条件文の場合とは違って「ル形+ハズダッタ」が多かった。

「はずだった」 180 個 (23.3%)			
非条件文 (文末)		非条件文 (連体)	
40 個		21 個	
ル形	その他 ¹⁵	ル形	その他
31 (77.5%)	9 (22.5%)	18 (85.7%)	3 (14.3%)

<図1> 非条件文タイプにおける「ル形+ハズダッタ」

条件文の力を借りないことから、「前提条件依存型」の「(動詞) ル形+はずだった」として分析できて、「計画・予定というものは、後で実現されるもの」ということから、それが現実において成立しなかったという反事実的なことを表すようになると結論できる。

(5-47)と(5-48)は、「前提条件依存型」を見せていることから、「はずだった」を省略するか、「はずだ」や他の概言の形式に置き換えると、「ハズダ」の知識の確認という機能が失われることによって反事実的な意味が消滅する。

(5-48) 部屋は二階である。首都飛機場に出迎えてくれた中国旅行社の小柄なガイドが、係員から手渡された鍵を受け取り、二階のその部屋へ案内してくれたら、それで旅行社とは縁

¹⁵ これには、形容詞などの状態述語や動詞述語の「テイル」形が属している。

切れになる [はずだった]。

【現代：北京】

(5-48)は、「二階のその部屋へ案内してくれたら、それで旅行社とは縁切れになる」のように条件文の形をしているが、反事実条件文とは違う分析ができる。つまり、条件節の「タラ」が使われているものの、前件や後件を合わせた下線のところの全てが「ハズダ」の知識の対象となっている。その根拠として、(5-48)の場合、(5-48')のように「はずだった」を「はずだ」に置き換えたり、無標形式で表したりすると、反事実的な意味はできなくなる。つまり、反事実条件文の第一条件である前件の「二階のその部屋へ案内してくれる」の真理値が偽ではない。

- (5-48') a. 二階のその部屋へ案内してくれたら、それで旅行社とは縁切れになる [はずだ]。
b. 二階のその部屋へ案内してくれたら、それで旅行社とは縁切れになる [Ø]。

次の(5-49)も同じことを表している。

- (5-49) 松井より年上の清原、江藤智を除くレギュラーは、五輪代表か五輪代表候補だった選手だ。仁志敏久は五輪直前に入団したが、入団しなければ五輪代表の主将を務める [はずだった]。
- 【現代：球場】

(5-49)でも、「入団しない」という前件からなる「五輪代表の主将を務める」という後件を推論しているよりは、「入団しなければ五輪代表の主将を務める」という一つの知識として確認されているのである。そして、「二階のその部屋へ案内してくれたら」や「入団しなければ」といった前件は関連のある知識を引き出せるための知識の前提条件のような役割をしているのである。

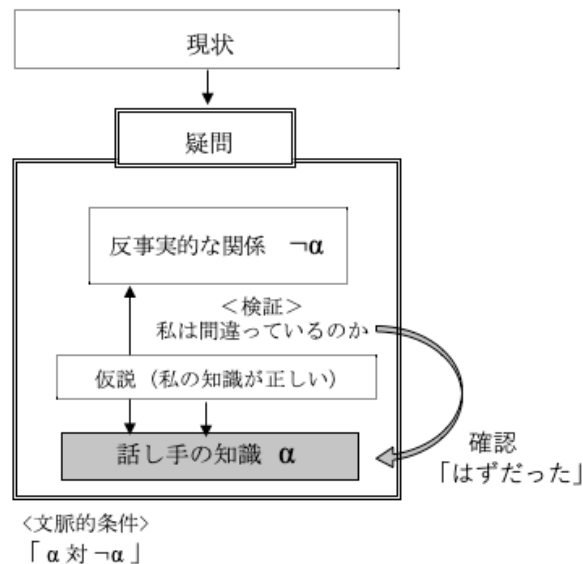
- (5-50) [二階のその部屋へ案内してくれたら、それで旅行社とは縁切れになる] ^{hazuda}

- (5-51) [入団しなければ五輪代表の主将を務める] ^{hazuda}

したがって、(5-48)や(5-49)も、(5-50)や(5-51)のように条件文の前件も後件も「ハズダ」のフォーカスに入っていると思われる。これは「ハズダ」が知識の確認を表す形式であり、「ハズダ」に前接する内容の全体を知識として確認することから起因することから、感じられるのではないかと考えられる。

以上、「前提条件依存型」の「(動詞) ル形+はずだった」について考察したが、「ハズダ」が反事実的な意味を表すのは、その本質的な機能が話し手の知識の確認であることから説明できると

思う。知識の内容を、実現可能なこととして保持していたが、それが実現しなかったときに、話し手による確認作業から起因するのである。そもそも反事実的な意味とは、話し手が当該の事態が偽であると知っている必要があるが、「ハズダ」とは既知としての知識を強く意識する形式なのである。以上のことをまとめると、次の<図 5-3>のようになる。



<図4-6> 知識と現実が反事実的な関係における「ハズダ」の知識の確認

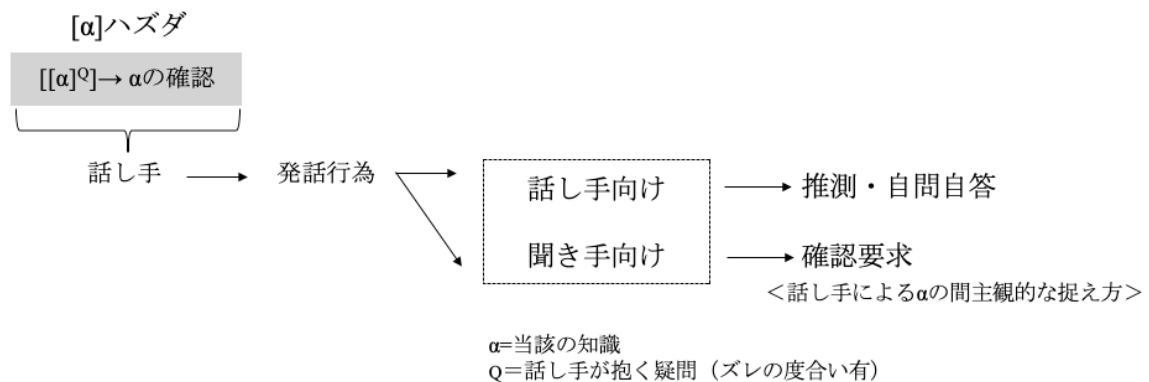
5.5 まとめ

5章では、推論を伴わない「ハズダ」の知識の確認を中心に考察した。このような知識そのものの確認という特徴から、単なる記憶のことが根拠として使われるだけに見えるかもしれない。しかし、「ハズダ」が使われるということは、知識そのものの真偽が問われるか、話し手が保持している知識との何らかのズレが強く感じられるときに、当該の知識の確認の作業が行われるということから、「ハズダ」の独自の用法であると言える。そして、すでに一旦話し手にとっては知識として受け入れられているもの、そのものの存在が問われることから、推論を伴う知識の確認とは違って、確認領域に属するズレから生じる知識の確認であるとも言える。特に、これには、①ズレの度合いはあるものの知識(α)と現実や話し手の内部で疑問を持たせるようなズレ(α')が対立事項として存在する場合、②話し手の予想・期待との現実とのズレから生じる場合における知識の確認($\alpha \rightarrow \beta$)もあれば、③反事実的な内容を述べる関係にあるズレから生じる場合における知識の確認(α 対 $\neg\alpha$)が挙げられる。

そして、このような推論を伴わない話し手の確認領域に属する事態が話し手にとって何らかの疑問を持つ際に、「ハズダ」は関連する知識の中で一番正当であると思われる知識を確認することから、それが自分の中にあることを強く意識する知識の確認の形式であると言える。そして、「ハ

ズダ」とは、他の概言の形式と違って話し手が持っている知識から生じる疑問を解消するための、話し手なりの知識の検証の過程であることから、反事実的な意味も表せるまで疑問に対する自問自答の機能を果たしている。また、5.3 でのように話し手の予想・期待とのズレから生じる疑問に対する知識の確認には、その予想・期待となる内容 (β) とすでに ($-\beta$) であることを意識済みであることから推論を伴う場合と違って聞き手が存在する場合、その聞き手に対して何らかの発話行為を暗示して、聞き手に何らかの働きかけをする用法までつながる。

(5-52) 「ハズダ」の意味・機能



なお、このような知識の確認は、話し手が抱く疑問といった穴を埋めるための答えを見つけるために行われる確認として働くか、あるいは、あえてそのような知識の存在すら話し手の中に存在しないことを述べることから可能性を除去する場合もあれば、逆にあえて知識を確認するように述べる場合もあることから、話し手の主観的な判断であるというよりは、知識の領域に属することを表にして、話し手の色を消す責任回避といった **hedge** としての用法にまでつながると思う。これについては、次の 6 章で述べることにする。

第6章 知識確認から派生へ

6.1 概要

知識の確認は、話し手が抱く疑問の中で、知識の中で穴として埋められない事項に対する答えを見つけるために行われる。または、あえてそのような知識の存在すら話し手の中に存在しないことを述べることから可能性を除去する場合も言えれば、逆にあえて知識を確認するように述べることから話し手の領域に限られることを表にして、責任回避といった **hedge** としての用法にまでつながると思う。6.2 では、穴埋めとしての知識の確認を、6.3 は「ハズダ」の否定形式としての使用を、6.4 では、語用論的な **hedge** としてのつながりについて述べていく。

6.2 穴埋めとしての知識の確認

穴埋めとしての知識の確認とは、何かの現象が起きたときに、話し手にとって納得のいく説明するための知識が見つからないとき、または、当該の知識は存在するが、その知識の中で何か分からないとき、その疑問を解消するための知識の確認が行われる場合のことを示す。それには、①疑問となる答えとしての知識の具体的な内容が変数 x となる場合、②疑問となる変数 x を解消するための仮説を立てて、知識確認が行われる場合、③原因・理由だけが変数 x になり、それに対する答えを知った後、知識確認が行われる場合がある。このような穴埋めとして用法が可能なのは、「ハズダ」が関連のある知識を確認する機能を持っていることと、「ハズダ」が使われることは関連の知識を持っていることを示すからであると考えられる。

(1-7) 穴埋めとしての知識確認

- ① 疑問に対する答えとしての知識の具体的な内容 (x) が分からない場合
- ② 疑問となる (x) を解消するために仮説を立てて、知識確認が行われる場合

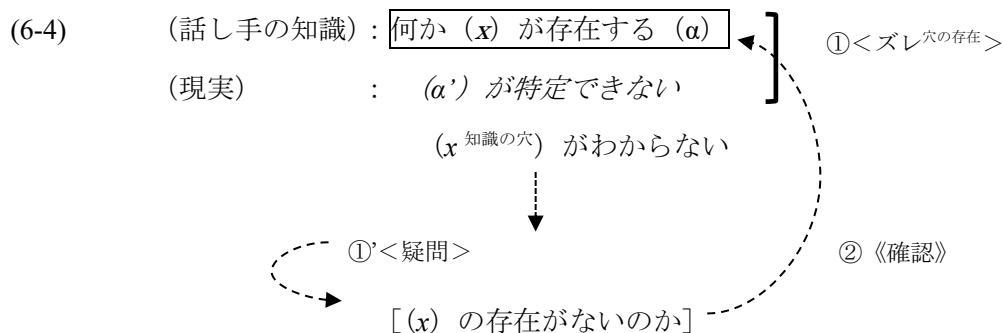
③ 疑問となる原因・理由 (x) について、後で知り、知識確認が行われる場合

まずは、疑問に対する答えとしての知識の具体的な内容 (x) が分からない場合について説明する。

- (6-3) a. (やらなければならないことがあることは覚えているが、それが何かが思い出せない)
オレには何かやらなければならないことがあった [はずだ] が…
b. (実験が失敗で終わったが、なぜ失敗したのか原因究明はできなかった状況)
まだ仮説に過ぎませんが、実験の失敗には何か明確な原因がある [はず] です。

(6-3a)は、「やらなければならないことがあることは覚えているが、それが何かが思い出せない」ことに疑問を持ち、「やらなければならないことがある」という知識の確認をしている。(6-3b)は、「実験が失敗で終わったが、なぜ失敗したのか原因究明まではできなかった」ことに対して、「失敗に対する原因は存在する」という知識を確認している。

しかし、(6-3a)は、「やらなければならないこと (x) があるが、(x) がわからない」と知識の中には確定されない変数が存在している。「やらなければならないこと (x) がある」に対して、それが思い出せないことに対する疑問に対して、それにもかかわらず「(x) が存在する」という知識の確認が行われることによって、話し手の疑問を解消するための検証が行われているのである。また、(6-3b)は、「失敗には原因 (x) が存在するが、(x) がわからない」という変数 (x) が存在する。これには、一般的に「全てのことには原因・理由が存在する」という知識の確認とも言えるが、失敗した実験に対して必ずその原因 (x) が存在するが、それがわからないという現実から、それにかかわらず「(x) が存在する」ことを確認することから、変数 x を確かめようと話し手の検証のことを表している。(6-3)の流れを表すと、次の(6-4)となる。



(6-4)では、「何か(x)が存在する」ことは話し手が明確に知っているが、その (x) の存在が具体的

には話し手に明確に把握されていないとき、「(x) が存在」の知識が話し手にはあることを確認して、「今は、わからないが、(x) の存在があるのは確かである」という話し手の気持ちを表す過程を表している。このように「ハズダ」の知識の確認には、変数 (x) が存在するが、変数 (x) 明かされなかったとき、その疑問に対する話し手自らへの言い聞かせの機能を果たしていると言える。したがって、何かがあることは確かであるが、それが何かが話し手にとって明らかにならなかったときに、話し手は変数 (x) の解明に向かって自分自身を励ますという意味につながると思う。以下のように疑問詞などがともに使われる。

次は、疑問となる (x) を解消するために仮説を立てて、知識確認が行われる場合についてみる。この場合は、次の(6-6)のように「ハズダ」はある現象を説明する場合にも使われる。何らかのズレから生じる疑問を解消するために知識の確認が行われているが、「原因→結果」という関係から、一見「結果」から「原因」を探っていくような推論があるように見られる。

(6-6) (昨夜雨が降ったなかったにもかかわらず、川が氾濫していることを見て)

ここまで川が氾濫しているなら、上流の方に大雨が降った [はずだ]。

(6-6)の場合では、川が氾濫しているのを見て「眼の前の川が氾濫しているのを見て、上流の方で大雨が降った」と「ハズダ」を使っている。これは、現状の「川が氾濫している」という様子から「どうして川が氾濫しているか」という疑問を持ち、「水が氾濫している」ということは「何かの原因 (x) がある」、そしてこの疑問を払拭できるような知識として「この地域はよく雨が降ると川が氾濫する」と確認し、そのような知識が話し手にあることから、話し手の未確認領域に属する事態ではあるが、「大雨が降った」と推論する意味になっている。話し手は、「水が氾濫している」事態の原因が不明のとき、その疑問を払拭するために「ここの水が氾濫する」を引き起こす原因となる知識の確認を行っているのである。

(6-7) a. ここまで川が氾濫しているなら、上流の方に大雨が降った [はずだ]。

<Q>

<P>

b. (雨がたくさん降る → 水が氾濫する)

そして、このような例は、推論の観点から見て、因果関係となる推論の前提 (6-7b)の前提 (premise) から考えると、逆方向の推論が行われているように見える (代表的な研究としては、田窪 (2001) を参照)。これは、ある疑問の解明のために仮説を立てて、その仮説から説明を試み

るアブタクション¹⁶に近いと思われる。

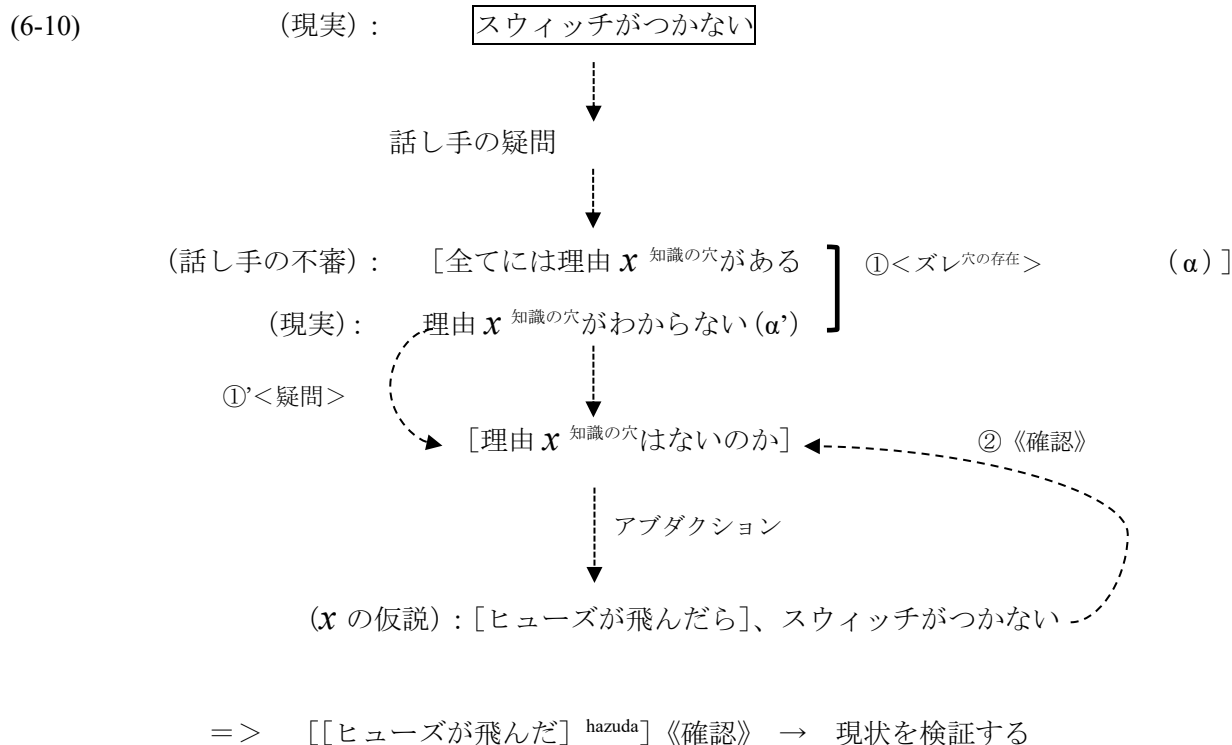
- (6-8) a. 川が氾濫しているのはなぜか？
 ↓ <検証>
 b. (川の氾濫) に関する知識を探る
 ↓ <関連のある知識の確認>
 c. 関連する知識の確認
 ↓ <仮説>
 d. 説明が付く (疑問の解消)

(6-8)のように、雨も降っていないのに川が氾濫していることに関して、話し手は疑問を持ち、その疑問を解消するために関連する知識を確認して、それを不明となっている原因に当てはめることで疑問を解消しようとしているのである。次のような例から説明する。

- (6-9) a. スイッチがつかないなら、ヒューズが飛んだ [はずだ]。
 b. 五歳の子供が自殺をしたなら、何か原因がある [はずだ]。

(6-9a)は、部屋のスイッチがつかないことを知り、その原因がわからないとき、話し手はその疑問を払拭するために、発話時における状況から考えられる知識を確認することで説明の解明に臨む。話し手は経験的に「ヒューズが飛ぶ」ことが現時点をよく説明できるとその知識を確認している。これも因果関係からみると、「ヒューズが飛ぶ (原因) → スイッチがつかない (結果)」となっていることから、因果関係からみて逆方向であることがわかる。(6-9b) は、五歳の子供が自殺したというニュースを聞いて、5歳の子供が自殺するほどの理由が何かはわからないものの、話し手は「なぜ五歳の子供が自殺したか」という疑問を解消するために、発話時における状況から考えられる BEST となる知識、ここでは「五歳の子供の自殺には、相応の理由がある」、を確認することで説明の解明に臨む。(6-9)の流れを表すと、以下の(6-10)のようになる。

¹⁶ アブタクション (abduction) とは、アメリカの論理学者・科学哲学者チャールズ・パース(Charles S. Peirce)が演繹と帰納のほかに分類し、提唱したものである。米盛(2007:53) は、「ある意外な事実や変則性の観察から出発して、その事実や変則性がなぜ起こったかについて 説明を与える「説明仮説(explanatory hypothesis)」を形成する思惟または推論が、アブダクション」と説明している。

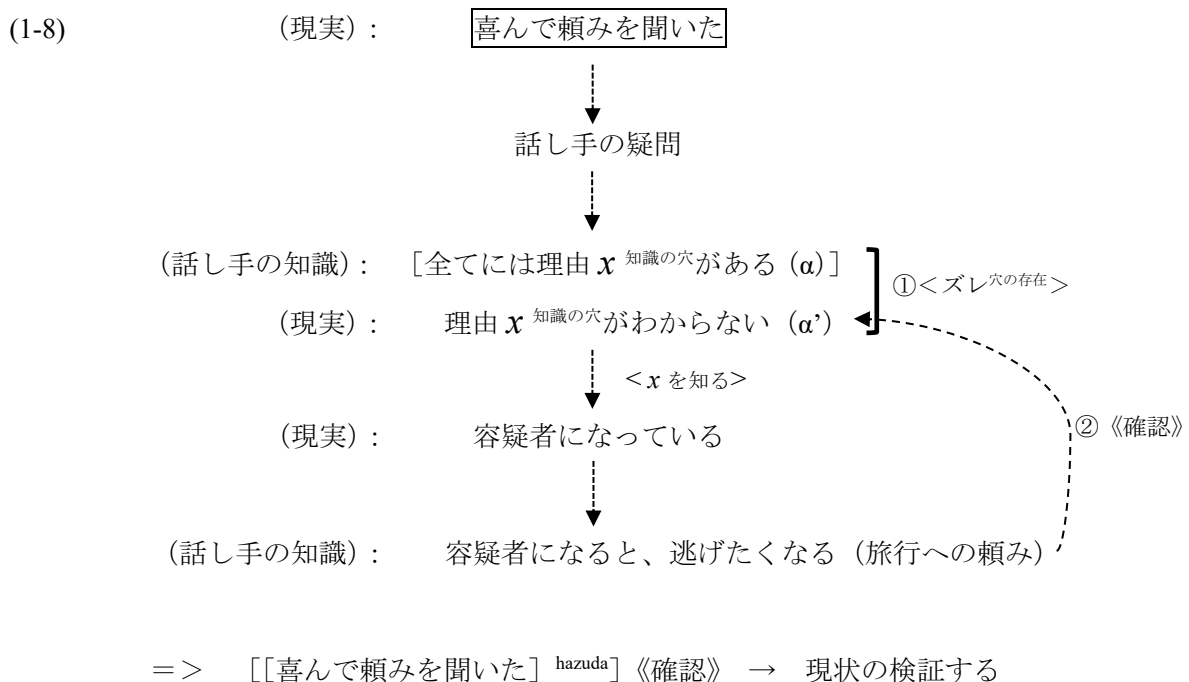


疑問となる答えとしての知識の具体的な内容が変数 x となる場合と同じく、疑問となる変数 x を解消するための仮説を立てて、知識の確認が行われる場合でも、問題を解決するための話し手の確認作業であると言える。話し手は知識の中で変数として不確定に思われる穴を埋めるために、経験的に「全てには理由・原因がある」という知識が大きく働いて、関連のある知識を探し、確認し、それを仮説として当てはめることで現状の疑問を解消するための説明を試みているのである。これも因果関係からみると、(6-9b)のように「何かの理由がある（理由）→五歳の子供が自殺する（結果）」となっていることから、因果関係から逆方向であることがわかる。このように、田窪（2001）の「ハズダ」は演繹的推論形式であることに反するように見える用法が存在することは、「ハズダ」とは、疑問に思われるあることを解消するための知識の確認が本質的な機能だからなのである。

最後に、原因・理由だけが変数 x になり、それに対する答えを知った後、知識の確認が行われる場合について見てみる。これは、高橋（1975）の<さととり>に該当する用法であるが、同じ用法を表す「ワケダ」との共通点が述べられている。

- (6-12) (ある事件で久井は刑事に疑われていて、静子の頼みで静子の代りに旅に出ている状況)
 静子は、妹尾という刑事の、いくらか柔らかい表現で救われたような気がした。それにしても、あの久井と来たら、そんな肝心なことを、一言も言わずに…。どうりで、喜んで頼みを聞いた [はずだ]。 【現代：愛情物語】

(6-12)は、話し手が「普通頼みごとを聞くのは面倒なことであるが、久井が喜んで聞いてくれたこと」に疑問を持っていたが、刑事からの事情説明を聞いた後、最初に「なぜ、素直に頼みを聞いだろうか」という疑問に対して、後でその理由を知り、その理由ならば説明が付くことという知識が自分にあることを確認することから、「(だから) 喜んで頼みを聞いた」と再確認する意味となっている。(6-12)は、話し手が現状を引き起こした原因が分からずにいたが、後で理由や原因となることを知り、「その理由・原因なら当該の事態が起きる」という知識が存在することを確認することから、「そうなるの(疑問いしていた事態)は当然である」という意味になっていく。それは収集された情報から「原因→結果」という因果関係が話し手にとっては疑いのない一般化された知識であることを確認しているからである。そして、このような用法において解釈の手助けをしているのが、(6-12)のように「ドウリデ」を含む「デハ(ジャ)」「ナルホド」のような接続詞や副詞であり、それらによって話し手が命題内容は当然のことであると思うという意味が保証される。(6-12)を分析してみると、次の(6-13)のようになる。



この用法の成立には、原因と結果という関係の中で結果(「ハズダ」の命題内容)を先に認識し、その後原因となることを認識し、その原因から当該の結果となるのは、「当然である」と判断する話し手の認識的態度を表す文脈的条件が一番の要因となるわけである。そして、その文脈的条件というものが、「ハズダ」の使用条件と知識の確認という機能であることから説明がつく。

以上、「ハズダ」の穴埋めとしての知識の確認について述べたが、これは何かの現象が起きたときに、話し手にとって納得のいく説明をするための関連の知識が見つからないとき、または、そ

の知識の中で何か(変数 x) が分からないとき、その疑問を解消するための知識の確認が行われる場合のことを示す。「話し手が現状に対して何らかの疑問を抱くこと」という使用条件の下で、関連する知識を見つけ出して、それを確認するということは、「ハズダ」の本質的な機能が知識の確認に起因することであると考えられる。

6.3 可能性の否定

穴埋めとしての知識の確認とは、話し手が感じる疑問に対して、関連する知識を探し確認する、または、変数 (x) となる穴を埋めるために知識の確認が行われると述べた。しかし、その関連となる知識が話し手に存在しないことは、当然話し手の強い否定の意味につながる。

次の 6.3.1 では、「はずがない」を中心に可能性の否定という意味を表すことについて、6.3.2 では、可能性の否定から希望・信念という意味へ派生する場合について述べる。

6.3.1 「はずが(は) ない」「はずではない」

「ハズダ」の否定形について、日本語記述文法研究会(2003)では、「ハズダ」の否定形について、以下のように述べている。

当然性が否定されるわけではない。「はずがない」と「ないはずだ」とは論理的には同じ意味になる。(中略)「はずがない」は、「～ということはあるえない」という意味の、可能性を否定する表現であり、「わけがない」とほぼ同義である。

【日本語記述文法研究会 2003 : 162】

では、「ハズダ」の否定形の「はずがない」は「ないはずだ」と比べて可能性を強く否定するという意味はどこから出てくるだろうか。それは、「ハズダ」の機能から考えられる。「ハズダ」が疑問を解消するための知識の確認を表すとすれば、「はずがない」とは、外部の現状における話し手の疑問を生じさせることに関する知識のことを話し手が確認するが、「～がない」が使われることによってそのような知識は話し手の知識の体系の中には存在しないことを表すのである。

(6-25) (探している人の個人情報聞き出しながら) こんな質問で知り合いの個人情報を教える人間などいる [はずがない] ーと思ったが、彼はあっさり携帯電話を出し、アドレス帳の画面を俺に見せる。 【ビブリオ:136】

(6-26) 電話はいつまでも鳴り続けている。紀之は入浴室のほうを振り返った。電話の音が聞こえない [はずはない]。ということは、浴室にも、そしてこの家の中にも邦夫はいないと

(6-25)は、話し手が男性の学生に探している女子学生を探すためにいろいろ質問しながら、刑事でもない自分がその女子学生の連絡先を教えると頼む状況である。しかし、話し手は、そのように要請している自分について疑問を感じている。それは、自分が逆の場合にしても、いきなり声をかけてきた怪しげな人に知り合いの連絡先を教えないという意識があったからである。そして、「初めて話す怪しげな人に自分や知り合いの個人情報を漏らさない」という知識はあっても、関連する知識をいくら参照してもその逆の「初めて話す怪しげな人に自分や知り合いの個人情報を漏す」という知識は存在しないことを表しているである。(6-26)は、話し手(紀之)は邦夫が浴室にいて思っていて、電話が鳴ったときに、コードレス電話の子機が、洗面所の壁に設置されていることからすぐ子機が取り上げられることを予想したが、電話が鳴り続けていることを疑問に思っている。そして「電話の音が聞こえない」という可能性を考えるが、「(静かな家で)浴室と洗面所の近い距離でも音が聞こえない」という知識は話し手には存在しないことを表している。このように、話し手の知識の中で当該の知識が存在しないことは、話し手にはそのようなことが実現・成立する可能世界がないことを意味することから、可能性の強い否定の意味につながると考える。

- (6-25') a. こんな質問で知り合いの個人情報を教える人間などいない [はずだ]。
 b. こんな質問で知り合いの個人情報を教える人間などいる [はずがない]。
 (6-26') a. 電話の音が聞こえる [はずだ]。
 b. 電話の音が聞こえない [はずはない]。

(6-25'a)と(6-26'a)は、それぞれ「初めて会って話す人に知り合いの個人情報を漏らすかどうか」「浴室では電話の音が聞こえないのか」という疑問に対して、話し手の知識の中で「個人情報を教える人間などいない」「電話の音が聞こえる」があることを確認して、疑問を払拭しようとしているが、(6-25'b)と(6-26'b)は、その逆の内容は確認しようとしても知識の中で存在しないことを意味するから、可能性の強い否定の意味につながるのである。

一方、「ハズダ」の否定形には「ハズデハナイ」という形も存在する。(6-20c)の「食べものではない」のように、ある対象(x)が存在することは事実であるが、「食べるもの」という属性であることを否定して、別の属性のものであることを表す。「ハズデハナイ」の場合は、現実と話し手の知識の中で何らかのズレが生じていることを暗示させることになる。

- (6-27) a. どちらかでも秘密の任務を失敗する [はずではなかった]。
b. あの二人が遅れてくる [はずではなかった]。

(6-27a)は、それぞれ「任務が失敗で終わってしまった」という結果に対する疑問が、(6-27b)は「約束の時間に二人が現れない」ということに対する疑問が生じていて、話し手は関連する知識(α)を確認して、その知識は予定・計画に関する内容を表していて、「任務を失敗する」「二人が遅れる」という内容は知識の範囲外のことであることから、想定外のことであることを表している。

- (6-27') a. {知識(α)} において {どちらかでも秘密の任務を失敗する} ということは範囲外のことである。
b. {知識(α)} において {あの二人が遅れてくる} ということは範囲外のことである。

なお、「はずではない」は(6-28)のように過去形「はずではなかった」でよく使われるが、(6-28)の非過去形の場合は、反語的な疑問文として現れることが多い。

このように疑問という使用条件の下で知識の確認を行うことから疑問を解消しようとするのが「ハズダ」の本質的な機能であるとすれば、その否定形からその疑問を生じさせている事態などに対して、関連する知識を参照しても確認できるものはない、あるいは、知識の範囲のことではないという現実を否定する意味につながるのは自然なことであると考えられる。そして、特に「はずがない」が「ないはずだ」と比べて、可能性の強い否定を表すというが、知識というものがごく主観的な話し手の希望や信念に基づいたものであることから希望たる信念を表す場合がある。6.3.2 では、可能性の否定から希望たる信念を表す場合について見てみる。

6.3.2 可能性の否定から希望へ

「ハズダ」は、話し手が持っている知識を確認することから、話し手が持っている疑問を払拭する形式であるとする、と、「はずがない」は、話し手が保持している知識というものが一般的な知識・経験的な知識から話し手の希望（信念）の性格が強ければ強いほど、単なる希望を表す場合がある。

- (6-30) 帰りの列車に揺られながら、私達は世の中の期待はずれについて語ったりした。何かいいことなんて、そんな簡単にある [はずない] よね、などと言いつつ。 【桃子:178】
(6-31) 人生はそんなに甘くない。正義の味方が助けることなど、こういうことはそんな簡単に起きることでもないし、多分これからの人生では2度と起こらない [はずた]。

(6-30)は、「世の中で自分に都合のいいことは、いつもあることではない」という知識を持っていて、その逆の内容の「世の中で自分に都合のいいことは、よくあることだ」という知識は話し手の中で存在しないことを「はず（は）ない」で表している。(6-31)は、いじめられている人を助けた後、感謝する人に対して「今回はたまたま私（助けた人）がいたという偶然のことであり、映画のようにいつも正義の味方が助けてくれるわけではない。

(6-30') [知識(α)] : 他はどう思っているか知らないが、私は、世の中で自分に都合のいいことは、いつもあることではないと考えている。

(6-31') [知識(α)] : 他はどう思っているか知らないが、私は、誰かが助けてくれるのはまれである（2回はない）と考えている。

これは知識というものがそもそも話し手の内部に存在するものであることから、一般的な内容を表す知識であっても、個人的に経験から得られた知識でもあっても、それが知識として話し手の中に受け入れられているとすれば、話し手の世界だけで存在するものであると言える（知識が一般的な内容を表していて、他人との共有ができることは、結果的な問題である）。そして、確認の対象となる知識がごく主観的な話し手の希望・信念を表す場合は、希望・信念という性質上、求めている目標が明らかな場合が多く、「はずがない」だけでなく「ないはずだ」でも可能性の強い否定を表すことがある。

- (6-32) a. 私は死なない [はずだ]。
b. 私が死ぬ [はずがない]¹⁷。

(6-32)は「私が死ぬ」という命題が扱われているが、(6-32a)は、「自分が死ぬか死なないか」を疑問視している場合、疑問に対する答えを出すために、話し手は「予言によれば、私はここで死ぬことはなかった」という知識を確認していることから「私はここで死ぬ」という可能性を否定していると言える。(6-32b)は、「自分が死ぬか死なないか」を疑問にしている場合、疑問に対する答

¹⁷ 「ハズダ」は「ワケダ」との共通的な用法についても言及されているが、「はずがない」は次の(1b)のように「わけがない」に置き換えても、可能性の強い否定を表すことができる場合が多くあるに対して、「ないはずだ」は「ないわけだ」に置き換えられないと言われている（寺村 1984 : 271）。

- (1) a. 私は死なない [わけだ]。
b. 私は死ぬ [わけがない]。

(1b)は、「私が死ぬ」という可能性を強く否定しているよりは、例えば、「不老不死の薬を飲んだから、死なないのだ」という話し手の理解の意味に近い。

えを出すために、(6-32a)のように「予言によれば、私はここで死ぬことはなかった」という知識を確認し、対立する「予言によれば、私はここで死ぬ」という知識は存在しないことから確認できないと可能性を強く否定していると言えるが、(6-33)のように別の意味解釈も可能である。

(6-33) (戦争中、退却を図るが、すでに敵に囲まれて脱出不可能となった状況)

A : ということだ。脱出経路が封鎖されたなんて。

B : ここが私たちの最後のなのか。

C : ここで死ぬなんて、いやだ。私がここで死ぬ [はずがない]。

(6-33)で、C は「私がここで死ぬはずがない」と言っているが、「私は無事に帰って家族のところに帰って幸せに暮らす」という予定・計画といった知識を確認して、それに反する「ここで死ぬ」という事態の可能性を強く否定しているとも解釈できるが、単に「ここで死にたくない」という希望があり、その希望を妨げる事態を否定しているようにも見える。これは、関連する知識(α)があることを全面に出すより逆に相反する知識($\neg\alpha$)が話し手の知識の中に存在しないという否定を強く全面に出している。そして、知識(α)の具体的な内容がぼやけていけばいくほど、話し手の希望や信念といった意味を表しやすくなると考える。一方、「ハズダ」の場合もその知識(α)というのが漠然としたものになっていく場合がある。

(6-34) a. (洞窟の中で閉じ込められ、どうしようもできない状況で、諦めかけている同僚に)

絶対ここから脱出できる [はずだ] !

b. (今の問題が解決できるようないい方法が思い浮かばないが)

もっといい方法がある [はずだ]。

(6-34a)は、下線の「ここから脱出できる」とは、話し手にとって関連する知識が存在するとは言えず、「ここで閉じ込められたまま死ぬことはない」という希望たる信念を確認しているように見える。(6-34b)は、「方法がある」ことは「全てのことには結果があれば原因があつて、問題があればそれを解決できるような方法がある」という抽象的でありながら一般論的な知識を確認していると言えるが、「もっといい方法がある」とは、という話し手の希望や信念に近いと言える。しかし、このような場合でも話し手は何らかの知識に拠って、その知識を踏み台にして、話し手が直面している現実を解決しようしていると考ええる。(6-34a)は「私の死ぬところはここではない」「洞窟だからどこかに壁が崩れて外と繋がっているところもある」という知識、(6-34b)は「問題を解決できる方法がただ一つではない」「方法が複数あるとすれば、その中で効率性の良いものも

ある」という知識を確認することから現状を解消している。そして、知識が上位概念であればあるほど、抽象的なことであればあるほど、その知識の信頼性を補強するために、話し手の希望や信念（そうなってほしい）を以って補うことになるのである。

- (6-35) 今はやられてもいつかきつとやり返せる日が来るということを黙って我慢していれば、
僕が勝つ〔はず〕です。そうなると信じています。 → <信念>

このように、現状に対する疑問を払拭するために、関連する知識を確認するのが、「ハズダ」の機能だとすると、その知識が存在することは、具体的な内容が明らかになっていない穴となっていてところの答えであるという話し手の認識態度を表し、問題解決のための仮説に基づいた知識確認にも使える。そして、その知識というものが話し手の個人的な希望や信念に近い場合にも使われるが、これに共通するのは、疑問を解消しようとする話し手の知識の確認作業があることを示すのだと考える。一方、話し手が関連する知識を持っていることを表すことは、単に知識そのものの存在だけを前面に出す効果があり、語用論的に **hedge** として使われる場合も見られる。

6.4 語用論的な **hedge** としての使用

証拠性判断 (evidential) を表す形式には、婉曲用法があることが指摘されているが、例えば、「ヨウダ」には、次のような「婉曲的判断」の用法があることが述べられている (森山 1995・2000、三宅 2006 など)。

次のように話し手に重要な責任などがかかっているときに「ハズダ」を使うと、逆に責任回避のようなニュアンスとなる。

- (6-39) A : 冷蔵庫を使った後にはちゃんと閉めてくださいと言いましたよね。

B : いや、私は確かに閉めた…〔はず〕です。

- (6-40) 君は間違っている…〔はずだ〕。

(6-39)と(6-40)は、「ハズダ」を用いてズレから生じた疑問を払拭しようと話し手は知識を確認している。しかし、(6-39)のように自分には罪がないことを強く主張するには「ハズダ」を使わず、(6-39')のように無標形式で述べた方がいい。しかし、話し手は「ハズダ」を選んでいる。同じく、(6-40)の聞き手の考え方がとても話し手と意見が違う場合、それが正しくないと主張するには (6-40')のように無標形式で表現してもいいことを「ハズダ」を使っているのである。

(6-39') A : 冷蔵庫を使った後にはちゃんと閉めてくださいと言いましたよね。

B : いや、私は確かに閉めました。

(6-40') 君は間違っている！

これは、あえてそのような知識「閉めた記憶」「そういう考え方はいけない」だけが話し手に存在していることを前面に出すことで、これには事実としての断言するのを控えているようなニュアンスとなる。「ヨウダ」のように婉曲的な意味としても使われていると思われる。その婉曲的な意味は責任回避の意味につながる。

このような責任回避といった意味は、証拠性判断のように「ハズダ」は話し手が関連する知識の存在を確認するという意味・機能から出てくると思われる。特に、話し手が直接的な判断をせず、知識の存在を確認することから、その確認作業を通した話し手の発言は、話し手が一番当該のことについて詳しく知っているのにもかかわらず第三者のように知識の範囲での可能性のこと述べることになる。これは、「ハズダ」の用法の全てが確信的な判断 (certainty) が表せないことを裏づける。「ヨウダ」は、新しく話し手に証拠となるものが話し手に導入され、それを報告する意味を表する形式だとすれば、「ハズダ」はすでに持っている知識があり、その知識の存在の方にフォーカスするか、その知識があることが話し手自らの発言に対する証拠となり、確信的な判断の意味が出てくる。しかし、知識（証拠）があるということは、ある程度の確実さを保証することになるが、必ずそうであるとは保証できない。ただ、その主張を補うための知識があるだけということである。

6.5 まとめ

6章では、4章や5章に引き続いて「ハズダ」の派生的な用法について述べた。推論を伴うか伴わないかはともかく、「ハズダ」は話し手が何らかのズレから生じる疑問を感じ、その疑問を払拭するために、自分が持っている知識の中で関連する事項を確認するのが、基本的な機能であると述べた。推論を伴う知識の確認は、予想・推測といった意味を表すことが多く、推論を伴わない知識の確認は、知識そのものが疑問視されることが多い。そして「ハズダ」は、知識の中で失われている変数 (x) が穴として存在する時にも穴埋めされている知識が自分にあったことを暗示させることから、問題解決に対する自らへの働きをかけることもできる。さらに、疑問となる現状に対して、仮説を立ててそれに関連する知識を確認することで疑問を解消しようとする用法もあった。また、「はずがない」という否定表現にすることで可能性の強い否定のことも表す。また、責任回避といった hedge としての用法もあった。これには、全て「ハズダ」が知識確認形式であることから説明がつく。

しかし、「ハズダ」が知識を確認する形式であるといっても、話し手の知識というものは「ハズダ」だけが使うのではないだろう。では、その「知識」の運用（話し手の判断にどう関わるか）には形式ごとに違いがあると思われる。7章では、「ハズダ」と共通する性質を持っている「ダロウ」や「ニチガイナイ」と比較することで、知識の運用に関わる「ハズダ」の日本語における位置付けを考えてみる。

第7章 「ハズダ」と他の形式との比較 -その1

-「ダロウ」と「ニチガイナイ」を中心に-

7.1 概要

「ハズダ」は、推論を伴うか伴わないかはともかく、話し手が持っている知識とズレが生じた場合は、何らかのズレからの疑問を感じ、その疑問を解消するために、自分が持っている知識の中で関連する事項を確認するのが、基本的な機能であると述べた。しかし、「ハズダ」が知識確認形式であるとしても、話し手の知識というものを運用するのは、「ハズダ」だけの話はないだろう。例えば、「ハズダ」と「ダロウ」は両方とも発話時に得た情報（発話時において話し手が五感によって得た直接的な情報）からの判断はできない。一方、推論を伴う知識確認の「ハズダ」は、「ニチガイナイ」と置き換えられることが指摘されていて、話し手の確信的な判断を表すところでは共通しているとも言える。話し手の未確認領域に属する事態を述べるということは、話し手の推量や推測といった認識的な判断に関わると言えるが、認識モダリティについて、宮崎（2004）は、認識モダリティの中には形態論的カテゴリーとして認識のモードがあり、無標形式と「だろう」の2項対立（＜確認＞／、＜推量＞）に分類でき、認識のモダリティの体系は＜可能性×必然性＞＜証拠性＞の2つの類型から成り立つと述べている。

では、「ハズダ」が話し手の知識の確認を表す形式だとすれば、「ダロウ」と「ニチガイナイ」は話し手の知識とも無縁の形式であるかという疑問が残る。話し手の知識というのは、「ハズダ」だけに限られるものではないだろう。

(7-2) (来週開かれる学会に著名な学者さんが来るか否かの話で)

- a. 来週の学会には著名な学者さんが来る [だろう]。
- b. 来週の学会には著名な学者さんが来る [はずだ]。
- c. 来週の学会には著名な学者さんが来る [にちがいない]。

「ダロウ」や「ニチガイナイ」も話し手の未確認領域のことをある根拠を持って推論を表していると言えるが、(7-3)のように「ダロウ」や「ニチガイナイ」は使えない¹⁸。「ダロウ」や「ニチガイナイ」を使うと、「彼は死んだ」「地球は丸い」という内容は、現実にあるギャップや食い違いがある状況に置かれているという意味を含意できず、あくまで当該の内容について話し手はその真偽を知らない場合にしか言えない。

7章では、「知識」の運用（話し手の判断にどう関わるか）には形式ごとに違いがあると考え、「ハズダ」と「ダロウ」や「ニチガイナイ」と比較することで、知識の運用に関わる「ハズダ」の日本語における位置づけを考えてみる。まずは、7.2では、「ダロウ」との比較を試みる。「ハズダ」と「ダロウ」は使用制限や似通った用法などが存在するが、その知識の運用において違いが見られることから相違点が生じることを述べる。7.3では、「ハズダ」と話し手の確信的な判断を表す「ニチガイナイ」との比較を試み、異なる用法について述べる。

7.2 「ハズダ」と「ダロウ」との比較

「ダロウ」の先行研究における分析には、「（結論に至っていない、判断保留としての）談話現場における判断形成過程を表す（森山 1992a、2000）」と本来「ダロウ」は推量形式ではないと見做す場合がある。また、それに対して、三宅（1993）の「話し手の想像の中で、命題を真であると認識する」という定義に従い、ダロウのみが「想像の中での事実認識を表すこと（藤城 1997:159）」、「想像・思考という間接的な認識によって導き出したこととして、命題内容が真であると判断している（宮崎 2002：124）」のように「ダロウ」を推量形式と分析する研究などがある。前者の森山（1992a、2000）は、益岡（1991、2007）とともに「ダロウ」を結論に至っていない「判断保留」を表す形式として見ていえるが、本稿では、「ハズダ」との比較をするために、話し手の知識の運用の観点から、森山（1992a、2000）や益岡（1991、2007）に倣って「ダロウ」とは、「ハズダ」のように話し手が関連する知識の存在とそれを自ら持っていることを確認する機能ではなく、その知識のことを一旦保留する機能を表すと考ええる。

まず、「ダロウ」は「ハズダ」と同じく、発話時における直接的な根拠からは使えないという制限があることが、共通している。

(7-6) （空模様からどうなるかを疑問にして）

今の空模様なら雨が降る {だろ／はずだ}。

(7-7) （AはBの顔の表情が暗いことに気づいて、その理由について考える）

¹⁸ 「ダロウ」の場合は、「彼は死んだ」に対する聞き手への確認要求の意味なら可能である。

Bの顔の表情が暗いということは、何か悩みがある {だろう／はずだ}。

(7-6)は、「今の空模様」が意味することを疑問にして、話し手は「天気」に関する知識を使っている。(7-7)は、話し手の心の中で「顔の表情が暗い」ことの意味を話し手の知識を使っていることから「ダロウ」や「ハズダ」が使えるようになる。この知識を参照する働きをするものとして、(7-6)では「ナラ」が(7-7)では「～ということは」が使われている。(7-7)は「は」によって話し手の知識を引き出せるようになる。

このように「ダロウ」や「ハズダ」は、発話時に得た直接的な根拠からは使えないという制限があることがわかる。両形式とも話し手の知識を意識する形式であり、関連のある知識を引き出すには、その知識が必要となる使用条件（当該のことに関して疑問に思うこと）が必要となるのである。

また、「ダロウ」と「ハズダ」との共通点として、「ダロウ」と「ハズダ」には他の話し手の判断を表す「ニチガイナイ」や「カモシレナイ」と違って話し手が既知として持っているものを聞き手に対して確認する用法があるということである。

(7-10) (昨日同じことをしていたのにもかかわらず、それを否定している聞き手に対して)

- a. 昨日のことはお前もよく覚えている {だろう／はずだ}。
- b. 昨日のことはお前もよく覚えている {#かもしれない／#にちがいない／#ようだ}。

(7-10)は、昨日話し手と聞き手は同じことをしていたのにもかかわらず、聞き手が知らないふりをしているときに、話し手が聞き手に対して「昨日のことはよく覚えている」ことを確認して、その通りであることを認めるように要求している。このような確認要求という語用論的な意味¹⁹は、両形式が発話時に得た直接的な根拠では使えないという共通の性質があると考えられる。とは、話し手の知識を使う形式であると言いたい。

では、「ハズダ」と「ダロウ」の相違点はなんだろうか。本稿では知識をめぐる運用の違いから考える。そして、「ダロウ」とは、知識を意識するが、確認までには至らず、その知識の内容を一旦保留するのが基本的な機能ではないかと考えられる。これは、森山 (1992a, 2000)・益岡 (1991、

¹⁹ 語用論の対象となるものは、今井 (2005 : 8) で「語用論が扱うのは、「発話の意味」である。もう少し詳しく言えば、語用論の目標は、(中略)、「発話が解釈される過程と、その過程を支配している原理を明らかにする」ところである」と述べられている。「発話の意味」という目標から、語用論に対する定義が様々であると思われるが、本稿では、「聞き手の存在からなる意図把握」に重点を置いて「確認要求」を語用論の意味として扱う。つまり、「確認要求」という意味は、話し手が直接要求しているのではなく、聞き手による話し手の伝達意図の把握から出てくるものである。

2007)の先行研究で「ダロウ」を「判断保留」を表す形式であるとする説明と共通する。関連のある知識は意識するものの、その知識が自分の中で存在することを確認して、その知識があることを強く浮き彫りにする「ハズダ」とは違って、「ダロウ」はその知識の内容を一旦保留する、その結果、判断保留につながるのである。

しかし、「ハズダ」は、話し手が真として保持している知識であっても、それは話し手の知識の中に限ることであり、話し手自らが当該の記憶に対する信頼性に疑問を抱く場合は、あくまで「私の記憶が正しければ」のように現実の不一致という話し手なりの疑問が働いている場合にも使えることを述べた。しかし、日本語記述文法会(2003)の記述²⁰の②のように「ダロウ」は不自然となる。次の(7-11)と(7-12)の例は、話し手の知識が問われる状況である。

(7-11) 「何かあったんですか」、そう聞くと、「一一〇度が取れたということですよ」と答えた。

一一〇度とは、東経一一〇度C Sのことだ。 【再掲：(5-17)の用例】

a. 確か、まだ免許はされていない [はずだった]。

b. 確か、まだ免許はされていなかった [だろう]。

(7-12) だいたいこの「あだな年増」を世に広めたのは昭和の初めに作られ大ヒットした「東京行進曲」という流行歌だ。 【再掲：(5-18)の用例】

a. おぼろげな記憶のままに言えば、「むかし恋しい銀座の柳」につづけて「あだな年増を誰が知ろ」という歌詞だった [はずだ]。

b. おぼろげな記憶のままに言えば、「むかし恋しい銀座の柳」につづけて「あだな年増を誰が知ろ」という歌詞だった [???だろう]。

(7-11a)のように「ハズダ」が使われると、「免許が取れた」という話を聞いて、話し手が持っている知識とのズレから生じる「免許のことはどうだったのか」という疑問を解消するために、再び「まだ免許はされていない」と知識の確認を行う。そして、その知識はまだ有効であることを示すことから「確か」とともに「間違いはない」という気持ちが強く感じられる。一方、(7-11b)のように「ダロウ」が使われると、(7-11a)と比べて、「東経一一〇度C Sはまだ免許されていない」という知識を自ら保留することによって「東経一一〇度C Sはまだ免許されていない」という内

²⁰ 日本語記述文法研究会(2003)では、「ダロウ」の意味を「推量」を表といい、用法については、

①

話し手の発話時表現の認識を表す(過去形×/伝聞×) ②記憶の中にある事柄、話し手自身の行動予

定は不自然③ 断定回避の用法④ 確認要求と記述されている。

容の真偽は保留され、推量の意味につながりやすくなる。なお、ズレを生じさせる(7-12)についても同じことが言える。(7-12a)では、「おぼろけな記憶」のため一旦当該の知識に対して「持っている記憶としての知識が間違っている可能性」を念頭に入れることから、再びその知識であるかどうかの確認を行なっているのである。そして、その記憶があることは、必ずしも当該の内容が真であるとは言えないが、「むかし恋しい銀座の柳」につづけて「あだな年増を誰が知ろ」という歌詞だった」と想起する意味につながる。それに対して、(7-12b)のように「ダロウ」が使われると、既得情報として保管されている知識が話し手自らにより保留されることによって、真偽にかかわらなくなり、疑問を解決するための参考に過ぎなくなる。その結果、推量といった意味になることから、知識そのものが話し手の経験的な知識と関連すればするほど、また知識の内容を信頼すればするほど、「ダロウ」の使用は不自然となるのである。それは、「ダロウ」は知識のことを保留するので、「ダロウ」を使うと、(7-11)と(7-12)のように話し手のみに存在する記憶の中にある事柄を保留することから、「記憶」が正しいと主張しづらくなり、話し手自身も当該の記憶となる知識の真偽について弱めの判断の意味になってしまうからである。

一方、「ダロウ」の使用条件において、日本語文法記述研究会(2003)の「記憶の中にある事柄、話し手自身の行動予定」は不自然であることが指摘されているが、これは「ダロウ」だけではなく「ハズダ」に共通する性質である。しかし、知識を保留する「ダロウ」とは違って、話し手の意図性が感じられない、知識を確認できる文脈の中では、自然さは落ちるものの「ハズダ」の使用はできるようになる。

- (7-14) a. (明日、私は実家に帰る) #明日、実家に帰る [はずだ]。
 b. (明日、私は休みを得て、実家に帰られることが約束されている)
 明日、私は実家に帰る [はずだ]。

- (7-15) a. A : 明日は何をしますか。
 B : #明日、私は大学に行く [はず] です。
 b. A : 来週は忙しいですか。
 B : 来週は、確か出張で京都に行く [はず] です。

(7-14a)や(7-15a)は、「話し手が何をしようとするか」という話し手の意図性が存在することによって「ハズダ」は不自然となる。が、(7-14b)や(7-15b)の場合は、話し手の意図から離れた「実家に帰ることが約束されていること」「来週の予定」という知識が浮上していて、話し手に確認されていることから、主語が1人称の場合でも自然となる。これは、話し手の未確認領域のことが対象にされていて、「意図性(意志性)」が排除されることによって、1人称主語の制約が緩和されるわ

けである（仁田 1999 を参照）。

なお、「ダロウ」と違って「ハズダ」は、関連する知識を確認する形式であるが、当該の知識の存在を強く意識して、その知識の内容をあえて確認することは、当該の知識に何らかの対立事項が話し手の意識の中で強く意識されることを暗示する。当該の知識の存在が否定されたり、脅かされたりすることによって、話し手は当該の知識の確認を行うのである。それに対して、「ダロウ」は知識を保留することから、対立事項が生じにくい。

(7-16) a. ここにペンを置いた [はずだ]。でも、ここにはない。

b. *ここにペンを置いた [だろう]。でも、ここにはない。

一方、「ダロウ」や「ハズダ」は、知識を保留するから、断定を控える意味に繋がりやすい。しかし、断定回避という用法といっても、話し手が聞き手より当該の事態に対する責任者である場合は、「ダロウ」の使用は「ハズダ」よりも無責任に感じられる。それは、責任者である話し手が知識のことを保留することで、他人ごとのように述べる感じが「ハズダ」よりも多く現れるからであると考えられる。

(7-18) A: この前頼んだことって、明日までにだと言いましたが、順調ですね。

B: 明日までにできる {??でしょう／はずです}。

最後に、「ダロウ」には、日本語記述文法研究会（2003）の「確認要求²¹」の用法があるが、これは「ハズダ」と共通する用法であり、発話が話し手の予想・期待とズレが生じた場合でも使われる。「ダロウ」や「ハズダ」は、発話場においてすぐ聞き手に対して反論するときよりも、一定の時間が経ったときに自然となるように見える。これは話し手が聞き手に対して発話したことが、経験的な知識として定着するに時間がかかることを示しているのではないと思われる。以下の例からでも窺える。

(7-20) (状況) B が皆の前で A をからかっていて、A はいらいらしている。そして、我慢しきれなくなった A が B に文句を言う。

A: もうやめろ！

²¹ 安達（1991）は、以下の2つの特徴を問いかけ文の特徴として挙げながら、確認要求疑問表現は命題内容の不確定性の条件が欠けたもので、聞き手に問いかけることによって命題内容に対する確認を要求するものであると述べている。

B : (笑い声で) よく聞こえなかったけど。

A : やめろと言った {??だろう／??はずだ／んだ}。

(7-20)の場合は、聞き手に話し手が自分が言った言葉をもう一度言う場面として、その時間的な幅が直後である場合であり、「ノダ」が一番自然である。しかし、時間的な幅が遠ければ遠いほど、「ノダ」の使用より「ダロウ」や「ハズダ」の使用の自然度が高くなる。

このように、「ダロウ」と「ハズダ」は、確認要求という用法において一定の共通の面を示しているが、「ダロウ」は知識を保留する形式であることから、次の(7-23)のように話し手の認識的な食い違いが生じない場合、「ダロウ」は自然に使えるが、「ハズダ」はできない。

(7-23) (可愛い人形を見て、聞き手にも同意を求める場面)

これ見て！かわいい {?のだ／だろう↑／#はずだ}。

これは、「ダロウ」は知識を保留する形式であり、「ハズダ」は知識を確認する形式であることから説明できる。知識を保留することは、関連のある知識の保留することになり、話し手自ら知識の真偽を決めようとせず、手放すことになるがゆえに、疑問文の性質を持つようになる。「ダロウ」と「ハズダ」の違いは以下のように区別できる。

(7-27) a. 私が言った [だろう]。

→ 私は言った。そうだろう？ (聞き手に確認を委ねている)

b. 私が言った [はずだ]。

→ 私は言った。そのはずだ。(自分への確認を兼ねている)

このような「保留」か「確認」かの差は、両形式が同時に使われるときにも「ハズ+ダロウ」は存在しても「ダロウ+ハズダ」は意味関係からも成立しない。話し手が関連のある知識を自ら保留した後に、また確認を行うのは矛盾となるが、確認作業が終わったのをさらに聞き手に委ねることは可能だからである

(7-29) 「うるさい！誰がおまえの言うことなど」鳴宮は腰に手を当てた。ベルトが再び輝きはじめる。「おいおい、いい加減にしないか。その装置を起動させるのに、相当の体力を消耗する [はず] [だろう]？見ればもう、氣息奄々といった様子じゃないか。それ以上やると、命にかかわるぞ」「うるさいと言っているだろうが！」 【現代：まぼろし曲馬団】

(7-29)は「ハズダ」と「ダロウ」の両方が使われていることがわかる。話し手は、無理をしている聞き手に忠告するが、それにも聞かない聞き手のことに疑問を持ち、その疑問の答えとなる「ベルトの装置を起動させるには体力が要る」と知識の存在と内容を「ハズダ」を使って確認することで自分が考えていることには間違いがないことを自分自身に確認させている。さらに、「ダロウ」を使うことによって、「ベルトの装置を起動させるには体力が要る」ということは聞き手にも承知のことであることへの同意を求めているのである。これは、「ハズダ」と「ダロウ」が「確認」か「保留」かという知識の運用における差に起因すると思われる。

- (7-32) a. [Sp[知識]_{hazuda}]_{確認}
 b. [Sp[知識]_{daroo}]_{保留}
 c. [Hr[Sp[[[知識]_{hazuda}]_{確認}]_{daroo}]_{保留}]_{確認(要求)}

以上、「ダロウ」と「ハズダ」は同じく、発話時における直接的な根拠では使えないという制限があることから、確信の度合いの差はあっても話し手が自ら持っている知識を意識する形式であることは変わりがないことを確認した。

まず、「ハズダ」は、話し手が持っている知識を確認するのが本質的な機能であるが、「ハズダ」によって表されることは、疑問を解決するために当該知識の存在や内容が注目されることになる。また、その知識の内容をあえて確認することは、当該知識に何らかの対立事項となるズレが話し手の意識の中で強く意識されることを暗示していて、当該知識の存在が否定されたり、脅かされたりすることによって、話し手は当該知識の確認を引き出して、確認する。

それに対して、「ダロウ」は話し手が持っている知識を意識するものの、その真偽を問うのをやめて保留することになる。したがって、話し手の疑問を解決するためにその保留するものの知識を意識していることから未確認領域に対する答えとして反映されることになると思われる。また、話し手の既知としての知識を保留することで、知識そのものを確かめることはできず、現実との対立事項も生じにくくなる。その結果、「ダロウ」は話し手の推量の意味でしか使えなくなると思われる。

一方、「ハズダ」は、確信度からみて低い判断を表す「ダロウ」に比べて、確信度の大きい「ニチガイナイ」とも確信的な話し手の判断を表す面から共通点が見られるが、「ハズダ」が知識の確認を表すことから様々な機能を持っているのに対して「ニチガイナイ」話し手の確信的な判断を表す。これについては、次の 7.3 で述べる。

7.3 「ハズダ」と「ニチガイナイ」との比較

「ハズダ」と「ニチガイナイ」との違いについて、山田（1982）の根拠の有無、野田（1984）の論理的推論の有無という観点もあるが、「ニチガイナイ」が話し手の確信的な判断を表す形式であるとする、根拠がないとは言えない。したがって推論の有無によって区別するのは難しい。なお、森山（2002）は、両形式とも推論を表していて、「ハズダ」は当然性を表す、「ニチガイナイ」は必然性を表すと、益岡（2007）は、「ニチガイナイ」は確からしさを表す蓋然性判断として必然性を表すといい、「ハズダ」とは当然性判断を表す形式と述べている。「ニチガイナイ」は「おそらく」など共に使われ、確からしさが強い蓋然性を表す形式として、「ハズダ」は「自然に」などが使われ、当然性を表しているとも言えるが、以下の例を見て欲しい。

- (7-33) a. 「悪魔」という名前は自然に古代人にも避けられた {はずだ／にちがいない}。
b. それを乗り越えれば、おそらく結果はついてくる {はずだ／にちがいない}。

「ニチガイナイ」が蓋然性判断形式（必然性）として、「ハズダ」が当然性判断形式として分類されることは、両形式の違う振るまいを区別しているとも言える。しかし、(7-33)のように、(7-33a)では「自然に」が、(7-33b)では「おそらく」の副詞が使われていて、「ハズダ」と「ニチガイナイ」を互いに入れ替えても差し支えはない。

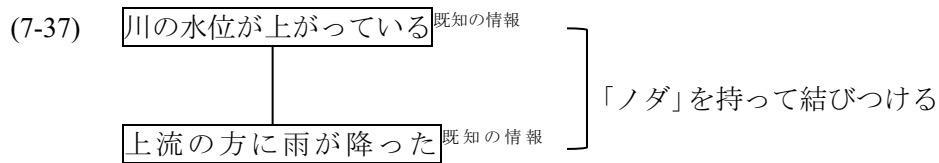
では、「ハズダ」と「ニチガイナイ」の相違点は何であろうか。まず両形式ともある程度の話し手の確信を表すことに共通していると言える。

まず、「ニチガイナイ」は、真偽不明の話し手の未確認領域に限る状況での推論に限定され、一定の根拠に基づいて推論するような文脈では、「ハズダ」に共通する性質が見られる。特に、「ハズダ」と同じく、共起する副詞によって示される確信度の違いを表すことができる。

では、「ニチガイナイ」はどうして話し手の確信を表すことになるのか。それは、「間違いない」という語彙的意味と共に話し手が推論から得られた話し手の判断と現状に対する未確認領域のことを結びつけることに起因すると思われる。このような結びつきには、「ノダ」が挙げられる。

- (7-36) (川に水が急に増えていることに気づいて)
なんでこんなに川の水位が上がっているのか？
↓
(上流の方に大雨が降ったことを聞いて)
そうか、上流の方に雨が降った [んだ]。

(7-36)では、「川の水位が上がっている」とことと後で原因となる「川の上流の方に雨が降った」ことの二つが結びついている。

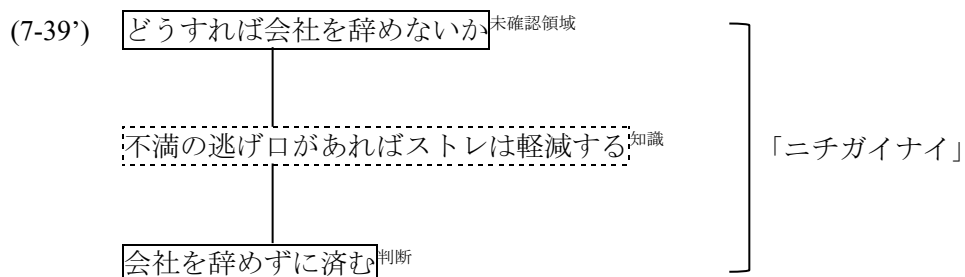


(7-36)の「ノダ」は、(7-37)のように「川の水位が上がっている」や「川の上流の方に雨が降った」の二つの話し手に事実として認識されている既知のことを結びつけるが、「ニチガイナイ」は、話し手の判断と現状に対する未確認領域のことを結びつけることに起因すると思われる。

(7-39) 信頼される上司になる条件の一つに、親身になって相談に乗ってくれる人、というのがある。これをわかりやすくいえば、「ぐち」を聞いてくれる人、ということになりそうだ。若手社員の場合も、上司なり先輩なりに、「ぐち」を聞いてくれる相手がいれば、会社を辞めるまで追い込まれずにすむケースが多い [に違いない]。 【常識：108】

(7-39)は、条件文の中で「ニチガイナイ」が使われていて、それぞれの「会社を辞めるまで追い込まれずにすむケースが多い」、「会いに来る」、「この学校の一番トップは天才である」の命題内容が話し手に確信されている。(7-39)の場合は、「不満の逃げ口があればストレスは軽減できる」という知識に基づいて、話し手は主張したい内容と未確認領域となる「どうなるのか」とを結びつけるが、「会社を辞めるまで追い込まれずにすむケースが多い」ということはまだ実現していない・実現の余地のある可能世界であることから未確認領域と結びつけられている。

そして、(7-39)の「ニチガイナイ」で結びつけられた未確認領域は、間違いないという話し手の強い確信の意味を持つことによって、その意味が保たれているのである。



(7-36)の「ノダ」が既知のことの結びつけだとなれば、「ニチガイナイ」は話し手の知識からな

る推論された判断と未知のことの結びつきを表していると考えられる。そして、以下のように「ハズダ」に置き換えても命題内容に対する話し手の確信が感じられることは共通していると言える。

(7-39”) 若手社員の場合も、上司なり先輩なりに、「ぐち」を聞いてくれる相手がいれば、会社を辞めるまで追い込まれずにすむケースが多い [はずだ]。

しかし、「ハズダ」と違うのは、(7-39”)のように知識の存在強く意識するのが「ハズダ」だとすれば、「ニチガイナイ」は未確認領域に対する話し手の判断を確信を持って結びつける過程のみが重要であろう。したがって、「ニチガイナイ」は、話し手の知識と未知のことの結びつきを表すと述べたが、以下のように現状からの話し手の判断を含めて、話し手の一方的な判断の意味が強く感じられることもある。

(7-42) (達人を募集する番組での控え室で)

みんな妙な雰囲気がある。みんな何かの達人 [にちがいない]。

(7-42)では、「妙な雰囲気」という現状からこの雰囲気が意味するのは「この控え室では達人が集まっている」という知識から確認はできていないが、ここに集まった人は「みんな何かの達人である」と確信して、「控え室の妙な雰囲気は何を意味するか」という話し手の疑問の答えとして結びつけている。このように現状からそれが意味するのを話し手の知識と結びつけることで推論を伴う話し手の強い確信を表す場合もあれば、以下のように話し手の一方的な決めつけを表す場合もみられる。

(7-44) (誘拐された人が部屋にとじ込められて、助けを求めていることを想像しながら)

Aは助けてと叫んでいる [にちがいない]。

(7-44)では、誘拐されたAが今どのような状況であるかを「助けてと叫んでいる」と想像する場面である。これらの例は、現状からの話し手の強い確信を持った判断や思い込みといった決めつけを表しているが、これは「ニチガイナイ」が知識と未知のことに対する結びつきだけが基本的な機能であることから生じる。その結びつきに間違いがないという話し手の意識が伴うことによって、確信の意味を表すようになる。そして、「ハズダ」に置き換えられても「ニチガイナイ」と同じく話し手の確信の意味を表すことはできる。

(7-42') みんな妙な雰囲気がする。みんな何かの達人の「はずだ」。

話し手の確信的な判断を表すとすれば、「ハズダ」と同様に「ニチガイナイ」もそれを裏付ける関連のある知識が存在しないとは言えない。しかし、「ニチガイナイ」は「ハズダ」と違って、知識そのものの検証の意味よりは、当該の未確認領域に属する事態と話し手の判断と結びつけるのが基本的な機能であることから、話し手の主観的な判断を表す確信的判断であると感じられる。

そして、「ニチガイナイ」は未確認領域の事態と話し手の判断を結びつける形式であると述べたが、その話し手の判断には話し手の知識が関与していないとは言えないが、その知識の存在のことは、「ニチガイナイ」では強く現されず、話し手の判断が間違いないと主張するのがその基本的な機能である。

(7-49) A : 犯人は A さん [にちがいない] !

B : なんで?

A : だって、なんでって? [ちがいない] から!

(7-50) A : 犯人は A さんの「はずだ」!

B : なんで?

A : だって、なんでって? [???はずだ] から!

(7-49)の「ハズダ」が使われる場面では、「犯人が A である」と言うためにはそれなりの関連する知識の存在を話し手が持っていることが強要されることから、特に根拠がない場合には不自然となる。それに対して、「ニチガイナイ」は、(7-50)のように話し手の一方的な決めつけの場合でも自然に使われる。話し手の判断と「誰が犯人なのか」を結びつける「事態の結びつき」だけに焦点が置かれることによって知識の存在は問われないのである。

このように「ニチガイナイ」と「ハズダ」が置き換えられる場合でも、「ハズダ」の方は関連する知識を確認するような意味が感じられ、「ニチガイナイ」を使うとそれがなくなる。

(7-55) a. 北海道に行ったら、美味しいものが食べられる「はずだ」。

b. 北海道に行ったら、美味しいものが食べられる「にちがいない」。

(7-55)では、北海道に旅行することになったとき、「美味しいものが食べられる」と話し手が述べている場合である。(7-55a)の「ハズダ」も(7-55b)の「ニチガイナイ」も両形式ともに「美味しいものが食べられる」ということに対するある程度確信があるという意味を表していて、互いに置

き換えても差し支えない。しかし、(7-55b)の「ニチガイナイ」は、話し手が「美味しいものが食べられる」ことについて勝手に確信しているのに対して、(7-55a)の「ハズダ」は、「(北海道に行くと) 美味しいものが食べられる」という知識を話し手が確認している意味が強くなる。

(7-55') a. 北海道の知識から食べ物に関する知識の確認

=> [北海道に行ったら、美味しいものが食べられる] hazuda

b. 北海道の食べ物に関する話し手の判断と未確認領域の結びつき

=> 北海道に行ったら、[美味しいものが食べられる] nichigainai

また、「ニチガイナイ」は、話し手の現状に対する一方的な結びつきを表していることから、以下のように「よくわからないが」の表現とも共起しやすくなる。

(7-60) (率直に書いた法務大臣のプロフィールの内容となぜ法務大臣になったかと聞かれて

「自分もよくわかりません」と答えたことに対して)

司会者：これはどう思われますか。

ゲスト：よくわかりませんが、

本人（＝法務大臣）の正直な気持ちを表した [にちがいない] と思いますが。

【ニュースワイド 2017.2.10】

また、「ハズダ」は、使用条件の下で、関連のある知識を引き出すための引き金が必要となるが、「ニチガイナイ」にはそのような制限はない。そして「ハズダ」と「ニチガイナイ」の一番大きい相違点は、「ニチガイナイ」は話し手が未確認領域に対する話し手の確信を表すことができるのに対して、命題内容が話し手にとって事実として、疑いのないものとして定着している場合は使えないことである。「ハズダ」は、ズレや食い違いの対立事項が認識されるとき、知識の確認を行うことができるが、「ニチガイナイ」はできない。その延長として論理的計算の場合にも「ニチガイナイ」は使えない。

(7-66) 当時 20 歳前後だったと覚えているので、今は 30 歳くらいになった

[???にちがいない／はずだ]。

「ハズダ」を使い、論理的な計算のような一般的な知識を確認することはできるが、一方的な結びつきを表す「ニチガイナイ」は不自然となってしまう。

なお、以下のように聞き手に同意を求めるような確認を要求する場合でも、「ダロウ」と「ハズダ」は知識の存在を意識する形式であることから自然に使えるのに対して、「ニチガイナイ」はできない。

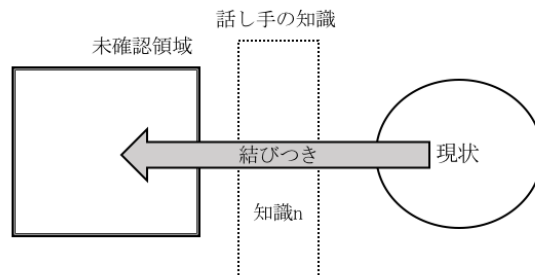
以上のことを「ニチガイナイ」と「ハズダ」の相違点からみると、知識の確認をする「ハズダ」がより根拠を必要とするように見えることもある。

(7-68) (状況) 犯人が前の角を曲がって逃げたが、それを追っていた刑事がすぐその角を曲がると、犯人の姿は見え、家が3軒あった。

- a. もしかしたら、犯人はこの家のどこかに隠れた {^{???}ニチガイナイ/^{???}ハズダ}。
- b. 犯人はこの家のどこかに隠れた {ニチガイナイ > ハズダ}。
- c. 犯人は絶対この辺にいる {ニチガイナイ ≤ ハズダ}。

(7-68a)は、「もしかしたら」があることから「ニチガイナイ」と「ハズダ」も不自然となる。(7-68b)は、「犯人の行方も分からず、家だけが見える」という状況から、この状況と「家のどこかに隠れた」ことを結びつけていると解釈しやすいことから「ニチガイナイ」がより自然となるのに対して、(7-68c)は、「絶対」のような副詞が共起している。そして、「犯人はこの辺にいる」ことに関する何らかの知識を話し手が持っていると解釈しやすくなることから、「ハズダ」がより自然であると考えられる。

以上、「ダロウ (知識の保留)」と「ハズダ (知識の確認)」は、話し手の知識と意識する形式であることから、聞き手に真であることの同意を求める場合でも使えるが、「ニチガイナイ」は知識のことは意識せず、前面に出てくるのは現状を解決するための現状と話し手の判断との結びつきから生じる推論の結果のみである。そして、その判断内容が「間違いない」という話し手の意識が反映されることから、話し手の確信的な判断を表すと言える。また、「ニチガイナイ」は、話し手が関連のある知識を持っていることを前提しないことから、話し手が関連のある知識を確認、検証する場合には使えないのである。これを図で示すと、以下の<図 7-3>のようになる。



<図7-1> 「ニチガイナイ」の知識の運用

7.4 まとめ

7章では、「ハズダ」と似ている用法を持っていると考察されてきた「ダロウ」と「ニチガイナイ」と比較することで、「ハズダ」の特徴を浮き彫りにすることを期待した。

「ハズダ」を知識確認形式として定義し、その似通った性質を持つ「ダロウ」と「ニチガイナイ」との共通点や非共通点を比べてみたが、その知識の運用については差が見られる。「ダロウ」は「ハズダ」と違って、話し手が持っている知識を意識するものの、その真偽を問うのをやめて保留することになる。したがって、話し手の疑問を解決するためにその保留するものの知識を意識していることから未確認領域に対する答えとして反映されることになると思われる。また、話し手の既知としての知識を保留することで、知識そのものを確かめることはできず、現実との対立事項も生じにくくなる。その結果、「ダロウ」は話し手の推量の意味でしか使えず、記憶の中にある事柄、話し手自身の行動予定などの場合は不自然であり、確認要求の場合でも「ハズダ」との違いが見られた。

「ニチガイナイ」は、確信度からみて低い判断を表す「ダロウ」に比べて、「ハズダ」と共に確信的な話し手の判断を表す面から共通点が見られるが、「ハズダ」が知識の確認を表すことから様々な機能を持っているのに対して「ニチガイナイ」話し手の確信的な判断を表すのが基本的な機能である。未確認領域における話し手の疑問と話し手の判断を疑いを持たず確信を持って結びつけることで、話し手の確信的な判断を表しているのである。その話し手の判断には、話し手の知識が反映されるが、知識の存在は問われない。「ニチガイナイ」は知識のことは意識せず、前面に出てくるのは現状を解決するための現状と話し手の判断との結びつきから生じる推論の結果のみである。そして、話し手が関連のある知識を持っていることを前提しないことから、話し手が関連のある知識を確認、検証する場合には使えない。

一方、「ハズダ」は、当該の知識に何らかの対立事項が話し手の意識の中で強く意識されることを暗示することで、話し手が持っている知識を確認するのが本質的な機能であるとすれば、「ハズダ」によって表されることは、疑問を解決するために当該の知識の存在や内容が注目されることになる。当該の知識の存在が否定されたり、脅かされたりすることによって、話し手は自らの知識の中から、当該の知識の確認を行う。

したがって、「ハズダ」が使われているといっても、全てが話し手の確信を表すということではない。推論を伴う場合でも、未確認領域に対する話し手の知識を確認することから、話し手の確信が文の意味として出てくる場合もあるが、それはあくまでも文の表層的な意味に過ぎないのである。そして、話し手が知識を意識して、その知識を確認する意味が強ければ強いほど「ハズダ」のように様々な用法が現れるとしたら、他の言語においても知識を使う形式があるとすれば、「ハズダ」と似通った機能を持つ形式があるだろう。その他言語における知識を使う形式の類型論的

な観点から探る第一歩として、韓国語における形式との対照を行うことでその可能性を確認していく。第8章では、「ハズダ」と似通った機能を持つ韓国語の「-(u)l kesita」との対照を行う。「ハズダ」との共通性や非共通性を確認していくことで、両言語において知識の運用について述べていく。

第8章 「ハズダ」と他の形式との比較 –その2

–「ハズダ」と韓国語「-(u)l kesita」を中心に–

8.1 概要

日本語の「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kes-i-ta」には相違点もあれば、いくつかの共通点も見られる。まず、両方とも「形式名詞+コピュラ」の構造を持っていることである。

(8-1) a. 彼は家に帰る [はずだ]。

b. 그는 집에 갈 것이다.

ku-nun cip-ey ka-[l kes-i]-ta

he-TOP²² home-to go-[l kes-be]-DEC

‘I am sure that he will go home.’

(8-2) a. 彼は家に帰った [はずだ]。

b. 그는 집에 갔을 것이다.

ku-nun cip-ey ka-ss-[ul kes-i]-ta

he-TOP home-to go-PAST-[ul kes-be]-DEC

‘I am sure that he went go home.’

日本語の「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kes-i-ta」には、似ている面を持っていることが確認できるが、本稿では、以下のようなことを明らかにしたい。まず、韓国語の「-(u)l kes-i-ta」は、未確認領域における話し手の推測の意味を持っているとも言えるが、そこには「ハズダ」と共通して、話し手の知識をベースとする推論を表す形式であることを述べていく。しかし、「ハズダ」が言え

²² 本稿で使う略語は以下のように表す。

accusative; ACC, attributive; ATT, circumstantial; CIR, complentizer; COM, conditional; COND, copular; COP, declarative; DEC, deference; DEF, honorific; HOR, future; FUT, negative: NEG, nominative; NOM, past: PAST, present; PRES, question marker: Q, topic marker; TOP

ても「-(u)l kes-i-ta」には言えない場合もある。または、逆に「-(u)l kes-i-ta」が言えても「ハズダ」は言えない場合も存在する。両形式とも話し手の知識を使う形式に属するが、その相違点を生じさせる根本的な違いについて述べていく。そして、共通点もあるが相違点もたしかに存在し、その共通の意味を顕在化するその根本的な意味とはいかなるものかを確認することで、日本語と韓国語における話し手の判断を表す形式の類型化とともに変異性についてまとめることができるだろう。

8.2 「-(u)l kesita」の用法

韓国語の「-(u)l kes-i-ta」は、韓国語の「-keyss-」とともに話し手の認識判断を表す形式として取り上げられてきた。2つの形式の意味を大きく2つに分けると、次の(8-3)のようになる。

(8-3) ・「-keyss-」と「-(u)l kesita」は両方とも主語が1人称であり、用言が動詞である場合は、「意志・意図」を表す。 <deontic 用法>

・「-keyss-」と「-(u)l kesita」は両方とも、「推量・推測・推定」などを表す。

<epistemic 用法>

以上、本稿では、「推量」の意味を表す、未来連体接辞「-(u)l」、形式名詞「kes」、コピュラ「-i-ta」の組み合わせである「-(u)l kes-i-ta」を分析的な構造としてではなく、「-(u)l kesita」のひとまとまりの形式として扱うことにする。

8.2.1 話し手の意図を表す用法

韓国語の「-(u)l kesita」には、大きく話し手の判断を表す「推測」と話し手の「意図」を表す2つの用法がある。まず、「-(u)l kesita」に前接する用言が主体によるコントロール性のある動詞であって、主語が1人称であるときは、話し手の意図を表す意味として使われる。

8.2.2 話し手の推測を表す用法

韓国語の「-(u)l kesita」は、話し手の「意図」を表す用法の他にも話し手の認識的判断を表す用法がある。「-keyss-」と違って「-(u)l kesita」は、すでに持っている話し手の意図、または、知識を持っていることを前提していると言える。さらに、話し手の知識を使う形式であるところから、話し手の意図を表す用法はないが、日本語の「ハズダ」とも共通する性質を持っていることがわかる。日本語の「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kesita」には、互いに共通する点が見えてきて、その中心には「話し手の知識」を使う形式であることが挙げられるだろう。次の8.3からは、日本語の「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kesita」を対照する。

8.3 「-(u)l kesita」と「ハズダ」との対照

韓国語の「-(u)l kesita」は、日本語と「ハズダ」と同じく話し手がすでに持っている話し手の意図、または、知識を持っていることを前提していると言える。そこで、両形式の対照を行うことで、知識を使う形式の両言語間の共通点や相違点を探ることにする。

8.3.1 研究方法

(省略)

	-(u)l kesita	-(u)lila	-(u)l theita	-kyessci	-(u)l kes kathata	-(u)l lika epsta	etc
	42	6	39	3	3	10	41
Total							144

〈表5-1〉 「ハズダ」の韓国語の訳

〈表 8-2〉のように、日本語の「ハズダ」が韓国語のいろんな表現に訳されることが分かった。これは、「ハズダ」の用法が多彩であることを意味するが、全体の例の中で、「-(u)l kesita」が占めている割合は高いことは否めない。では、実際収集された用例の種類を 8.3.2 で見てみる。

8.3.2 用例収集の結果

日本語の「ハズダ」を韓国語に訳した時の用例を中心に見たが、その逆の韓国語の「-(u)l kesita」を日本語に訳した場合でも、必ずしも同じ結果が出るとは思えない。Kim (2000b) に述べられているように、韓国語の「-(u)l kesita」は日本語の「ハズダ」にだけ対応しているわけではなく、「ダロウ」にも対応する場合がある。日本語の場合は、「ダロウ」や「ト思ウ」なども対応している。これは、7章で述べたように、「ダロウ」も知識の運用に関して違いはあるものの、話し手の知識と強く関わる点では「ハズダ」と共通する性質を持っていることから、予想できることである。

本稿では、「ハズダ」は話し手が持っている知識というものを一番強く意識する「知識の確認」を行い、日本語の「ハズダ」に絞って、共通する性質を持っている韓国語の「-(u)l kesita」と対照を行うことで、日韓の話し手の判断を表す形式における「知識の運用」の違いをみることを期待する。

8.3.2.1 「ハズダ」と「-(u)l kesita」が置き換えられる場合

(省略)

8.3.2.2 「ハズダ」と「-(u)l kesita」が置き換えられない場合

(省略)

8.3.3 共通点：話し手の知識を使う形式

日本語の「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kesita」について研究には、Mori & Park (2014) が挙げられる。Mori & Park (2014) では、日本語の「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kesita」を判断の証拠となるものにおける直示性 (deictic) や事実性 (factivity)、人称性という観点から考察したものである。その中で、両形式の共通点として挙げられるのが、証拠となるものが発話時における現場からのものは使えないという共通性が述べられている。これは両形式が、「直接証拠の制限 (Directness Restriction of Evidence as a Deictic Constraint of Use)」に影響を受けていることがわかるが、次のような例が挙げられる。

(8-38)は、発話場 (今、ここ) で得た「空の様子」から「雨が降る」ことを推量しているのであるが、この場合では、「ハズダ」も「-(u)l kesita」も使うことができない。

(8-38) (空を見上げて、空模様に気づいたとき)

a. #雨が降る [ハズダ]。

b. #비가 올 것이다.

pika-ka o-[l kesi]-ta
rain-NOM fall-l kesi-DEC

これは、7.2 で「ダロウ」と「ハズダ」の共通の性質で述べたように、「ハズダ」は話し手が持っている知識の存在を意識する形式であることから、当該の事態に対する関連のある知識を使うとは、適切に知識を使うための引き金となるものが必要である。発話場で得た現状 (= 空模様) からの判断には向かない。したがって、(8-39)のような状況では、発話時に初めて得た情報から、関連する知識をリンクさせる過程が含まれていないため、不自然になってしまう。そして、「-(u)l kesita」も(8-39b)のように不自然となることから、「ハズダ」と同じく知識を使う形式であることが確認できる。

一方、「ハズダ」も「-(u)l kesita」も話し手が持っている知識の存在を意識することから、当該の事態に対する関連のある知識を使うとは、適切に知識を使うための引き金となるものが必要である。

(8-40) (状況) Aは午前中に天気予報で今日は昼間から雨が降ると聞いた。

その後、午後になってBと一緒に外に出たら空の様子が変であることに気づく。

A: 雨が降りそうだね。

B: 今日、雨は降らないと思うよ。

A: . a. いや、雨が降る [はずだ] よ。 b. 아니야, 비가 올 거야.

aniya pi-ka o-[l kesi]-ta

No rain-NOM fall-l kesi-DEC

‘It will rain.’

話し手が自分の知識を使うということは、その知識を参照するための話し手の問題を解決しようとする働きが必要である。(8-40a)の「はずだ」や(8-40b)の「-(u)l kesi-ta」は、「空の様子」は確認しているものの、「雨が降る」という判断は発話時より前に得た「天気予報」であり、今日の天気について話し手が持っている知識「雨が降る」とBの「雨が降らない」という不一致が知識を参照するための働きをしている。

(8-39)では、「空模様」と現状から「雨が降る」と判断する場合には、「はずだ」と「-(u)l kesi-ta」が不自然になると述べたが、以下の(8-43)のような場合であれば、「はずだ」と「-(u)l kesi-ta」の許容度が上がる。

(8-43) a. (道路がこれだけ濡れているなら) 雨が降った「はずだ」。

b. (tolo-ka ilegkey cec-e iss-tamyeŋ) pi-ka o-ass-[ul kesi]-ta.

street-NOM this-like wet-being- if rain-NOM fall-PAST-ul kesi-DEC

(8-43)は、何らかの食い違いから生じる疑問を解消するために疑問に対する推論する場合、推論過程において「原因→結果」という関係から、一見「結果」から「原因」を探っていくような場合である。「道路が濡れていることを見て、雨が降った」と推論している場合である。これは、6.2で触れたように、「はずだ」の場合は、疑問となる答えとしての知識の具体的な内容が変数 x となる場合と同じく、疑問となる変数 x を解消するための仮説を立てて、知識の確認が行われる場合でも、問題を解決するための話し手の確認作業であると述べた。話し手は知識の中で変数として不確定に思われる穴を埋めるために、経験的に「全てには理由・原因がある」という知識が大きく働いて、BEST となる知識を探し、確認し、それを仮説として当てはめることで現状の疑問を解消するための説明を試みているのである。ここでは、「道路が濡れている」ことに関して、道路が濡れるために関連する知識の中で、一番関連する知識を参照して「雨が降った」と答えを出してい

ると言える。

このように「ハズダ」も「-(u)l kesita」も、「直接証拠の制限」というのが共通的に働いていて、その制限には両形式とも話し手の知識を使う形式であることを裏付けていると言える。そして、8.3.2 で確認したように、「-(u)l kesita」の場合は、「ハズダ」と違って未確認領域の制限を受けていることも確認したが、この2つの条件が揃っている場合には、「ハズダ」と「-(u)l kesita」は互いに同じ機能を担うことになる。

以上、知識を使うという「直接証拠の制限」の条件のもとで機能を働いているとしても、「ハズダ」と違って、「-(u)l kesita」は未確認領域の事態だけに制限されるということは、知識の確認を表す「ハズダ」と違って、「-(u)l kesita」は知識を使う運用が異なることがわかる。日本語の「ハズダ」は、推論を伴う知識の確認もあれば、推論を伴わない知識の確認もあることをすでに述べてきた。したがって、以下のような例における日本語の意味は、実際2つ意味解釈が可能であると考えられる。

(8-47) a. 私が20代頃には自信があった [ハズダ]。

- ① [20代頃には自信があった] が、なぜ今は自信がないのか。
- ② 昔のことはよく覚えていないが、[20代頃には自信があった] と思う。

b. ① 내가 20 대였을 때는 자신이 있었다.

nay-ka 20 tay-i-ess-ul ttay-nun casin-i i-ess-ta.

I-NOM 20's-be-PAST-when-TOP confidence-NOM exist-PAST-DEC

② 내가 20 대였을 때는 자신이 있었을 것이다.

nay-ka 20 tay-i-ess-ul ttay-nun casin-i i-ess-[ul kesi]-ta.

I-NOM 20's-be-PAST-when-TOP confidence-NOM exist-PAST-ul kesi-DEC

(8-47a)は「ハズダ」を使って「私が20代頃には自信があった」と述べているが、これは(8-47a①)や(8-47a②)のように2つの意味解釈が可能であると考ええる。一つは、(8-47a①)のように「20代頃には自信があった」ことについて話し手は確かなこととして知っていながらも、今はそうではない自分自身について疑問を抱いている場合である。もう一つは、(8-47a①)の「自信を持っていた20代頃とは違う自分自身について疑問に思う」という意味ではなく、(8-47a②)のように、その疑いや今とは違う昔との食い違いを意識せず、「(昔のことでよく覚えていないが) その時の私は自信を持っていたらう」と思う場合である。この2つのどちらの意味であるかによって、韓国語の表現は変わっていく。(8-47a②)の場合は、「私は自信を持っていた」ということについて話し手は未確認領域のこととして述べていることから、「-(u)l kesita」の使用が自然にできるに對

して、(8-47a①)は、「20代頃には自信があった」と話し手が確信を持っていることから、「-(u)l kesita」を使うよりは、無標形式で断言する形で表した方がいいように思われる。

では、知識を使う形式として直接証拠の制限という共通の性質を持っている両形式が、特に日本語の「ハズダ」と違って、韓国語の「-(u)l kesita」が未確認領域の事態だけに制限されるということは、その知識の運用において「-(u)l kesita」は、話し手が持っている知識を使って未確認領域へ投影する機能を持っていることから起因すると考える。次の8.3.4では、未確認領域へ投影するという「-(u)l kesita」の機能から、「ハズダ」といかなる相違点があるかを確認してみる。

8.3.4 相違点：「知識確認」対「未確認領域への投影」

「ハズダ」は知識の確認として、「-(u)l kesita」は知識を未確認領域へ投影する形式で発展したことによって、両形式間の相違点も存在する。4章から6章までの内容から、「ハズダ」は、推測という用法から食い違いや反事実的な用法などの様々な用法が存在するが、これは「ハズダ」の「知識の確認」という機能から説明ができることを述べた。まず、その1つが、「-(u)l kesita」の対象となる命題内容は話し手にとって未確認領域のものとして認識されなければならないことであり、「-(u)l kesita」の使用には事実性の制限が関わることになる。

(8-50) a. 彼女の髪色は、あの色ではなかった [ハズダ]。私が知っている髪色とは違う。

b. 그녀의 머리 색은 저 색이 아니었다.

kunye-uy meli sayk-un ce sayk-i ani-ess-ta.

she-of hair color-TOP that color-NOM different-PAST-DEC

c. #그녀의 머리 색은 저 색이 아니었을 것이다.

kunye-uy meli sayk-un ce sayk-i ani-ess-[ul kesi]-ta.

she-of hair color-TOP that color-NOM different-PAST-ul kesi-DEC

(8-50a)では、話し手が元々知っていた彼女の髪色と今の目の前にいる彼女の髪色が違うことで、その疑問を解決するために「ハズダ」を使って、彼女の髪色に関する記憶となる知識を確認している。これを韓国語で表現するには、例えば、(8-50c)のように「-(u)l kesita」は使えない。(8-50c)は、あくまで話し手は彼女の今より前の髪色に関しては未確認領域のことになってしまい、「彼女の髪色は、あの色ではなかっただろう」の意味になる。また、次の百科事典的知識の場合も、「-(u)l kesita」は「ハズダ」と違う様相を見せる。

(8-51) a. 冬は寒い [はずだ]。でも、寒くない。

b. #겨울은 추울 것이다.

kyewul-un chwuwu-[l kesi]-ta.

winter-TOP be cold-l kesi

‘lit. Winter will be cold.’

(8-51)では、共通の地域（冬が存在する）に住んでいる人の間では「冬は寒い」という内容は、一般的であり、共通の知識であり、常に真となるものであると言える。この事実の違い *factive* として「冬は寒い」という知識を「ハズダ」を用いて確認を行うということは、(8-51a)のように「冬は寒い」という事実が疑われるような働きかけが存在するとも言える。その働きかけとしては、「異常気象により寒くない」とか「冬は全然寒くないという意見」などが挙げられる。しかし、(8-51b)のように「-(u)l kesita」が使われると、例えば「その地域には私は行ったことがないが、冬という季節があることは知っている。したがって、普通は冬は寒いから、その冬も寒い」のように、もはや「冬は寒い」という内容は話し手にとって自明なものではなく、可能世界におけるひとつの可能世界に過ぎなくなる。なので、普遍的、かつ、一般的なことより、個別的なことに ついて述べるときに「-(u)l kesita」はもっと使いやすくなる。

一方、「-(u)l kesita」は知識を未確認領域へ投影する形式であれば、日本語には「ハズダ」だけではなく、「ダロウ」の存在も無視できない。知識の確認か保留かの機能が、確信の度合いという面から「ハズダ」と「ダロウ」に分化しているとすれば、韓国語の場合は「-(u)l kesita」が担っている（もちろん、「-(u)l kesita」の他に「-keyssci」などの形式も考えられるが、ここでは両形式の区別はしない）。ということは、文脈によっては「ハズダ」にも「ダロウ」にも置き換えられることである。

(8-53') a. たぶん誰もいない [でしょう]。

b. 아마 아무도 없을 거예요.

ama amwuto eps-[ul ke]-yeyyo.

probably nobody not exist-l ke-DEF

(8-53'') a. きっと誰もいない [はず] です。

b. 분명히 아무도 없을 거예요.

pwunmyenghi amwuto eps-[ul ke]-yeyyo.

for sure nobody not exist-l ke-DEF

また、「ハズダ」と「-(u)l kesita」は、知識の確認であるか、知識を使った未確認領域への投影なのかによって、主語が1人称であるときの使用においても違いが見られる。「ハズダ」は1人称主語制限 (1st subject constraint) があるに対して、「-(u)l kesita」はそのような制限がない。そして、意図の意味で使われるときには疑問文の形で使われ、意図の主体が話し手から聞き手へスイッチが行われる。

(8-54) a. 私は明日家に帰る {#ハズダ／ツモリダ}。

b. 나는 내일 집에 갈 것이다.

na-nun nayil cip-ey ka-[ul kesi]-ta.

I-TOP tomorrow home-to go-I kesi-DEC

‘lit. I am going home tomorrow.’

(8-55) a. あなたは明日家に帰る {#ハズ／ツモリ} ですか。

b. 당신은 내일 집에 갈 거예요?

tangsin-un nayil cip-ey ka-[ul ke]-yeyyo ?

you-TOP tomorrow home-to go-I kesi-DEF

‘lit. Are you going home tomorrow?’

韓国語では「-(u)l kesita」が使えるのに対して、「ハズダ」は不自然となり、「ツモリダ」がその機能に代わっている。話し手の意図を表す意味の条件とは、主語が1人称で意志動詞の非過去形が使われる場合であるが、まず、ここで単に「1人称の主語制限」に言い切ることができるのかを確認してみる。主語が1人称で、用言はコントロール性の動詞で非過去形の場合、話し手の意図の意味として「ハズダ」はどのように使えないだろうか。これの答えとしては、「ハズダ」の知識の確認という基本的な意味が関わっていると考える。

(8-60) a. 来週は出張で韓国へ行く [ハズダ]。

b. 10年後、私は大学の先生になる [ハズダ]。

c. ??週末には、友達と会う [ハズダ]。

「ハズダ」の意味・機能とは、話し手が持っている知識、または、真として思い込む内容に対して、それとのズレから生じる疑問を抱いたりする場合に、問われる問題に対する一番正当であると思われる知識 (BEST となる知識) などを使い、当該の知識を確認する思考プロセスである。したがって、(8-60)の「ハズダ」の文が使用できるような話し手の知識を参照させるきっかけがあ

ったとしても「来週は出張で韓国へ行く」「10年後、私は大学の先生になる」「週末には、友達と会う」は、話し手が知識として保持しているものでなければならない。(8-60a)の「来週は出張で韓国へ行く」は、出張のスケジュールとしての知識として、「(来週のスケジュールから)出張で韓国へ行く」ことを話し手の主観的な意図を表しているよりは、出張のスケジュールという知識を客体的な観点から述べている。(8-60b)は、「ハズダ」を使って、「10年後、私は東京のある大学で働く」と述べるには、「10年後、私は大学の先生になる」という内容は、話し手にとって「そのような手順になっている」、「手筈になっている」という成り行きとしてのものでなければならない。したがって、(8-60b)は「(今のようにエリートコースを着々進むと)10年後、私は大学の先生になる」と述べる意味になる。一方、(8-60c)は、「ハズダ」を使うと、不自然になってしまう。例えば「週末に何をするか」と聞かれ、(8-60c)のように「週末には、友達と会うはずだ」と言ってしまうと、「週末には、友達に会う」ことはもはや話し手の知識の意味には取れなくなる。「ハズダ」を使うためには、「知識の確認」が行われなければならないが、(8-60a)の外部によるスケジュール、(8-60b)の手順から予想されることは、話し手の意志のままコントロールできるものではない。ただ、そのような知識があることを確認して、そこから予想されることを述べていると言える。しかし、(8-60c)の「友達との約束」は、話し手次第で実行することをやめることもできる。話し手がコントロールできることである。この類のものは、話し手の知識として保持されるよりは、意志や意図として分類されるからだと思う。

それに対して、韓国語の「-(u)l kesita」は、知識を参照し、未確認領域への投影であることから、次のようにそのようなスケジュールがあると、または、そのような手順が予想できるという意味よりは、「そのように実行する」という話し手のつもりといった意図を表す。

8.4 まとめ

8章では、現代日本語の「ハズダ」と現代韓国語の「-(u)l kesita」は意味上、類似する現象があることから、対照を行うことで両形式の本質的な共通点や相違点を示すことができたと思う。似通っている用法から、両形式の体系的なものを対照することによって、両言語に対する新しい見方を提示するのが目的である。今回は、知識の確認という「ハズダ」の意味から、韓国語との大局的見通しを示すことが第一の目的であり、両形式の間の意味関係を分析したのである。

まず、「ハズダ」と「-(u)l kesita」の関係において、置き換えるには制約も見られるが、話し手がまだ事実として認識していない未確認の事態に対しては、日本語の「ハズダ」も韓国語の「-(u)l kesita」も置き換えられることができることが確認できた。両形式は、話し手の知識を使い、未確認領域における当該の真偽に対して話し手の疑問を解決することから、共通性が見られる。話し手の知識を使うことは、両形式とも「直接証拠の制限」の制約を受けることを暗示する。

しかし、実際の使用実態を調査した結果、「-(u)l kesita」は「ハズダ」と同じく、話し手の知識を使う形式であることから共通する性質が見られたが、「ハズダ」と「-(u)l kesita」が必ず全ての用法において一致するのではないことも明らかになった。「ハズダ」はコントロール性の動作動詞の場合、1人称主語制限 (1st subject constraint) があるのに対して、「-(u)l kesita」はそのような制限がない。また、「ハズダ」は当該の命題内容に対して、その真偽がはっきりしている場合にも使えるのに対して、「-(u)l kesita」は使えない。

つまり、日本語の「ハズダ」は知識確認という機能を持っているのに対して、韓国語の「-(u)l kesita」は、知識を確認する機能はなく、すでに話し手が保持している知識やつもりなどを、未確認領域に投影させることで、それが「実現する」と判断したり、これから「実現する」と話し手の意図を表したりする意味に発展していると言える。

(6-1) 「ハズダ」と「-(u)l kesita」の基本的な機能の比較

a. [ハズダ] : 知識確認

- 知識確認という機能に縛られ、習慣的な意味が発達

b. [-(u)l kesita] : 知識を参照し、未確認領域への投影

- epistemic modality として機能、習慣的な意味が不確定

8章では、「話し手の知識」という道具立てを使って、他の言語にも適用し、その共通性や非共通性を探ることの有効性を検証してみた。目的は日韓推論形式「ハズダ」と「-(u)l kesita」の対照研究そのものにあるのではない。本稿では、知識の運用に関わる日韓形式の違いを確認することから、類型論的な観点での有効性を試みたと思う。

第9章 結論

9.1 論文の要約

本論文の目的は、現代日本語の文末に現れる「ハズダ」文について、「ハズダ」の様々な用法を統一的な説明することにより、「ハズダ」の基本的な意味・機能を明らかにして「ハズダ」の全体像を一つの機能から説明ができることを示すことである。高橋（1975）が＜みこみ＞と＜さとり＞という用法に「ハズダ」を分類して以来、多くの研究者によって細分類されてきたが、「ハズダ」の意味・用法を中心にする記述的に考察したものを検討した結果、意味・用法中心の分析でも、推論の観点からの分析でもそれぞれの問題点を確認できた。これらの先行研究に共通している問題点は、①「ハズダ」の使用について統一的な説明ができないという点と、それがゆえに②「ハズダ」の本来の性質を的確に説明できない点であると言える。「ハズダ」は、当該の事態が話し手の未確認領域に属する場合でも使えるのに対して、話し手の記憶を確かめるような確認領域に属する場合にも使える。全ての「ハズダ」の用法を細く分類するだけでは、「ハズダ」の本質が見えにくくなる恐れがあることから、文脈依存的な意味という他の基準と異なる判断基準を作る必要があった。そこで、本論文では、「ハズダ」で現れる命題内容に関して、話し手が持っているある情報に対してそれに反する、または、ギャップが感じられる状況が起きたとき、「ハズダ」が用いられるという使用条件があることを指摘した。

本論文では、1章の冒頭で「ハズダ」の本質を明らかにするための説明を試みることと、それを類型論的な観点から多言語においても分析できる有効性の提示を目的として立てた。

(1-5) 本論文の目的

- ①「ハズダ」を本質的な意味・機能から、統一的な説明ができるようにすること
- ②「ハズダ」と似ている意味を持っている他の形式との比較から「ハズダ」の機能を明

らかに示すこと

② 類型論的な観点から「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kesita」との対照を行うことで、他の言語との分析する際の有効性を確認すること

これは従来の先行研究における問題点の解決と類型論的な観点からの分析を試みるための目的であった。

まず、本論文では、「ハズダ」を本質的な意味・機能から、統一的な説明のために、「ハズダ」の本質的な機能として、話し手が真だと思っている・または真であろうと予想する知識とズレが生じた場合、「ハズダ」を使い、そのズレから生じた疑問を払拭するために「知識の確認」を行うことであると仮説を立てた。そして、「知識」とは、情報といったものや一般的に話し手が持っている知識、そして、個人の個別の経験から蓄積されたものもあれば、長い間繰り返されることにより強化され蓄積されたものもあると述べた。

「ハズダ」には推論を伴う「知識の確認」と推論を伴わない「知識の確認」、2つのタイプがあることを示した。前者の場合は、推論過程が認められる推論を伴う「知識の確認」として、未確認領域に対する事態を述べることが多い。一方、推論を伴わない「知識の確認」とは、当該の知識の断片を確認する場合であって、一連の推論過程は見られない場合である。そこで、「現実との食い違い」という文脈的条件をプロトタイプとして条件付けて、「知識の確認」の機能から「ハズダ」の使用に関する統一的な説明を試みた。

推論を伴う「知識の確認」の場合には、推論過程が含まれていることから、使用条件となる「疑問」を生じさせる何らかの対立事項の存在が弱まる場合もある。未確認領域における「ハズダ」の知識の確認には、不確定のものであることから、ズレなどが明確に現れないのが使用条件として働いているが、「ハズダ」の知識確認の過程には当該の事態に対する何らかの疑問がないと「ハズダ」は使いにくく、その疑問が強く意識されればされるほど「ハズダ」は使いやすくなることで、その疑問に対するズレも度合いは存在すると思われる。

一方、推論を伴わない「ハズダ」の知識の確認の場合は、知識そのものの確認という特徴から、単なる記憶のことが根拠として使われるだけに見えるが、「ハズダ」が使われることは、知識そのものの真偽が問われ、確認の作業が行われることは、話し手が保持している知識との何らかの食い違いが強く感じられるときが特徴的である。これには、①食い違いの度合いはあるものの知識(α)と現実や話し手の内部で疑問を持たせるようなズレ(α')が対立事項として存在する場合、②話し手の予想・期待との現実との食い違いから生じる場合における知識の確認($\alpha \rightarrow \neg\beta$)もあれば、③反事実的な内容を述べるときの知識の確認(α 対 $\neg\alpha$)が挙げられる。このような推論を伴わない話し手の確認領域に属する事態が話し手にとって何らかの疑問を持つ際に、「ハズダ」は関連する知

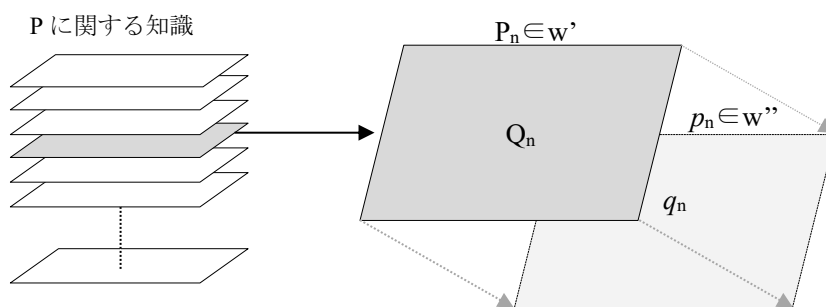
識の中で一番正当であると知識を確認することから、それが自分の中にあることを強く意識する知識の確認の形式であると言える。そして、「ハズダ」とは、他の概言の形式と違って話し手が持っている知識から生じる疑問を払拭するための、話し手なりの知識の検証の過程であることから、反事実的な意味も表せるまで疑問に対する自問自答の機能を果たしていることが確認できた。そして、「知識の確認」という説明の中で、「ハズダ」の全体像が統一的に説明できた。

なお、このような知識の確認は、話し手が抱く疑問の中で、知識の中で穴として埋められない事項に対する答えを見つけるために行われる場合がある。または、あえてそのような知識の存在すら話し手の中に存在しないことを述べることから可能性を除去する場合も言えれば、逆にあえて知識を確認するように述べることから話し手の領域に限られることを表にして、責任回避といった hedge としての用法までにもつながり、穴埋めとしての知識の確認のような派生的な用法も説明できた。

そして、「ハズダ」の性質を明確にするために、似通っていると思われる日本語の「ダロウ」と「ニチガイナイ」を比較した。「ダロウ」は「ハズダ」と違って、「ダロウ」は話し手が持っている知識を意識するものの、その真偽を問わず、保留する形式であること、「ニチガイナイ」は、確信度からみて低い判断を表す「ダロウ」に比べて、「ハズダ」と共に確信的な話し手の判断を表す面から共通点が見られる。「ハズダ」が知識の確認を表すことから様々な機能を持っているのに対して「ダロウ」と「ニチガイナイ」にはできないことを確認した。

最後に、「ハズダ」を「知識の確認」という側面から述べたが、「ダロウ」を含めて韓国語には「-(u)l kesita」の似ている意味を表す形式があることから、他言語との対照を行った結果、日本語の「ハズダ」は知識確認という機能を持っているのに対して、韓国語の「-(u)l kesita」は、知識を確認する機能はなく、すでに話し手が保持している知識やつもりなどを、未確認領域に投影させることで、それが「実現する」と判断したり、これから「実現する」と話し手の意図を表したりする意味に発展していると言える。さらに、日本語では「ハズダ」と「ダロウ」が、「直接証拠の制限」という制約を受ける知識を基盤とする形式であるのに対して、韓国語には「-(u)l kesita」がその機能を担っていることが説明できた。多言語の分析の一つの方略として、いろいろな特徴を異なった観点から分析をするよりは、一つの統一的な観点からの分析ができたと考えられる。

以上のことから、日本語の「ハズダ」とは、話し手が持っている知識を自分が持っていることを強く意識し、有効であることを確認する「知識確認」を表すのが、基本的な機能であると言いたい。それは、話し手が疑問に思うことを解消するために、一番適切であり、関連のある知識を引き出し、確認することである。



(w' :話し手の知識の世界、 w'' :疑問に思われる世界)

<図3-1> 知識の確認

疑問の対象となる q_n が話し手にとって未知の事態や事柄であったり、再検証となる必要があったりする場合に、それと関連ある p_n が引き金となり、話し手の知識の中で適切な知識を選び、 Q_n であることを確認する。そして、 w' (話し手の知識の世界) の知識の Q_n が、話し手が疑問に思っている・疑っている w'' (疑問に思われる世界) の q_n を強く意識すればするほど、話し手は認識的なズレを感じることで「ハズダ」が使われやすくなるのである。

9.2 今後の課題と展望

本章では、日本語の「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kesita」における多言語の分析の一つの方略として、いろいろな特徴を異なった観点から分析をするよりは、知識の運用という一つの統一的な観点からの分析を試みたが、残された課題も少なくない。

「ハズダ」を「知識確認」という機能から統一的な説明を試みたが、「ハズダ」をモダリティ観点からどう位置付けることができるかという課題が残る。認識的判断を表すモダリティ形式として位置付けるには、「ハズダ」は説明できないところが多い。特に、未確認領域の事態を述べるだけではなく、話し手の知識や期待する内容とのズレがある場合に使われるなど、認識的判断を表すモダリティ形式と定義するのは難しい。

また、話し手の知識を使う形式の特徴としてその有効性に示すために、日本語の「ハズダ」と韓国語の「-(u)l kesita」の対照を行なったが、韓国語の「-(u)l kesita」は知識を使って未確認領域に投影するモダリティ形式だと考えられるが、日本語の場合は、確信の度合いから「ハズダ」と「ダロウ」が使い分けされている。その他にも、「トオモウ」など他にも多くの似通った形式が存在している。これは、日本語と韓国語におけるモダリティの体型が異なっていることを示唆する。本稿では、「ハズダ」をモダリティの観点からは考察していないが、今後、日本語のモダリティ研究に「ハズダ」の位置付けという疑問を投げかけると同時に、多言語における話し手の知識を使

う形式の考察と、モダリティ形式としての位置づけを考察するのを課題としたい。